



映画の感想文



大本正

◆前書き

あまり常人が見ない類の映画、誰も知らないような映画の感想文をまとめました。筆者は、誰もが見るような、半分寝ててもわかるような映画は見ません。●●●二一のように「この映画はみなさんを感動させるために作りました。だから感動してください」という類の映画は見ません。ああいう類の映画を見て感動すると言うことは、操作されているようなものです。筆者は誰にも操作されたくないと考えています。

ということで、筆者はいわゆるアヴァンギャルドな映画の鑑賞を好みます。これらの感想文は、方々のサイトやブログに載せたものです。たまに読み返すと、なかなかいいこと言うな、と感心してしまいます。これだけ書ければ自画自賛も許される。ネットはプロも見ますから、世の中を見ていると、ぼくの文章がいろいろ参考にされていることがわかります。しかし、謝礼はおろか、感謝も一切ありません。堂々と他人の仕事をパクることができるのも、ネットの利点のひとつなのかもしれません。

プロに参考にされているということは作家としての力量はあるわけだが、出版社は受け入れない。というより、筆者が生きている間は無理のようです。筆者のような人間はゴッホ、ポー、カフカのように、死んでからすべての業績を企業にパクられ、エクспロイトされるのがオチのようだ。一番最初に出した「フェニキア人の大航海時代」も、現時点での筆者による評価としては未完成なのだが、無料ながら200ダウンロードを超えてなかなか評判がいい。だが、出版社は受け入れてくれない。彼らは、筆者が死ぬのを待っているようだ。筆者が死んだ後、すべてを篡奪して世界的な名声を得、一方で大いに儲けようということらしい。これが、みなさんが知ることがない資本主義の一面です。

.....目次（あいうえお順）

アイカ・カタパ（1969年・ドイツ映画）

監督ヴェルナー・シュレーター

アイズ・ワイド・シャット（1999年・イギリス映画）

監督スタンリー・キューブリック

赤い橋のあたたかい水（2001年・日本映画）

監督今村昌平

秋日和（1960年・日本映画）

監督小津安二郎

悪魔のいけにえ（1973年・アメリカ映画）

監督トビー・フーパー

悪魔の追跡（1976年・アメリカ映画）

監督ジャック・スターレット

アップルゲイツ（1991年・アメリカ映画）

監督マイケル・レーマン

アッシャー家の惨劇（1960年・アメリカ映画）

原作エドガー・アラン・ポー

監督ロジャー・コーマン

アディクション（1994年・アメリカ映画）

監督アベル・フェラーラ

アネミック・シネマ（1926年・実験映画）

監督マルセル・デュシャン

ア・ムービー（1958年・実験映画）

監督ブルース・コナー

アメリカン・ジゴロ（1980年・アメリカ映画）

監督ポール・シュレーダー

主演リチャード・ギア

アリス（1988年・チェコスロバキア映画）

原作ルイス・キャロル

監督ヤン・シュヴァンクマイエル

アリス・イン・ワンダーランド（1966年・イギリス映画）

原作ルイス・キャロル

監督ジョナサン・ミラー

暗殺のオペラ（1970年・イタリア映画）

監督ベルナルド・ベルトルッチ

アンダルシアの犬（1928年・実験映画）

原案サルバドール・ダリ

監督ルイス・ブニュエル

生きない（1998年・日本映画）

脚本ダンカン

監督清水浩

生きものの記録（1955年・日本映画）

監督黒澤明

脚本橋本忍、黒澤明、小国英雄

淫獣アニマル（1975年・アメリカ映画）

監督ラス・メイヤー

インディア・ソング（1975年・フランス映画）

監督マルグリット・デュラス

主演デルフィーヌ・セイリグ

ウィークエンド（1967年・フランス映画）

監督ジャン＝リュック・ゴダール

ヴィニール（1965年・実験映画）

監督アンディ・ウォーホル

ウルトラヴィクセン（1979年・アメリカ映画）

監督ラス・メイヤー

エクストロ（1983年・イギリス映画）

監督ハリー・ブロムリー・ダヴェンポート

エコール（2005年・フランス映画）

監督ルシール・アザリロヴィック

エデン、その後（1970年・フランス映画）

監督アラン・ロブ＝グリエ

M（1931年・ドイツ映画）

監督フリッツ・ラング

エル・トポ（1970年・メキシコ映画） ジョン・レノンが自腹を切って全米配給

監督アレハンドロ・ホドロフスキー

エルメス・バード（1979年・実験映画）

監督ジェームズ・ブロートン

エンゼル・ショット/戦慄のバイブル（1988年・デンマーク映画） トリアーの盟友

監督ジョン・バン・カールセン

狼の時刻（1966年・スウェーデン映画）

監督イングマル・ベルイマン

お家に帰りたい（1989年・フランス映画）

監督アラン・レネ

オランダ（1993年・イギリス映画）

監督サリー・ポッター

愚か者の日（1989年・ドイツ映画）

監督ヴェルナー・シュレーター

快樂の斬新的横滑り（1974年・フランス映画）

監督アラン・ロブ＝グリエ

鏡の国のD（1981年・アメリカ映画）

監督デビッド・グラッドウエル

家族生活（1983年・フランス映画）

監督ジャック・ドワイヨン

カット・アップス（1966年・実験映画）

脚本ウィリアム・S・バロウズ

カノン（1998年・フランス映画）

監督ギャスパー・ノエ

鏡（1975年・ロシア映画）

監督アンドレイ・タルコフスキー

カルメンという名の女（1983年・フランス映画）

監督ジャン＝リュック・ゴダール

CUBE（1997年・カナダ映画）

監督ヴィンチェンゾ・ナタリ

狂気/密室の恐怖地獄（1983年・フランス映画）

監督ラファエル・デルパール

去年マリエンバードで（1964年・フランス映画）

監督アラン・レネ

主演デルフィーヌ・セイリグ

恐怖の足跡（1962年・アメリカ映画）

監督ハーク・ハーヴェイ

恐怖の火あぶり（1979年・アメリカ映画）

監督ジョセフ・エリソン

恐怖分子（1987年・台湾映画）

監督エドワード・ヤン

キング・オブ・コメディ（1983年・アメリカ映画）

監督マーチン・スコセッシ

主演ロバート・デ・ニーロ

クローズアップ（1990年・イラン映画）

監督アッバス・キアロスタミ

クインテット（1977年・アメリカ映画）

監督ロバート・アルトマン

クラッシュ（1996年・カナダ映画）

監督デビッド・クローネンバーグ

黒い罨（1958年・アメリカ映画）

監督オーソン・ウェルズ

激突！（1971年・アメリカ映画）

監督スティーブン・スピルバーグ

幸福（1965年・フランス映画）

監督アニエス・ヴァルダ

午後の網目（1943年・実験映画）

監督マヤ・デレン

コックと泥棒、その妻と愛人（1989年・イギリス映画）

監督ピーター・グリーンナウェイ

この西瓜野郎（1969年・実験映画）

監督ロバート・ネルソン

今宵かぎりは...（1972年・ドイツ映画）

監督ダニエル・シュミット

こわれゆく女（1974年・アメリカ映画）

監督ジョン・カサヴェテス

ゴンドラ（1987年・日本映画）

監督伊藤智生

光年のかなた（1980年・フランス映画）

監督アラン・タネール

ゴダールのマリア（1983年・フランス映画）

監督ジャン＝リュック・ゴダール

最後の晩餐（1973年・イタリア映画）

監督マルコ・フェレーリ

CYCLE（2006年・日本映画）

監督山本政志

砂丘（1970年・アメリカ映画）

監督ミケランジェロ・アントニオーニ

ザ・ショック（1977年・イタリア映画）

監督マリオ・バーヴァ

脚本ランベルト・バーヴァ&ダルダーノ・サケッティ

サスペリア（1976年・イタリア映画）

監督ダリオ・アルジェント

ザ・チャイルド（1977年・スペイン映画）

監督ナルシソ・イパネス・セルラドール

殺人天使（1979年・イギリス映画）

監督ニール・ジョーダン

殺人に関する短いフィルム（1988年・ポーランド映画）

監督クシュシュトフ・ケシロフスキ

サバス（1987年。・イタリア映画）

監督マルコ・ベロッキオ

主演ベアトリス・ダル

ザ・ピット（1981年・アメリカ映画）

監督リュー・レーマン

サマリア（2003年・韓国映画）

監督キム・キドク

サンタ・サングレ（1989年・メキシコ映画）

監督アレハンドロ・ホドロフスキー

散歩する惑星（2000年・スウェーデン映画）

監督ロイ・アンダーソン

地獄に堕ちた野郎ども（1969年・イタリア映画）

監督ルキノ・ヴィスコンティ

主演ダーク・ボガード、ヘルムート・バーガー

地獄の警備員（1989年・日本映画）

監督黒沢清

シザーハンズ（1989年・アメリカ映画）

監督ティム・バートン

出演ジョニー・デップ、ウイノナ・ライダー

静かなる一頁（1993年・ロシア映画）

監督アレクサンドル・ソクーロフ

実験映画（2000年・日本映画）

監督手塚真

死の王（1989年・ドイツ映画）

監督ユルグ・ブットゲレイト

死の教室（1988年・ポーランド映画）

監督アンジェイ・ワイダ、タデウシュ・カンツール

シャイニング（1980年・イギリス映画）

監督スタンリー・キューブリック

主演ジャック・ニコルソン

沙羅双樹（2003年・日本映画）

監督河瀬直美

自由の幻想（1974年・フランス映画）

監督ルイス・ブニュエル

十六歳の戦争（1970年・日本映画）

監督松本俊夫

自由を我らに（1931年・フランス映画）

監督ルネ・クレール

情事（1960年・イタリア映画）

監督ミケランジェロ・アントニオーニ

脚本ミケランジェロ・アントニオーニ、トニーノ・ゲラ

主演モニカ・ヴィッティ

ジョニー・スウェード（1991年・アメリカ映画）

監督トム・ディチロ

主演ブラッド・ピット

書を捨てよう、町へ出よう（1967年・日本映画）

監督寺山修司

知られぬ人（1927年・アメリカ映画）

監督トッド・ブラウニング

主演ジョン・クロフォード

死霊のはらわた（1987年・アメリカ映画）

監督サム・ライミ

新学期操行ゼロ（1933年・フランス映画）

監督ジャン・ヴィゴ

ストレンジャー・ザン・パラダイス（1986年・アメリカ映画）

監督ジム・ジャームッシュ

砂時計（1973年・ポーランド映画）

監督ヴォイチェフ・イエジー・ハス

スパイ（1958年・フランス映画）
監督アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー

スピリッツ・オブ・ジ・エア（1988年・オーストラリア映画）
監督アレックス・プロイヤス

スフィンクスの謎（1977年・実験映画）
監督ローラ・マルヴィ、ピーター・ウォーレン

スリ（1959年・フランス映画）
監督ロベール・ブレッソン

There's Always Vanilla（1969年・アメリカ映画）
監督ジョージ・A・ロメロ

生の証明（1969年・ドイツ映画）
監督ヴェルナー・ヘルツォーク

セリーヌとジュリーは舟でゆく（1974年・フランス映画）
監督ジャック・リヴェット

ゼロシティ（1988年・ロシア映画）
監督カレン・シャフナザーロフ

戦慄の絆（1987年・カナダ映画）
監督デビッド・クローネンバーグ

戦争は終わった（1967年・フランス映画）
監督アラン・レネ

双頭の鷲（1953年・フランス映画）
監督ジャン・コクトー

ZONE（1995年・実験映画）
監督伊藤高志

対角線交響曲（1924年・実験映画）

監督ヴィキング・エッゲリング

タイムワープ・ゾーン（1987年・イギリス映画）

監督ノーマン・J・ウォーレン

誰もいない国（1983年・イギリス映画）

脚本ハロルド・ピンター

主演サー・ジョン・ギールグッド、マイケル・レッドグレイヴ

地下水道（1956年・ポーランド映画）

監督アンジェイ・ワイダ

冷たい熱帯魚（2010年・日本映画）

監督園子温

ドグラ・マグラ（1987年・日本映画）

原作夢野久作

監督松本俊夫

トゥルーマン・ショー（1998年・アメリカ映画）

監督ピーター・ウイアー

脚本アンドリュース・ニコル

主演ジム・キャリー

抵抗（1956年・フランス映画）

監督ロベール・ブレッソン

できごと（1967年・イギリス映画）

監督ジョセフ・ロージー

脚本ハロルド・ピンター

主演ダーク・ボガード

テオレマ（1968年・イタリア映画）

監督ピエル・パオロ・パゾリーニ

主演テレンス・スタンプ

鉄男（1989年・日本映画）

監督塚本晋也

主演田口トモロウ

天使のゲーム（1964年・実験映画）

監督ワレリアン・ボロフツィク

道化師（1970年・イタリア映画）

監督フェデリコ・フェリーニ

頭頭（1993年）

脚本松本人志

ドッグスター・マン（1961～1964年・実験映画）

監督スタン・ブラッケイジ

トムトム、笛吹きの子（1969～1971年・実験映画）

監督ケン・ジェイコブス

囚われの美女（1983年・フランス映画）

監督アラン＝ロブ・グリエ

ナタリー・グランジェ（1970年・フランス映画）

監督マルグリット・デュラス

主演ジャンヌ・モロー

2001年宇宙の旅（1968年・イギリス映画）

監督スタンリー・キューブリック

西陣心中（1977年・日本映画）

監督高林陽一

人間は鳥ではない（1965年・ユーゴスラビア映画）

監督ドゥシャン・マカヴェイエフ

呪いの迷宮（1988年・イタリア映画）

監督ジャン＝フランコ・ジャンニ

呪われた絆（1975年・アメリカ映画）

監督ロバート・アレン・シュニッツァー

PARTICLES IN SPACE（1966年・実験映画）

監督レン・ライ

バートン・フィンク（1991年・アメリカ映画）

監督ジョエル・コーエン

主演ジョン・タトゥーロ、ジョン・グッドマン

蠅の王（1991年・イギリス映画）

監督ハリー・フック

バクステール/ぼくをかわいがってください。さもないと何かが起こります。（1994年・フランス映画）

監督ジェローム・ボワヴァ

ハピネス（1998年・アメリカ映画）

監督トッド・ソロンズ

パラドックス・ワールド（1988年・イギリス映画）

監督アーサー・アラン・シーデルマン

主演マルコム・マクドウエル

パリ18区夜（1988年・フランス映画）

監督クレール・ドニ

ハロウィン（1978年・アメリカ映画）

監督ジョン・カーペンター

晩春（1949年・日本映画）

監督小津安二郎

ピクニック at ハンギングロック（1975年・オーストラリア映画）

監督ピーター・ウイアー

ひとで（1928年・フランス映画）

監督マン・レイ

ひと夜の夫 (ONE NIGHT HUSBAND) (2003年・タイ映画)

監督ピンパカ・トウィラ

ヒトラー 或いはドイツ映画 (1977年・ドイツ映画)

監督ハンス・ユルゲン・ジーバーベルク

火の馬 (1964年・ロシア映画)

監督セルゲイ・パラジャーノフ

日陽はしづかに発酵し (1995年・ロシア映画)

監督アレクサンドル・ソクーロフ

ビヨンド (1981年・イタリア映画)

監督ルチオ・フルチ

脚本ダルダーノ・サケッティ

昼顔 (1967年・フランス映画)

監督ルイス・ブニュエル

主演カトリーヌ・ドヌーヴ、ピエール・クレマンティ

ファウスト (1994年・チェコ映画)

監督ヤン・シュヴァンクマイエル

ファンタズム (1976年・アメリカ映画)

監督ドン・コスカレリ

フェリーニのローマ (1972年・イタリア映画)

監督フェデリコ・フェリーニ

豚小屋 (1969年・イタリア映画)

監督ピエル・パオロ・パゾリーニ

ブラックムーン (1979年・フランス映画)

監督ルイ・マル

ブラッドハウス (1988年・アメリカ映画)

監督ピーター・レイダー

BRIGS (1964年・実験映画)

監督ジョナス・メカス

BLUE (1993年・イギリス映画)

監督デレク・ジャーマン

ブルー・ベルベット (1987年・アメリカ映画)

監督デビッド・リンチ

主演カイル・マクラクラン、デニス・ホッパー、ローラ・ダーン

フルメタルジャケット (1987年・イギリス映画)

監督スタンリー・キューブリック

主演マシュー・モディン

BREATHDEATH (1964年・実験映画)

監督スタン・ヴァン・ダー・ビーク

PRESENTS (1981年・実験映画)

監督マイケル・スノウ

ペアレンツ (1987年・アメリカ映画)

監督ボブ・バラバン

主演ランディ・クエイド、メアリー・ベス・ハート、サンディ・デニス

Heaven & Earth Magic (1962年・実験映画)

監督ハリー・スミス

ペーパーハウス/霊少女 (1989年・イギリス映画)

監督バーナード・ローズ

ベビドール (1958年・アメリカ映画)

監督エリア・カザン

脚本テネシー・ウィリアムス

主演キャロル・ベイカー

ベルニー（1996年・フランス映画）

監督アルベール・デュポンテル

helpless（1996年・日本映画）

監督青山真二

ベルリン・アレキサンダー広場（1980年・ドイツTVドラマ）

監督ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー

ペン&テラーの死ぬのはボくらだ！？（1989年・アメリカ映画）

監督アーサー・ペン

主演ペン&テラー

ベンヤメンタ学院（1992年・イギリス映画）

監督ブラザー・クエイ

僕の戦争（1967年・イギリス映画）

監督リチャード・レスター

主演マイケル・クロフォード、マイケル・ホーダーン、ジョン・レノン

マジック・クリスチャン（1968年・イギリス映画）

監督ジョセフ・マッグラス

脚本テリー・サザーン

主演ピーター・セラーズ、リンゴ・スター

魔女の宅急便（1989年・日本映画）

監督宮崎駿

魔島（1984年・アメリカ映画）

監督J・S・カーダン

幻の湖（1982年・日本映画）

監督橋本忍

ママと娼婦（1973年・フランス映画）

監督ジャン・ユスターシュ

マリア・マリブランの死（1972年・ドイツ映画）

監督ヴェルナー・シュレーター

マルチプル・マニアックス（1969年・アメリカ映画）

監督ジョン・ウォーターズ

マルホランド・ドライブ（2003年・アメリカ映画）

監督デビッド・リンチ

主演ナオミ・ワッツ

磨子（1989年・日本映画）

監督押井守

ミート・ザ・フィーブルズ/怒りのヒポポタマス（1987年・ニュージーランド映画）

監督ピーター・ジャクソン

水の中のナイフ（1962年・ポーランド映画）

監督ロマン・ポランスキー

ミツバチのささやき（1973年・スペイン映画）

監督ビクトル・エリセ

皆殺しの天使（1962年・メキシコ映画）

監督ルイス・ブニュエル

未来世紀ブラジル（1987年・イギリス映画）

監督テリー・ギリアム

ミンボーの女（1992年・日本映画）

監督伊丹十三

メサイア・オブ・デッド（1973年・アメリカ映画）

監督ウィラード・ハイク、グロリアカッツ

燃えあがる生物（1963年・実験映画）

監督ジャック・スミス

モーショントーン・ペインティング No. 1 (1947年・実験映画)

監督オスカル・フィッシンゲル

モダン・タイムス (1938年・アメリカ映画)

監督チャーリー・チャップリン

モンティ・パイソンの人生狂騒曲 (1983年・イギリス映画)

監督テリー・ジョーンズ

夜行列車 (1959年・ポーランド映画)

監督イエジー・カワレロウィッチ

やさしい女 (1969年・フランス映画)

監督ロベール・ブレッソン

山の焚き火 (1984年・スイス映画)

監督フレッド・M・ムーラー

闇のバイブル (1971年・チェコスロバキア映画)

監督ヤロミル・イレシュ

憂国 (1968年・日本映画)

監督三島由紀夫

要塞警察 (1977年・アメリカ映画)

監督ジョン・カーペンター

欲望 (1968年・イギリス映画)

監督ミケランジェロ・アントニオーニ

汚れた血 (1983年・フランス映画)

監督レオス・カラックス

羅生門 (1950年・日本映画)

監督黒澤明

主演三船敏郎、京マチ子

ラ・ジュテ（1962年・フランス映画）

監督クリス・マルケル

ラスト・ムービー（1971年・アメリカ映画）

監督デニス・ホッパー

猟奇殺人の夜（1980年・フランス映画）

監督ジャン・ローラン

レイプ（1968年・イギリス映画）

監督ジョン・レノン&オノ・ヨーコ

ロスト・ハイウェイ（1997年・アメリカ映画）

監督デビッド・リンチ

ロリータ（1962年・アメリカ映画）

監督スタンリー・キューブリック

ロング・グッドバイ（1973年・アメリカ映画）

監督ロバート・アルトマン

ロビンソンの庭（1987年・日本映画）

監督山本政志

ロザリー・残酷な美少女（1972年・アメリカ映画）

監督ジャック・スターレット

和解せず（1962年・ドイツ映画）

監督ジャン＝マリー・ストロブ&ダニエル・ユイレ

惑星ソラリス（1972年・ロシア映画）

監督アンドレイ・タルコフスキー

わが兄弟の悪魔の呪文（1969年・実験映画）

監督ケネス・アンガー

忘れられた人々（1956年・メキシコ映画）

監督ルイス・ブニュエル

私の愛した魔女（1987・イギリス映画）

監督ボブ・ホスキンス

わらの犬（1971年・アメリカ映画）

監督サム・ペキンパー

主演ダスティン・ホフマン、スーザン・ジョージ

あ行

「アイカ・カタパ」

監督ヴェルナー・シュレーター

作品紹介：金髪と黒髪の2人の青年が陰と陽を表し、現代人の自己対話の様態を再現している。

シュレーターは、死者の代弁として古いオペラのレコードを用いている。誰も知ることがない「亡霊の思い出」に形を与える試みだ。ただ、低予算なため、後の「愚か者の日」「マリーナ」などの完成度と比べると、作品としては未熟である。ただ、陰と陽を駆使する様子はアントニオーニの話法を完全に理解しているといえる。

.....

「アイズ・ワイド・シャット」

監督スタンリー・キューブリック

作品紹介：主人公である医師は、妻の告白に打ちひしがれ、夜の街をさまよう内に夢と現実の狭間に沈んでいく。

真の世界の描写にはリスクがある。だが、その触れない方が良いものにあえて触れ、描ききろうとするキューブリックの気合。ラストの余韻に秘められた迫力。「真実の追求より、家でF●CKでもしてる方が安全ですよ」。そんな強い皮肉が込められていた。規格通りに生きてきた男が、妻の本音に触れたのをきっかけに世界の正体を知る。身近な人間に本音を吐露されることもなく、万事規格通りに生きることが出来れば世界の正体を知ろうということもない。それを幸福と呼ぶのだろう。

.....

「愛の唄」

監督ジャン・ジュネ

作品紹介：単なる同性愛者はきもいが、ジュネの反社会的な筆致で埋め尽くされた画面は後光を帯びている。

カルトの中のカルト。禁忌かつ、挑戦的な作風で貫かれている。ジュネは、少年時代に売春、泥棒などで生計を立てていた異端の作家である。長じてジャン・コクトー、サルトルなどの才人を魅了したが、そこに存在価値がある。これは、その伝説の作家ジャン・ジュネによる個人映画だ。ゲイ・フィルムであるため内容はきもいが、アンダーグラウンド文化を切り拓いたカルト映画の古典として重厚な存在感を放っている。この作品にあらすじはあるが、セリフも音楽もなく、無音である。

.....

「赤い橋のあたたかい水」

監督今村昌平

作品紹介：全てを失った主人公は、知り合いのホームレスを介して、東京から氷見市に移り住む。

失業して東京で職探しを続ける男、笹野はタロウじいさん（ホームレス）の夢と化す。どういことかといえ、一般社会人の認識だと失業者は実在しない。夢のような存在でしかないのだ。おまけに、彼は妻と子供と別居中であり、持ち家も売却済みである。職も家族も家も無い男は、存在しないも同然なのだ。そんな笹野は富山県氷見市に流れ、そこでも地元の人々のファンタジーと化す。

笹野は、生前のタロウじいさんの「赤い橋のそばにある家にお宝がある」という言葉通り赤い橋の傍にある家を見つける。開店休業中のまんじゅう屋であるその古い家は、老人の肉体のようである。その古い家屋の中での2人の熱い戯れは、老人の体内にみなぎる性的妄想、空想なのだ。町の人々も、みな夢を見ているのが興味深い。例えば、アフリカからマラソン留学している黒人には街の活性化という願望が反映されている。夢破れた笹野は、愛する人と暮らすことが出来なかった夢破れたミツとタロウじいさんの思い出を演じ、他の老人たちはミツの若かりし日を想い、その思い出に身を焦がす。

.....

「アギーレ/神の怒り」

監督ヴェルナー・ヘルツォーク

作品紹介：コンキスタドールによる南米文明の侵略時代が舞台として設定されている。

本当に怖いから怖い芝居は必要ない。本当にしんどいからしんどい芝居は必要ない。険しい絶壁、荒れ狂う川、深いジャングル。そんな人跡未踏の地を、歩きにくそうな中世の衣装、重い鎧を着せられて行軍することを俳優陣に強いるヘルツォーク。彼は役者に演じてほしくない、演じさせたくない。プロの俳優の演技ではなく、本物の人間の感情が欲しいのだ。ということで、ここに記録された映像は、当時の忠実な再現ということができる。心もとないイカダで不気味に澱んだ川を下る俳優たち。落ちたら本当に死ぬだろう。そこには、自然の驚異に芯からビビる人間の姿がある。撮影スケジュールに耐えられずに脱落していった役者から順々に死んでいる印象がある（笑）。俳優達を和ませるためにインディオが奏でる笛の音が、思いがけない笑いを呼びます。

.....

「秋日和」

監督小津安二郎

作品紹介：結婚適齢期に達した、父親不在の母子家庭が舞台となっている。

近い人ほど遠く、遠い人ほど近い。これが小津が終生追求した研究テーマである。当時にも結婚に前向きでない人々がいたが、小津はそういう人々の内面に肉薄している。しかして、それらの分析は当時の日本社会や市民の日常生活に対する批判となっている。ヒロインあやは国家から与えられた「幸せな家族」というファンタジーを必死で演じようとしている。その「完全なファンタジー」を汚されると、あやは母親に怒りをぶちまける。

この一件で小津は、あやの亡き父親の人となり、そして父親と家族の関係が希薄であったことを静かに指摘する。世界中の芸術家に影響を与えた卓越した映画言語のひとつである。「秋日和」というタイトルは、和やかで穏やかなイメージを想起させる。だが、この作品の核には、当時の日本社会（民主主義、資本主義）が内包していた問題の暴露がある。と、日本の行く末を案じている小津だが、一方では、怒るあやをたしなめる友人のゆりこに希望を見ている。

.....

「悪魔のいけにえ」

監督トビー・フーパー

作品紹介：テキサスに住む5人の若者が、異常な喰人鬼家族に遭遇するホラー映画の先駆的作品

。公開当時、スピルバーグに賞賛され、フィルムは博物館に収蔵されている。

サリーとフランクリン姉弟が住んでいた家の至近距離に「彼ら」が住んでいる。なぜか、この事実にはあまり触れられることがない。それを考えることで、なぜフランクリンが不具なのか、なぜサリーの家族が引っ越さなくてはならなかったのかを知ることが出来ます。つまり、この作品のテーマは「再会」なのだ。世界を狂気と笑いの渦に巻き込んだ名作の裏には、ぼくたちにも身近な家族問題が息づいていたのだった。

.....

「悪魔の追跡」

監督ジャック・スターレット

作品紹介：ピーター・フォンダ扮する主人公は、親友夫妻と共に、テキサスの田舎にバカンスに出かけた。彼らは、そこでカルト教団による人身御供の現場を目撃する。「悪魔のいけにえ」で身体障害者を演じた俳優が、チョイ役で顔を出している。

陰湿で不安を煽る展開が刺激的である。保養地に辿り着いたピーター・フォンダ扮する主人公の彼女は、怪訝な視線を投げかける異様な人々に、集団で監視される。プールで、酒場で次第にパラノイアに蝕まれていく姿がリアルだ。この映画が内包する悪夢的センスは、その手の映画が好きなかの中でも別格である。ジェームズ・ディーンの友人だったレナード・ローゼンバーグの音楽も、画面に重みのある、不吉なタッチだ。彼らは「悪魔の追跡」を換骨奪胎した作品を「心霊探偵オカルト団」で1作モノにしていました。

.....

「アップルゲイツ」

監督マイケル・レーマン

作品紹介：種の危機を救うため、アマゾンに生息する巨大な昆虫が、アメリカ社会に対して核によるテロ攻撃を仕掛けるコメディ。晩年の淀川長治が絶賛していた。

巨大な昆虫家族が、原子炉を破壊するためにアメリカの中流家庭を模してコミュニティに侵入する。虫たちのカルチャーショックが抱腹絶倒であるが、しっかりアメリカ社会に染まる点が非常に嘲笑に富んでいる。昆虫たちが人間との戦争ではなく、アメリカ人の生活を真似するだけで

破滅していく。その様子は、皮肉以外の何者でもない。だが、問題提起に終始するのではなく、ギャグを追求している点に好感が持てます。どんなことも笑い飛ばせるのは強みです。監督マイケル・リーマンはアメリカの良心といえるだろう。

.....

「アッシャー家の惨劇」

原作エドガー・アラン・ポー
監督ロジャー・コーマン

作品紹介：B級ゴシック・ホラーながら、原作に忠実であるため、深みがある。

感音楽とヴィンセント・プライスの演技が大げさで笑える。シャンデリアが落ちたり、手すりも崩落するあたりは呪いじゃなく、ただの老朽化じゃないの？と。コーマンの演出がイマイチということですね。ただ、原作を読んだことは無いにも関わらず、この映画は原作に忠実なんだと思った。何となく、ポーのことがわかった気がしたからだ。つまり、この作品には、ポーの内面が如実に反映されている。特に、ポーと10歳以上、歳が離れた妻との関係だ。

13歳でポーと結婚した彼女は若くして亡くなっているが、ポーは妻を救いたかった。だが、一方ではあきらめていた。その、諦めの境地を基調とした罪悪の念が、作品の核となっている。アッシャー家の兄と妹。これは、性的関係が無い夫婦と捉えることが出来る。つまり、ポー夫妻のことだ。また、アッシャー家の兄には執筆当時のポー自身、妹の恋人である青年にはポーの青年期が投影されている。記憶のパラドックスである。シュールリアリズムならではの醍醐味。デビッド・リンチは、ポーの「アッシャー家の惨劇」を読んで、「ブルーベルベット」の着想を得た可能性がある。

.....

「アディクション」

監督アベル・フェラーラ

作品紹介：ベトナム戦争に投資したアメリカ市民、或いは、大都会ニューヨークに潜む吸血鬼たちの物語。

「自己発見はみずからを殺すのと同じだった」。大学の講義でベトナム戦争のフィルムに触れてヒロインが見たものは、アメリカが人肉を引き裂いて血をすすめるのを好む怪物の国であるという

ことだ。だが、彼女は更にショッキングな事実を目の当たりにする。それは、自分もまたその一味だという悲しい事実である。アベル・フェラーラはじつに骨のある仕事をしています。「邪悪な者が悪行を働いても改めて邪悪とは呼ばれない」。リリ・テイラー扮するヒロインとアナベラ・シオラ扮する吸血鬼の会話が印象的です。

.....

「アネミック・シネマ」

監督マルセル・デュシャン

作品紹介：さまざまな円形の図形を、ただグルグル回転させている実験映画。

デュシャンは円形の図形をひたすらグルグル回転させている。これは、少ない要素から多様性を見出そうとするミニマルアートの走りであり、視点を変えることで見えてくるものと見えなくなるものの研究である。

.....

「ア・ムービー」

監督ブルース・コナー

作品紹介：無関係なシーンをつなぎ合わせただけの伝説的な実験映画。

ヌードフィルム—インディアン討伐劇—スピードカーレース—島の原住民—ドキュメンタリー—飛行船—高層ビルでアクロバット—海軍の演習—マリリン・モンロー—核爆発—大波に乗るサーファー—変わった自転車のレース—モトクロス—政治家のアップ—橋の崩落—空中戦—ムッソリーニのリンチ—戦場の屍—核爆発—象の解体—海中遊泳—end。という、壮大なクラシック音楽をバックに、関連性のないイメージを羅列しただけの映画です。膨大な既存フィルムの中から必要なものだけを探し出す作業は困難だったと思われるが、ブルース・コナーはこの映像の掛けあわせで望んでいた作用を導き出せたのだろうか？

.....

「アメリカン・ジゴロ」

監督ポール・シュレーダー

作品紹介：リチャード・ギア扮する主人公はジゴロを稼業としている。自信過剰な彼が、次々に妙なトラブルに巻き込まれ、自信を喪失していく。

リチャード・ギア扮するジュリアンの物語と認識されているが、それは間違いです。コレはじつは、ジュリアンをひとりじめしたい裕福な女性の物語です。もちろん、その女とはローレン・ハットン演じるミシェルです。劇中、出てこないが、ロスきっての名ての探偵が彼女に雇われる。そしてジュリアンは知らない間に身边を調査され、ワナを張り巡らされてしまうのだ。最初の2人の出会いもちろん最初から仕組まれていた。アレは偶然ではない。だが、なぜジュリアンは気づかないのか？それは、謀略とはそういうものだからだ。気づかれた謀略は、謀略として成立していないのだ。

ポール・シュレイダーも、あくまでジュリアンの目線で物語を展開しているため、観客もジュリアンのようにはられたワナに気づかない。むかしむかし、ミシェルはどこかでジュリアンを見て一目惚れした。だが、彼はモテモテな上に言うことを聞かないタイプだ。ひとりじめするためには、彼を周囲から切り離すことが先決だと探偵に助言されると、探偵は、彼の仕事仲間や顧客と裏で口裏合わせをし、集団で彼を敬遠させる。そして、とっておきが殺人犯の汚名を着せること。コレで彼の生活、心、何もかも破壊することになるのだ。これには警察も協力を惜しまない。一見、日常的ではないが、コレは普通のことです。

警察に追われ、友達は知らん顔、あるはずのアリバイも旧知の婦人に否定され、自信満々、意気揚々だったジュリアンの自尊心はボロボロに傷ついていく。そして、もう限界だろうというところを見はかり、ミシェルがアリバイを提供し、あっという間に一件落着となる。しかし、ジュリアンはこれで、生涯ミシェルには頭が上がらない。その上、ジュリアンはこれを謀略と気づいていない。ミシエルの愛が自分を救ったと信じている。怖いですね。

.....

「アリス」

原作ルイス・キャロル

監督ヤン・シュヴァンクマイエル

作品紹介：生身の俳優はアリス役の少女だけで、残りはシュヴァンクマイエルが操る不気味な人形たちで占められている。

チェコのアヴァンギャルド作家シュヴァンクマイエルの「アリス」は、ジョナサン・ミラーの「アリス」と共に原作者ルイス・キャロルの「ふしぎの国のアリス」の正統なアダプテーションと

いえる。未知の世界なんて身近なところにあるもんだ、というものの見方。ほとぼしるシュルレアリスムの醍醐味。人形たちは悪意に満ちていてかわいくないし、詩心を優先させているため、少々シニカルで常人を寄せ付けない感じがあります。特筆すべきは魔術的ともいえる単調な間（ま）だ。最初はこの間に耐えられないのだが、ふしぎなことに、次第にハマっていきます。不条理映画の傑作です。

.....

「アリス・イン・ワンダーランド」

原作ルイス・キャロル

監督ジョナサン・ミラー

作品紹介：個人的に、イギリスの俳優は世界最高だと考えている。その一流どころがこの作品に総出演している。サー・ジョン・ギールグッド、マイケル・レッドグレイヴからピーター・セラーズ、ピーター・クックに至るまでの顔ぶれが揃っている。また、無名時代のエリック・アイドルが顔を見せている（10年経って気付いた）。BBCテレビ製作。

この作品はダドリー・ムーアやピーター・クックと共にコメディ集団のメンバーだったジョナサン・ミラーが監督しています。音楽はラヴィ・シャンカールが担当。本国BBCで製作された、これぞ「ふしぎの国のアリス」の正統なアダプテーションといえる会心のできです。モノクロで魅せるスミからスミまでブリティッシュな外観や美術が素晴らしい。特筆すべきは、きぐるみや特撮が一切使用されていないことだ。つまり、その分、アイディアでカバーしているのだ。シュルレアリスムを理解している人の撮り方といえるでしょう。

導入部が非常にスマート。思春期の少女。彼女は、変化が著しい自分の内面に目を向ける。そこからおなじみ、ウサギさんを追いかけて不思議の国に侵入する一連のシークエンスがおもしろい。シャンカールのインド音楽も意外にマッチングが良く、ビクトリア朝の雰囲気壊すことなく、逆にイメージをシャープに研ぎ澄まし、洗練した印象を与える。アリス役の少女がまた一般的なアリスのイメージと異なり、無愛想なのだが、それが逆に生々しく、より原作のアリスに接近している。また、ピーター・セラーズやピーター・クックといった達人たちのナンセンスな笑いの解釈は堂に入っているといえます。ルイス・キャロルが生きていたら泣いて喜ぶこと間違いなしです。

.....

「暗殺のオペラ」

監督ベルナルド・ベルトルッチ

作品紹介：暗殺された父の愛人の招きにより、息子が父の故郷を訪れる。だが、青年は奇妙な人々に遭遇し、翻弄されていく。

ファシズムも怖い、個人の憎悪の方が思想よりも危険なこともある。主人公の青年はその事実に触れた途端、ある女性のファンタジーの虜となる。青年アトス・マニャーニは、反ファシズムの闘士・英雄であった亡き父アトス・マニャーニの元愛人に招待されて故郷に帰るが、街はよそよそしく、暗殺犯と噂される地主の洗礼も受ける。反ファシストの闘士だった父は本当にファシストによって殺されたのか？青年の疑念とは裏腹に、夏の新緑が目鮮やかだが、一部始終は夏の熱気が見せた幻影のようでもある。青年の存在は、年老いた愛人のまなざしに秘められた希望のように儂い。ベルトルッチの熟達した筆致はシンプルながら雄弁である。

.....

「アンダルシアの犬」

原案サルバドール・ダリ

監督ルイス・ブニュエル

作品紹介：ダリ絵画の映像バージョンの如き、盟友ブニュエルによる実験映画の古典。

果たしてこの作品。深層心理の奥の奥に隠され、密かに揺らめく、ぼくらのダリおじさんを蝕む原風景、或いは幼少の頃に切り刻まれて以来、今尚現れては消え、時には魅了したり打ちのめしたりする心の断片なのではないでしょうか。ダリの作品に対する重いとプロセス。それはいつでもちりぢりに散った自分を発見するための苦闘だったに違いない。ナンセンスの王道を行くヤケクソ気味のギャグセンス、いまだ斬新。そして物語を拒否している分、リズムが強調されており見てて心地よい。

.....

「生きない」

脚本ダンカン

監督清水浩

作品紹介：自殺志願者が集合した極秘旅行ツアーで起きる悲喜こもごも。

境遇が同じだと分かり合えるという、最期を前にして通じ合う人々の様子が哀愁を湛える。ギリギリの状況下での希望と絶望のせめぎあい。感銘を受けました。ダンカン氏のモノの見方は優れた観察眼が基調になっているのがわかる。死を見つめることで、逆に生を理解しようとする荒療治な作風とダンカン氏の鬼のような演技が見る者を捉えて離さない。後半、逃亡犯の乱入など、詩情と名作の風格が漂う。生（せい）のファンタジー性を排したシビアな面、絶望しながらも完全には絶望していない人々の内面の変化が喜怒哀楽豊かに描写されていた。ラストは超ブラック。

.....

「生きものの記録」

監督黒澤明

脚本橋本忍、黒澤明、小国英雄

作品紹介：三船扮する中島は老齢に達し、自分の指示に耳を貸さない実子、隠し子たちに対してイライラを募らせる。そして、中島は唐突に放射能の話題を持ち出し、放射能汚染から逃れるために日本を脱出しなければならないと喚きだす。

黒澤、小国、橋本の3人は「羅生門」と同様、この作品でもウソをついている。それがわからないと全く意味がわからないだろう。つまり、三船扮する中島は放射能を恐れているわけじゃない。彼が何に対して恐怖を抱いているか知ること、知った者は悲哀を感じずにはいないだろう。と同時に、黒澤以下、脚本を担当した3人のまなざしの優しさにもうたれる。工場を経営している中島は、若い時はバリバリ働いて、妾を作りながらも家族たちはみな自分に従っていた。怖いものは無かった。ところが老い始めてからこっち、どうなんだ。妾を作ったり、いろいろ迷惑をかけた手前、家族に頭があがらない。引け目もあるが、20代～30代と思われる子供たちに脅威を感じている。経営に関して自分に意見も言う。中島は、若さの喪失、老いに危機を感じているのだ。

「ブラジルに行けば何とかなるんじゃないか」という老人の儚い夢。若い頃に戻れるんじゃないか。子供たちもまた昔のように自分を尊敬し、恐れ、服従してくれるんじゃないか、という裏づけの無い希望。それらの懸念を口に出すこと、認めることが怖い。だから代わりに放射能が怖いと言う。その老人の悲哀。

一方では、家族を振り回す中島には国家が重ね合わせられている。権力はひとりで夢を見るべきと言う批判だ。「羅生門」でも全く同じだったが、志村喬の役回りがおもしろい。志村扮する歯科医は中島に対して同情的な視線を投げかける。なぜなら彼は、みな中島を批判するのを見て、同時に自分に対する批判を見るのだ。みなが老いに恐怖を感じる。老齢に差し掛かった中島だ

けではない。若者もいずれみな老いる。だが、中島家の子供たちや妾の子供など、若者たちは老いた中島に自分を見ない。区別している。批判する対象に自分を見る者への同情と、批判する対象に自分を見ない者に対する批判である。格子窓のシーンは非常に示唆に富む。中島だけでなく、子供も従業員もみなひっくるめて「みんな同罪だ！」みたいな。日本の知性、黒澤、小国、橋本のモノの見方に感嘆を禁じえない。世界の優れた作家はみんなマネしてる。

.....

「淫獣アニマル」

監督ラス・メイヤー

作品紹介：暴力とセックスの乱れ打ち。カルト・ムービーの真髄。

男は平気で女を殴り飛ばすわ、女も口が汚いわで隠し事がなくて見てて痛快です。しかし、メインのヒロインはその口の悪さが祟って殺害されてしまう。それまでは、能天気で雰囲気も明るかったのに殺人シーンになるといきなり怖くなっちゃって、真に迫っていました。老農夫と若い女の農場でのハッスル。路上でマッチョな黒人の上になって叫ぶ黒人女のシーンも異様。だが、ラストに近づくにつれて、なぜか幻想的な神々しささえ感じさせる雰囲気を帯びはじめます。定まったテーマなどなく、自在に変化していく映画。このおっさんもまた、詩人。

.....

「インディア・ソング」

監督マルグリット・デュラス

作品紹介：舞台設定、人物設定、時代設定の詳細が不明な、美しい幽霊映画。

滝に打たれる思い。ここにあるのは、マルグリット・デュラスという詩人のヴィジョンのみである。これを楽しむのは、詩心のある人にしか出来ない高度な遊びと言えます。デュラスと同じ視点でものを見ることを要求されるわけだし。というか、この無慈悲な女流詩人は、観客に詩人になることを要求している。打たれ甲斐がある。鑑賞を超えてある種、経験です。

.....

「ウイークエンド」

監督ジャン＝リュック・ゴダール

作品紹介：あるカップルが、遺産相続のために故郷に向かう道中で遭遇する不可解なトラブルの数々と、シュールな言動をする人々との出会い。

トラブルが起きるから苦悩するのか、それとも、苦悩しているからトラブルが発生するのか。道路にあふれた人々は身体を失った魂のようだ。属すべき身体を求めてさすらう魂が、身体を見つけることが出来ずに滅んでいく。その可視化である。道は、知らない内に彼らを傷ついた自身の内面に導いていた。心のクラッシュ。ひしゃげた車体、燃える車体は、魂を失った身体そのものである。

.....

「ヴィニール」

監督アンディ・ウォーホル

作品紹介：バージェス原作「時計仕掛けのオレンジ」が下敷きになっている。カメラは固定され、演出、演技は期待すべくもない。アンダーグラウンドな雰囲気濃厚な実験映画。ウォーホルが撮っているというだけで価値がある作品。

通常の形式を踏襲していないだけに、ウォーホルに興味のない、カルトという響きにピンと来ない人には無用の映画だ。カメラは不動だが、俯瞰の構図は見ていて飽きないので、カメラの位置、構図は練りに練られたと思われる。役者の演技はにわか芝居のようだが、風格だけはどの古典にも引けをとらない。もともとアンソニー・バージェスの「時計仕掛けのオレンジ」を下敷きにしており、最初こそ物語り通りに進んでいたが、最終的にはホモのSMパーティーで終わる。イーディ・セジウィックは途中でトイレに立つし、俳優はカンペ読むし、カメラは固定されているので、俳優たちはフレームから頻繁に外れるし、外を走る車のエンジン音も聞こえてくる。ということで、一般の映画ファンにすれば信じられないことだらけだが、ウォーホルのまなざしは、それらすべてを許容する力を持つ。メジャーに対する挑戦、常識に対する反抗という、映画・物語とは無関係な要素がこの作品を成立している。カルト映画ファンはそこに感動するのだ。

.....

「ウルトラヴィクセン」

監督ラス・メイヤー

作品紹介：ポルノとして製作されたが、一種独特なポップな味付けが、カルトの古典という風格を与えている。

胸が大きい女がセックスしまくるだけの映画なのですが、ただのポルノではない。ポップ、かつアバンギャルド。メイヤーはサービス精神旺盛でとにかく楽しませてくれます。下品なジョークや不愉快な言動も、そのセンスのよさゆえに逆にキマっているし、ただ本番をやっているだけのAVに比べ、こっちの方がよほどいやらしい。メイヤーの映画に共通の原動力とは、アソコでしかものを考えないという純粹さである。無意味の底力。だから、どんな不道德の極みみたいなシーンでも悪意は全く感じられない。何も考えてないんです。

.....

「エクストロ」

監督ハリー・ブロムリー・ダヴェンポート

作品紹介：軽いSF風味と重厚な人間ドラマを融合させた、知られざるイギリス産カルト・ホラー。

緊迫感がひしひしと伝わるシビアな人間ドラマが基本にあります。監督ハリー・ブロムリー・ダヴェンポートの観察眼が正確なので、各キャラの心情表現が迫真に迫っています。複雑な家庭環境がこどもに見せた悪い夢。そういう子供の分析ともいえるので、邪悪。とくに有名な俳優は起用されていませんが、みな地味ながら実力派だといえます。ピエロとこどもの不気味なお遊戯。怪獣やUFOの造型等、悪夢的イメージが出色のデキ。監督の怪奇センスは斬新だ。もっと世に出てもらいたい作家のひとり。意味不明なラストに至っては絶賛したい。

.....

「エコール」

監督ルシール・アザリロヴィック

作品紹介：少女が棺桶から誕生する世界でおきる、謎の少女たちによるシュールな物語。

昼間は親しみやすいのに、夜になると打って変わってよそよそしい田舎の夜。森の静寂は、幼年

期に知っていたが成長して忘れてしまった禁忌を思い出させる。そして、世間と隔絶したロケーションは、まるで孤独な老女の内的世界のようなのである。少女たちは老女たちの記憶だろうか？少女だらけの風景は、御伽噺の世界を連想させ、幻想的であるが「服従が幸福になること」という教師の言葉が、幻想の裏に隠蔽されたモノを突きつける。

舞台上で蝶の踊りを舞う少女達を見に来た人々は観客なのか？それとも幼年期に想いを馳せている人々なのか？老女の思い出を再現しているような少女たちの日常は、そのまま老人の内面の構築なのだ。少女の一人、アリスが壁を登っておとぎの国からの脱出を試みるが外では猟犬が吠え、銃声も聞こえる。まるで、彼女の行く末を暗示しているようで詩的。ルシール・アザリロヴィックは禁忌を描く手腕に長けている。小川のせせらぎを見る目でさえいやらしい。

.....

「エデン、その後」

監督アラン・ロブ＝グリエ

作品紹介：ロブ＝グリエにあっては、あらすじはあってないようなものだ。

エデンという大学が舞台。講義室はモダンなつくりで、小さな部屋が集まっておりどの部屋の壁もモンドリアンの絵画のようだ。その図形の合間に、ガラスや鏡、出入り口が配され、まるで人工的に幻覚を作り出す目的で造られた部屋のようなのだ。あ、誰かいると思ったら、鏡に映った自分だったり、あ、鏡に映った自分かと思ったら、ガラスの向こうにいる他人だったりする。この部屋は、認識能力に混乱が生じるのだ。若い教授は、その部屋でクスリを用いて女学生に幻覚を見せたりして、全員で性と死を模索する。クスリをナメて幻覚を見る女学生は、血と死と拷問の幻想にうなされる。あまりに現実味を欠いた成り行きに、じつは、この幻覚を人工的に作り出すことができる部屋に、たくさんの亡霊が迷い込んだのかもしれない、という印象を受ける。講義が終わったあと、つまり「エデン、その後」だが、学生たち（亡霊たち？）は、巨大な工場で追いかけたり追いかけられたりを演じる。いつしか舞台は北アフリカに移り、ある写真に写る家屋を女学生が探し始める。その家だけでなく、その地方の家屋はすべて白作りで、窓や出入り口だけが青い。そのコントラストが美しいが北アフリカに来ていた教授は青い服を着ている。まるで、青い扉は彼の内面に通じる扉のようだ。白い家屋での性の戯れは、同時に白を基調にした肌色、原色の赤、青などのコントラストの戯れでもあり、鮮烈。ヨーロッパ人にとって地中海を隔てた対岸の北アフリカは、死とエロスの幻想が宿る場所なのだろうか？彼らは、地中海の対岸の風景に鏡を見た自分を見るのか？

.....

「M」

監督フリッツ・ラング

作品紹介：幼女誘拐殺人犯が横行する中、人々は疑心暗鬼になっていく。古典ながら、ナチスの台頭を予感させる不穏な空気が作品をリアルなものにしている。

つらい当時の世相を反映して楽になりたがっている民衆。そこに生活圏内を徘徊する幼児連続殺人鬼が出現する。はじめこそ、犯人探しに協力していた大衆も、やがて、誰でもいいから見つけて敵に仕立て上げ、自分たちの生活上の不満をぶつける方向へと助長していく。犯人は当然罰せられるべきだが、犯人に迫る集団は、もはや男自身が犯した罪や、犠牲者と遺族の抱える問題には無関心だ。これは当時、ナチスが台頭しつつあったことを考えると興味深い。ラングの目的は、殺人鬼の恐怖ではなく、意志を喪失した集団の恐怖を描くことだった。

.....

「エル・トポ」

監督アレハンドロ・ホドロフスキー

作品紹介：「戦う男はお母ちゃんを忘れろ」。当時、この映画に感銘を受けたジョン・レノンも、自腹を切って全米興行の権利を買って出た。また、ウォーホルが絶賛し、日本では、寺山修司がホドロフスキーの世界観に惚れ込み、絶賛している。

まずは自己否定に始まり、次に文明批判ときた。人間の本質を見極めようとする者は、最終的に権力批判に辿り着くのだ。エル・トポの世界には、普段は封印されているモノが氾濫している。総出で登場のフリークス。例え心が醜くくても、心は見えないのだから隠せばよい。しかし、フリークスは欠けた身体を隠すことは出来ない。町人とフリークスの出会いは鏡の前に立つのと似ている。ホドロフスキーは、「目をそらすな、これがお前らの本当の姿だ」と言わんばかりだ。

.....

「エルメス・バード」

監督ジェームズ・ブロートン

作品介绍：あらすじはない。実験映画の珍品。

この作品。アバンギャルド映像作家ブロートンによる世にもチン妙な短編映画である。ぼくもいろいろヘンな映画を見てきたが、世界で二番目に変な映画ではないかと思う。どういう作品かといえば、陰茎が勃起するサマを記録しただけの作品なのだ。バックではブロートンが詩を朗読している。陰茎万歳という性器を称える詩で、卑猥なことを言っているわけではない。

画面は半分に区切られ、右側が白で左側が黒と言う画面構成になっている。真っ白な陰茎は黒い空間を悠然と横切っていく。普通に言えば、よくこんなバカなことやってられるな、ということになるが、コロンブスの卵と言うか、誰かがやっていそうでやっていない試みではある。

.....

「エンゼルショット/旋律のバイブル」

監督ジョン・バン・カールセン

作品介绍：成人したデンマーク人青年が、父を求めてアメリカに渡る旅に出る。しかし、彼はその途中で幻のような街の虜になってしまう。

どこからやってきたのか、その町には、もう、とうに終わっている燃えカスのような連中や、終末思想に囚われ、救済を叫ぶ人々が住んでいる。そこはロスに向かう人々の乗った列車が通過し、長距離バスが立ち寄るだけの何もない街だ。店にもモーテルにも誰もいない。青年は、そこで同じようにとらえどころのない少女ルーシーに出会う。

ルーシーの父親が興味深い人物で、人類救済の親玉でもあるのだが、来るべき日に備えて町民による軍隊を組織し、核シェルターを製造している。だが、そんなことをしても無駄だろう。なぜなら、彼の敵は外にはいない。内に秘められているからだ。何もかも受け入れる妖精のような、存在自体が夢のようにあやふやで、つかみ所のない少女ルーシー。パトリシア・アーケットはそんな少女を好演している。監督は無名だが、かのラース・フォン・トリアーとは同郷の仲間、デンマーク時代には、一緒に仕事もしている。

.....

「狼の時刻」

監督イングマル・ベルイマン

作品介绍：主人公が孤島で狂気に囚われる。彼が出会う人々は現実なのか、幻なのか？

マックス・フォン・シドーとリヴ・ウルマン演じる夫妻が島に到着したあとの、小船の戻り方が気になる。だが、ベルイマンはきちんと意図しているだろう。孤島の風景や、奇妙な島の住人には男の心の動きが重ね合わせられている。あの島は、人の内面が反映される恐ろしい島なのだ。加工された肉のような質感を持つ城の壁に注目したい。人はいくつもの仮面を秘めているが、城でのあの奇異な晩餐会。主人公が、次々とヘンな人々と対話する様は、苦悩し、思いつめ、自己嫌悪に蝕まれていく心理過程に似ている。だが、内面に巢食うあの嘲笑的な人々を殺すことは出来ない。それは、同時に自殺を意味するからだ。彼に出来ることは、せいぜい、鏡にヒビを入れることくらいだ。

たとえ、いくつになっても少年期に受けた傷がうずくこともあるだろう。だが、過去は身体の一部なので容易に切り離すことは出来ない。彼らはみな、骨の髄にまで染み込んでおり、男の意志に反して混乱を呼ぶのだ。罪の意識に勝てる人間はいない。それは人に深い傷を負わせることもあるが、イングマル・ベルイマンにはその傷が見える。詩人には常人には見えないモノが見えるのだ。

.....

「お家に帰りたい」

監督アラン・レネ

作品紹介：なかなか家に帰れないおじさんの物語。

みんながみんな、全く同じ夢を見ているということが、不幸の始まりなのかもしれない。この映画を見ているとそう思いました。でもそうじゃないと現代人が目指しているものなんて成立しない。目指したくて目指してるわけじゃなく、目指すように仕向けられているんだけど。フェリーニ調の躁病的騒々しさ。徐々に染み出すキャラ達の悲哀。心に残る一本です。

.....

「オルランド」

監督サリー・ポッター

作品紹介：

人格が性に、精神性が肉に勝ること。フェミニズムは思想というよりはキリスト教式の新ビジネ

スという印象しかないが、この作品にはそういう狭義のフェミニズム、女性が怠ける口実のためのフェミニズムは描かれていない。サリー・ポッターの唱えるフェミニズムは男性にも適応可能なのだ。というか、そうなるとフェミニズムは不要じゃないかと思えます。肉や権力から解放された魂の自由が描写されている。精神の飛翔は、時間を無効にするのだ。

.....

「愚か者の日」

監督ヴェルナー・シュレーター

作品紹介：幻の彼氏アレキサンダーの無理解によって精神に異常を来たしたヒロインは、精神病院に入院させられる。

精神病院に変化したヒロインの心。受けた傷の数だけ患者が存在している。身体の中のテロリストは、彼女の意に反して混乱を呼ぶ。つまり、キャロルは敵から逃れられない。精神病患者は、現実に存在していながら同時に夢の中の住人なので、彼女らとの対話、触れ合いは、夢を見ているのと同じ感覚を呼び起こす。精神病の女性たちはキャロルの幻想と化し、内に秘められたキャロルの思いを代弁する。キャロルは狂った女たちの喧騒を眺めながら、同時に自分探しをするのだ。

.....

か行

「快樂の斬新的横滑り」

監督アラン・ロブ＝グリエ

出演：ジャン＝ルイ・トランティニャン、アニセー・アルビナ

作品紹介：70年代のカルト映画を代表する、フランス産アヴァンギャルド・ムービー。

顔と名前を失った肉体は時間軸を喪失する。つまり、顔と名前がない身体はぼくらの身体である。顔のない女の殺人。名前はあがるが、名前があるから存在するのか？名前がなければ誰も死んでいないのか。存在しない殺人を捜査する刑事は存在しているのか？ロブ＝グリエは、女体と割れたガラスを対比させ、SM風味を交えながら器官との対話を試みる。精神ではなく、器官との対話を行うことで、感覚的な、過ぎ去った肉体の記憶を改めて知覚するのだ。

ロブ＝グリエは、10代のアニセー・アルビナとの交流、成人女性との交流、自身の願望を基調にした妄想、詩人の想像力を駆使して思春期と少女の正体に迫ろうとしている。答えが正解であるか否かにかかわらず、彼はそのプロセスを重要視している。

.....

「鏡の国のD」

監督デビッド・グラッドウェル

作品紹介：ジュリー・クリスティ扮する女性が卵を割ったら、生まれそこないの雛が出てくる。非常に難解だが、知性的な小品。

この作品、まったく知られていない作品ですが非常にイメージが練られている。風に乗る新聞の見出し、様変わりする部屋がまるで内的変化。あの街は子供たちの傷ついた魂が集まる世界の世界のようです。魂を傷つけられた子供、身体を傷つけられた子供。どちらがより残酷かを計ることは出来ないが、どちらかといえば魂を傷つけられた子供のほうが救われまいだろう。魂は容易に見えない。つまり、第三者から見れば、子供は傷ついていないのだ。

.....

「家族生活」

監督ジャック・ドワイヨン

作品介绍：女性に対して自由で奔放な男が、離れて暮らしている娘と旅に出る物語。

この映画に登場する親子は隔たりを感じている。性的に奔放で自由な中年男。別れた妻が交際相手のことを話題にしても気にしない。しかし、週一回の土曜日、娘との面会時に距離を感じてしまう。彼はそれが何かわからないが、ひねりの効いた会話で危機を乗り越えていく。しかし、それでも2人はお互いの間に横たわる隔たりにしばしば気まずい思いをする。思春期の介在。彼はそれに戸惑っている。

成人女性とは思いつ通りに振舞えるのに娘の前では無力な男。彼は白々しさの原因を見極めようとするがわからない。或いは認めたくない。幼い娘がいずれは自分が知っている女たちと同じようになるのが。娘は幼年期との離別を真正面から受け止めるが、父親はまだその準備が出来ていない。娘の反抗ではなく、父親の無理解が2人を分断する隔たりとして鎮座している。知らないうちに成長している娘を目の当たりにすることで一緒に暮らしていない以上の隔たりを感じ、彼はしみじみしてしまうのだ。

.....

「カット・アップス」

脚本ウィリアム・S・バロウズ

監督ブライアン・ギシン

作品介绍：映像・音声共に、カットアップ・コラージュを多用したミニマルな実験映画。

YES, HELLO, GOOD, THANK YOU, LOOK AT THE PICTURE, DOES IT SEEM TO BE PERSISTING?, WHERE ARE WE NOW?などの言葉を切ったり貼ったりして抑揚をつけたり消したり、繰り返し反復させることでミニマルな要素を持つ音楽を誕生させようとしている、前衛小説「ソフトマシーン」を地で行く作品だ。映像の方は、既存のフィルムを編集するのではなく、ニューヨーク、ゲイという共通のイメージを撮影してきったり貼ったり繰り返し反復させている。ニューヨークの白昼夢みたいで、ホラー色の強いクローネンバーグの「裸のランチ」よりはこっちの方が、らしい。感情は一切排されリズムのみで成立している。

.....

「カノン」

監督ギヤスパー・ノエ

作品紹介：終始毒づくだけ毒づくフランスのオヤジ。何やらかすか分からんオヤジが何だか心臓に悪い映画。

あのオヤジの悪態がこの映画の全てだ。ネクラで友人もいず子供も知恵遅れとあった日にゃとんだ十字架背負っちゃったもんだと、嘆いても 始まんけど嘆かなくても何も始まんでしょう。ギヤスパー・ノエは「人の不幸は極上のエンターテインメントさ」とでも言っているようだ。ぼくも同意したい。「カノン」はエンターテインメントだ。ただ、主人公と自分を区別できるならの話だが。オッサンの愚痴はうっとうしいが、次第に雄弁になり応援したくなってくる。しかし、途中でオカマ口調になるとペーソスが漂い始める。正直なためにミジメなおっさん。だが、ウソをついて幸せのフリをして苦しむよりはよほどマシ。幸せなフリというのはなんて非人間的な罪だろう。大都会の中の世界の果て。口のきけない娘としゃべり続けるオヤジ。まるで、オヤジはしゃべれない娘の代わりにしゃべり続けているようだ。あれが娘の代弁だとしたら。あれが全部、じつは娘の言葉だとしたら。

.....

「鏡」

監督アンドレイ・タルコフスキー

作品紹介：虚実入り乱れる、アヴァンギャルドなロシア映画。

誰の記憶でもない記憶を描写することで、タルコフスキーは映画特有の、ある種の可能性を観客に提示している。一般的に、記憶は個人的なものだ。だが、映像芸術は詩人の目を介した記憶の共有ということができる。ショックを受けた身体は、時間軸を喪失する。体液を滴らせながら、記憶の断片が次々に流れ落ちていく。タルコフスキーが見る風景には、常に死の影が付きまとっている。ルソーやチェーホフにも言及して、低級な征服本能に翻弄された知性の嘆きに触れている。

.....

「カルメンという名の女」

監督ジャン＝リュック・ゴダール

作品介绍：ゴダールは映画言語や絵画的ショットを完全に廃し、ただただデタラメな映画を作り上げた。芸術に無関心な芸術評論家に対する挑戦。

何やっても褒められた頃のゴダールの苦悩が基調となっている。「意味もわかっていないくせに褒めるな」という芸術家の個人的な苦悩である。「オマエらにこの映画の意味がわかるか？この映画も好きなのか？ただのデタラメだぞ。その違いも分かんのか？」という嘲り。1970年前後のゴダール映画と異なり、心の動きを、事象や風景に重ねようという気が全く無い。つまり、ゴダールをゴダールというだけで褒め称える人々に向け、一連の違いが分かるかどうか、試してみた作品。試金石といえることができる。違いが分かればゴダールは歓迎し、分からなければ侮蔑し、ツバを吐くだろう。

.....

「CUBE」

監督ヴィンチェンゾ・ナタリ

作品介绍：ある日目覚めると、男は奇妙な装置の中に閉じ込められていることに気付いた。彼は、同じように幽閉された仲間と出会い、巨大な装置から脱出を試みる。

「真実」を表現する時、恐ろしく膨大な情報量进行处理しなくてはならない。そうしてひとつの作品としてまとめるのは、非常に困難だが、ナタリはその「真実」を端的にまとめる手腕に優れている。それぞれのキャラは、ぼくらが良く知っている日常の断片を成している。そういうわけで、彼らがCUBEに放り込まれることで、ぼくらは、彼らの恐怖を身近に感じることができる。次から次へと難題が用意されたスリルあふれる展開は出色だが、主人公のセリフ「システムが存在する限り機能していなければならない」に共感した。あのラストは超皮肉だ。「納税者はみなゴロシだ」とでも言っているようだ。

.....

「狂気/密室の恐怖地獄」

監督ラファエル・デルパール

作品介绍：強盗団の一味である女性が、隠れ家に潜んでいる間、次第に不気味な幻想に蝕まれていく。

感病んだ女性の内面を描いているわけでホラーじみてしまうのも道理か。黒を基調にした色彩センス、廃れたマネキン工場に散乱する前衛オブジェのようなマネキンは、そこはかたない無人感を醸し出す。顔のないマネキンは、鏡を見たヒロインのようであり、女の傷ついたプライドを想起させる。傷ついた魂にとって肉体は檻でしかないのか？自分を成立させている血や肉は敵なのか？幽閉された女性が何とか脱出しようと孤軍奮闘するさまはユーモラスだが、同時に悲哀も強く漂っている。

.....

「去年マリエンバードで」

監督アラン・レネ

作品紹介：幽霊のような人々が生前の記憶に囚われ、抜け出すことができない迷宮映画。

静止した時間。つまり誰かが死んでいる。だが、レネやロブ＝グリエは誰が死んだかに関心が無い。彼らの関心は、死によって時間軸を喪失した体内で起こる記憶のパラドックスの描写だ。マッチ棒を引くゲームで、最後にマッチが一本だけ残る示唆が興味深い。体内に染み込んだ、忘れられた感情の一瞬一瞬が輪郭を得て解き放たれた、その脅威。レネは、その未知を想像力と観察眼のみで画面上に構成し、戦慄と美を同時に手中にしている。

.....

「恐怖の足跡」

監督ハーク・ハーヴェイ

作品紹介：交通事故で同乗していた友人を失い、生き残ったヒロインが辿る数奇な運命が描かれている。

完全に欧州のアート系映画を意識しています。総じてカルト色も濃厚だが、冒頭、助手席のヒロインの落ち着いた無き様子は意図されており、運転席の女性の内面が示唆されていて文学的である。その点はアントニオーニの影響を如実に受けている。児童向けの教育映画の製作に携わっていた監督のハーク・ハーヴェイは、欧州の芸術映画に触発され、独自の表現を思索しているわけです。しかも、きっちりアントニオーニの話法を理解している。亡霊のダンスシーンも、どう見ても同時期にフランスで製作された「去年マリエンバードにて」に影響されている。

ヒロインが助かってからの展開は、まるで、誰かの過去を再現しているようで興味深い。運転手の女性はなぜ青年たちのレースの申し出を受けたのか？なぜ彼女は、女性がてらに男たちの申し出に乗ったのか？なぜ自暴自棄になっていたのか？というわけで、ひとりの打ちひしがれた女性の内面に光が当てられている。この時期のアメリカ映画としたら実験的で、ハリウッドでは絶対に作れない類の作品です。インディーズだったから可能だったのだろう。この映画の骨子には「ラ・ジュテ」「十六歳の戦争」「マルホランド・ドライブ」と同じものが宿っている。

.....

「恐怖の火あぶり」

監督ジョセフ・エリソン

作品紹介：他人と接触せずに自分の殻に閉じこもり、女性を誘拐しては焼き殺していた男が主人公の映画。

人に嫌われるしか出来ないという悲しみ。当然のことが出来ないという苦悩。だが、出来て当然のため、決して人には理解されないという、予め迷宮入りしている男が主人公だ。完成度の点では劣るかもしれないが、テーマはルイ・マルの「鬼火」、ポランスキーの「反撥」と共通のものを持っている。一般的に、B級ホラーにカテゴライズされる映画だが、監督が目指しているものは、傷ついた魂の痛みを、芸術を通して昇華することだ。たったひとりの理解者である同僚が、気を利かせて主人公をダブルデートに誘うあたりは目を被うほどの痛々しさである。こういう人物を描くに際して監督の観察眼、語り口がいい加減じゃないので好感が持てる。

.....

「恐怖分子」

監督エドワード・ヤン

作品紹介：夫婦仲がうまく行っていない夫婦が、ある朝、住宅街に響く銃声を聞く。

人は、憧れの人物に自分のファンタジーを勝手に重ね合わせる。人は憧れの対象をして「これだけたくさんの人に慕われているのだから、彼/彼女は喜んでいるはずだ」と信じて疑わない。だが、その無敵と信じていた憧れの対象が、じつは自分と同じで「ただの苦悩する人間でしかない」という事実を知ったときの人々の苦悩が描かれている。エドワード・ヤンは、この人々の苦悩に、貧民街に響く乾いた銃声を重ね合わせている。人が羨む賛美。だが、それも時にはあざけりと

同じく、差別・無理解でしかないことがある。ブンブンうなる扇風機、風になびくカーテンが端正な画面を通して南国台湾の熱を伝えている。

.....

「キング・オブ・コメディ」

監督マーチン・スコセッシ

出演：ロバート・デ・ニーロ

作品紹介：一流コメディアンを夢見る冴えない中年男が、尊敬するジェリー・ルイス扮するコメディアンに拒絶され、憧れが憎しみに変わっていく。

目立ちたい、注目されたいと誰もが持つ願望。デ・ニーロ演じるルパートは、生活と現実を無視してひたすら理想を演じ続け、夢と現実の区別がつかなくなる。しかし、イカれていても楽しそうなんです。日常を忘れてどっぷり夢に溺れられたらな、という現代人のためのファンタジー。デ・ニーロとスコセッシは、うまいことこの手の人の演出に成功しているが、それは結局、彼らのような一流でもそういう部分は持ち続けているということだろう。

.....

「クローズアップ」

監督アッバス・キアロスタミ

作品紹介：イランを代表する大監督マフマルバフを騙って詐欺を働いた男のドキュメンタリー。

感裁判の様子やラストなど、ほとんどドキュメンタリーで再現ドラマは少ないが、おもしろい試みだと思う。被害者家族の前で有名な映画監督マフマルバフを演じた詐欺師は、キアロスタミの前で、今度は「マフマルバフを演じた自分」を演じるのだ。さらに、被害者家族の母親だけが再現ドラマに参加するが、彼女は「だまされた時の自分」を演じる。

実際に起きた事象を、たとえ当事者が演じてもそれはもう別物でしかないことが理解できる。表面は真実に似ていても、彼らの内なる心情は異なっており、当時の感情は、再現ドラマにはないのだ。新たな感情や反応が加わることで、記憶が侵食される様子を記録する試みだといえる。加工された現実と、虚構に差はあるのか？というアッバス・キアロスタミの問い。裁判の場面は迫力があり釘付けになったが、けっきょく被害者側も加害者の男も立場こそ違えど、全く同じ夢を見ていたのだ。

.....

「クインテット」

監督ロバート・アルトマン

作品紹介：アルトマンのやる気が微塵も感じられない作品。では、なぜ彼はこの作品を完成させたのか？それがこの映画のテーマである。

想像力の欠如、無関心が世界を氷で包むのか？過去でも未来でもない氷に閉ざされた世界。過去でも未来でもないなら、実は現代なのかもしれない。だとすれば、人々が行き倒れになるのは寒さのせいではない。そして、影の一部のような黒犬の群れが死体を貪り食う。現代人は夢を見ていられるから生きていられる。その「夢」を奪われた世界は、こんな姿をしているのかもしれない。現代では、見たくないモノを見ないで済むが、「クインテット」は、それが出来なくなった世界だ。一方で、会社に「流行ってるからSF映画を作れ」と言われたアルトマンが「ふざけるな、SFなんか撮りたくねえわ」ということで、つまらない映画をワザと作っている。大スター、ニューマンの魅力も生かそうとしない。そういう作家としての反抗が見え隠れする。そのため、本当につまらない。笑

オレが言っていることが正しかろうが間違っていようが関係なく、つまらない。話は理解不能だし、衣装もセットも2色刷りの世界のように、最初から最後までモノトーンに終始している。やはりどう考えても、アルトマンの性格からして、何らかの問題提起が主題ではなく、ただハリウッドが求めるものと正反対のものを作ってやれ、という個人的な反逆だろう。そういう点で、実にアルトマンらしい映画。

.....

「クラッシュ」

監督デビッド・クローネンバーグ

作品紹介：セックスに飽き足らなくなった人々が、交通事故によって絶頂を体験しようと試みる。エクスタシーと死の区別ができなくなった異様な人々にスポットが当てられている。

不感症の世界。クローネンバーグは彼らの背後に隠された過去を見つめている。つまり「心のクラッシュ」だ。心の傷を癒せるのは同じ境遇の人々であり、医学や権威ではないという問題提起がある。そのため、アブない映像のオンパレードだが、クローネンバーグはあくまでも寓話を

語ろうとしている。身体の傷が先か？心の傷が先か？見える傷も悲しいが、見えない傷も悲しい。

彼らは、壊れたモノを愛でること無視された自分を癒す。彼らは、心に受けた傷に相当する傷を身体に欲する。ただ、自分の中で完結している分にはいいが、その境地を他人と共有しはじめた時に始まる心と身体、双方の崩壊危機。それは、他人に理解して欲しいと言う願望に起因しているが、彼らの欲求は、無関心な世間への挑戦と化す。

.....

「黒い罌」

監督オーソン・ウェルズ

出演：チャールトン・ヘストン

作品紹介：顔を黒塗りにしたヘストンと、非情で狡猾な捜査官を演じるウェルズの競演。「羅生門」に刺激を受けた「新しい映画」。

アメリカ社会の分断。ウェルズは、これを分かり易く表現するため、メキシコ国境に舞台を据えた。アメリカ人とメキシコ人は、容貌、言葉で容易に区別がつく。この仕掛けで、アメリカ社会の分断を可視化しようというのだ。当時、しかもハリウッドに於いては、大いなる実験だっただろう。アメリカ人の妻とヘストン演じるメキシコ人の夫の設定。これは、アメリカに蔓延する夫婦間の隔たり、無理解を考察するための設定である。暴れまくるメキシコ人の不良たちは、当時のアメリカ人青少年に対する社会の無理解を表現している。そして、ウェルズ演じるアメリカ人とディートリッヒ演じるメキシコ人女性の設定。これは、どんなに接近しても縮まることがない2人を分かつ大きな隔たりを示している。

国籍が違うから、住む場所が違うから、言葉が分からないから、2人の距離が縮まらないのではない。同じアメリカ人のはずなのに、お互いが外国人に見える人々。同じアメリカ人のはずなのに、お互いの言っていることが外国語に聞こえる奇妙な世界。ここに、アメリカの将来を憂いているウェルズの苦悩が反映されている。ポランスキーの「チャイナタウン」、クレール・ドニの「パリ18区、夜。」にも影響を与えた、卓越した映画言語のひとつである。気に入ったセリフ、「Why Don't You Go Home?」。

.....

「激突！」

監督スティーブン・スピルバーグ

作品紹介：出張に向かう途上、逆恨みされたトレーラー運転手に付けねられるサラリーマンの苦闘と悲哀が描かれたサスペンス・アクション。

緊張感みなぎるアクション・スリラーが展開される中、一方で主人公の内的な、自分と自分との戦いが描かれている。それを意図してかせずか、ほとんどの人物はトラックの存在に気付いていない。だが、通りすがりの老夫婦や、僻地にひとり住む蛇好きのオバサンのような立場の弱い人物に限り、トラックがはっきり見えて怖い思いをしている。この点は非常に興味深い。手に汗握るアクションの裏で、主人公デビッド・マンのように、じつは現代人なら誰でも覚えがあるものをテーマとして見出すことができる。

.....

「幸福」

監督アニエス・ヴァルダ

作品紹介：穏やかな作風の中、夢を見ている若奥さんに訪れる内面崩壊の危機が描かれている。

市民が憩う森に咲き乱れる花々は、完全な愛を夢見たまま死んだ人々の生まれ変わりのようだ。そこに訪れる、とある幸せ家族。幼い子供たちも何不自由なく育てている。夫婦は、完全な幸福を手に行っているかのように見える。しかし、あの事件。あれは、ウソをついた罰なのか？理想の愛を演じた罰なのか？いい夢を見ていたのにいきなり邪魔されたような感覚。あのあとの展開は居心地が悪いです。

夫の告白のあとに夫妻は昼寝をするが、先に起きた妻が夫を一瞥する。怖いですね。幸福は続かない。続いたとしたらそれはウソだ。幸福を演じるという罪。そんな、世界中の人々の罪を、彼の妻が一身に背負った瞬間。あの家族を演じたのは実の家族だったようです。どうりで子供たちの表情も自然だった。が、アニエス・ヴァルダはその家族にあのような劇を演じさせたワケで意地悪ですな。

.....

「午後の網目」

監督マヤ・デレン

作品紹介：アングラ映画の先駆というべきマヤ・デレンが、ハリウッドの自宅で撮影した個人的

な実験映画。

空中に手が出現し、花を一輪落とす。花を手にとったヒロインは、そこから現実と幻想の境が曖昧な世界に誘われる。全身黒づくめの影のような女性を追いかけるマヤ・デレン。彼女は影女が誰なのか知らないのではない。誰なのか知っている。ただ、認めたくないだけなのだ。割れた鏡、刃物、鍵。セリフは一切なく、後の夫である伊藤ティジが奏でる雅楽のような古めかしい音楽以外無音なのだが、雄弁である。

.....

「コックと泥棒、その妻と愛人」

監督ピーター・グリーナウェイ

作品紹介：密かに大親分の妻と不倫し、レストランで密会する男を襲う悲劇。そして、妻に裏切られた親分のペーソスが描かれている。

グリーナウェイは強者も弱者もまんべんなく笑う。人間という動物をあざ笑うのだ。ぼくらが動物園に行って猿を見て笑うように、人間という動物を笑い飛ばすためにグリーナウェイは極上の檻をこしらえる。グリーナウェイの画面はある種、動物園の檻だ。正面構図が多いのもそのためではないかと推測される。グリーナウェイは、人間を閉じ込める檻の製作に余念がない悪意の作家だといえる。毎回、人間をどんな檻に入れようか考えている。どんな檻に入れたら人は苦しむのか、と骨を折っている。彼の映画がどこか冷たく、悪意を覚えずにいられないのはそれがゆえだ。

.....

「この西瓜野郎」

監督ロバート・ネルソン

作品紹介：西瓜を題材にした個人的な実験映画。

前衛ともいえない、フザケ半分のアンダーグラウンド短編というところですか。監督はある日、「スイカって何だ？」という問いに取り付かれたのでしょうか。それで、スイカを落としたり、けったり、転がして追いかけたりする。電車で轢いたり、解剖したり（スイカの内臓がシュール）。だが、やがて問いが転じて、いつしかスイカでどれだけネタをひっぱることができるか、とい

うチャレンジに変貌する。この映画、発端からして既に破綻していたはずだが、アメリカ人魂という、くだらないことを大真面目に追求する精神が、この作品の命となっている。全長10分のカルト映画通のためのカルト映画だ。

.....

「今宵かぎりは...」

監督ダニエル・シュミット

作品紹介：シュミットは、主人と召使が入れ替わった一晩の物語である、というウソをついている。

人間には2つしか目がないが、全てを目撃できないという点に於いてこれは真実のドラマである。亡霊たちの祝宴である。死人が夢を見ているところを見ていないから、死人は夢を見ない、ということにはならない。人物はみなことごとく、その背景や過去を剥奪された、作られたばかりの人形のようなのである。暗闇にぼんやりと白く浮かぶ彼らの顔は、見えているにもかかわらず、逆に存在していないかの如く無人感をかもし出す。イングリッド・カーフェン演じる女性の顔など、みな能面のような。実際、廃止された時間軸、タメにタメる間は、能に通じているといえる。

.....

「こわれゆく女」

監督ジョン・カサヴェテス

作品紹介：精神病を患う女性と、その夫と家族の苦闘が描かれている。

作家の主張の無い人間ドラマだが、成立している。メジャー・スタジオのように物語のおもしろさの追求、アート系の作家のように内面の表現、人物の背景の追及、メタファーを駆使した無言の語りなども無い。そこにあるのは、躁病のように喜怒哀楽をフル回転させているジーナ・ローランズとキレまくるピーター・フォークの姿だ。結局、作家の主張を盛り込まないことで、俳優たちの背景・経験を画面に反映させることに、カサベテスは心を砕いている。どんな俳優も役柄を生きたモノにするために、自分たちの日常を反映させるものだが、ジョン・カサヴェテスという人は、それだけをフィルムに焼き付けることに躍起になっている。それだけで成立するものを作ろうとしている。

たとえば、ローランズは、やはり精神病のキャラに命を吹き込むために過去に自分の周囲にいた

それに近い人々を参考にしたはずだし、ピーターも周囲にいた問題のある人物を抱える家族を参考にしているはずだ。ストーリーテリングの妙・演出は可能な限り廃止し、俳優が人生を通して実際に見てきた、生きた情報だけを映画に反映させる。これが、カサベテスが考えていた「リアル」なのかもしれない。カサヴェテスの映画で見られる一種異様の間は、その実験の成果なのだろう。「ローズマリーの赤ちゃん」でポランスキーと衝突するのもうなづける。後半は、ちょっとドラマがかっている。ちょっとした事件にも関わらず、ピーターとローランズの迫真の演技のおかげで、重く、痛いものになっている。子供がとても表情豊かで演技が自在な点には驚くが、それひとつをとって見ても現場のリラックスした雰囲気伝わってくる。

.....

「ゴンドラ」

監督伊藤智生

作品紹介：青森の田舎から東京に出稼ぎに来た青年と、無愛想な少女の触れ合いが瑞々しい。

カゴの鳥は古典的なメタファーであるが、初潮が始まったという背景が「純白の文鳥と戯れる少女」という図に、エロチックな響きを加えている。そして、青森から東京に出稼ぎに来て、ビルの窓拭きで生計を立てている青年。呪いのように付きまとう、都会で生きる人々の生活の基本。どんなに近づいても遠いままの隔たり。青年が窓をはさんで見つめる職員たちは幽霊のようであり、窓の外にいる青年もまるで幽霊のようである。

親が別居したのが原因で転校し、まだ友達もない少女と、出稼ぎにきた青年の生活を通し、都会の中の孤独がスマートに表現されている。80年代の日本に突如として出現した「アントニオ一二の衣鉢を継ぐ作家」と呼んでいいほど、伊藤智生の人間を見る目は洗練されており、同時に映画に対する志の高さと熱意を感じる。当時、詩人の谷岡俊太郎が絶賛したほどだ。心の声を語るためのロケハンも非常に入念で、チョイスされた景色は、まるでこの映画に出るのを待っていたようである。実際の少女と青年の会話も詩情に富んでおり、うならされる。リリカルかつ、瑞々しい再生の物語。

.....

「光年のかなた」

監督アラン・タネール

作品紹介：鳥になることを夢見ているおじさんの壮大な夢に憧れ、バーテンの仕事を手放しておじ

さんの弟子になる青年。

自分の主張のために戦う。その戦いの意志は人間として非常に尊いが、現代社会にあっては不要なものでしかない。つまり、おじさんはゴミを集めているわけじゃない。ゴミがおじさんのところに集まってくるのだ。夢を見た者は断罪のために流刑地を目指すのだ。ただ、おじさんは流刑地とは考えていないようだ。おじさんの親はロシアから来たという設定だが、それ以上のことは一切語られない。だが、おじさんの生活を見ればロシア人の両親のことは一目瞭然だ。おじさんは、ロシア人の両親の人生を再現しているのだ。ロシアにいたおじさんの親は、自由になりたいくてイギリスにまでやってきた。遠くへ行けば自由になれると信じていた。だが、イギリスに来たおじさんの親は、どんなに遠くへ逃げても自分からは逃げられないということを知る。

人間である限り、イギリスであれロシアであれ、どこに住んでも同じなのだ。不要な夢を見ることで傷つく人々の悲哀。だが、タネールの彼らを見る目は優しい。タネールは、夢見がちの人々を批判したいわけじゃない。彼は、自分も同じだということを知っている。ただ、同じ夢にも、有害なものや無害なものがあるということだ。この映画のおじさんが見ている夢は無害だ。無害だが、悲しい。夢を見ることでしか生きていくことが出来ない人間の悲哀が画面に充満している。おじさんの親は、ロシアからイギリスに来てそこから更に遠くへ行くことをあきらめた。だが、息子であるおじさんは、鳥になることを夢見ている。

.....

「ゴダールのマリア」

監督ジャン＝リュック・ゴダール

作品紹介：ミリアム・ルーセル扮するヒロインは、性交もせずに子供を宿す。

全2話が収録されているオムニバス作品。第1話は間に合わせの感があるが、第2話はちゃんとした長編である。だが、この第2話が全く意味がわからない。映画言語の使用も認められないし、絵画的ショットも見られない。ひどく内に閉じた、パーソナルな雰囲気満ちている。たぶん、ゴダールは主演のミリアム・ルーセルに惚れていて、その告白が基調になっていると考えられる。そのため、非常に主観的で「第3者なんかどこ吹く風」といった作風なのだ。つまり、他人に意味がわかるはずが無いのだ。

実質的にミリアムと付き合うことが不可能と考えるゴダールは、未経験のマリア（ミリアム演じる）を妊娠させる。ここには、ゴダールの魂とミリアムの魂がセックスして子供が出来た。私たちは魂の次元で結ばれているのです。のような、無敵の芸術家の感があるゴダールの悪あがきが微笑ましい。マリアに想いを寄せるグラサンの男は匿名性が特徴的だが、ゴダールは彼に自身を重ね合わせている。グラサンの行動・言動にはみなゴダールの願望が秘められている。しょうが

ないおっさんだな。

.....

「最後の晚餐」

監督マルコ・フェレーリ

出演ウーゴ・トニャッツィ、フィリップ・ノワレ、マルチェロ・マストロヤンニ、ミシェル・ピコリ

作品紹介：初老の男たちが集まった、食事同好会で起きる事件の数々。

この映画のテーマは人を蝕む無力感である。それにしても恐ろしい。無力感は、人をここまで追い詰めるのだ。無力感の源は、いったい何だ？マルコ・フェレーリは、冒頭できちんと示唆を行っている。とにかく、この映画に出てくる人物たちは無力感の源を追及しようとはせず、代わりに性やグルメに走って無力感を解消し、ごまかそうとする。しかし、手軽なセックスやバカ食い・美食狂いによる満足感は持続しないものだ。

ウーゴ・トニャッツィ、フィリップ・ノワレ、マルチェロ・マストロヤンニ、ミシェル・ピコリを襲う老い、そして幼年期への郷愁。感じる事が出来ない欲望は暴走するだけ。ここでの食事は本来の意味を喪失している。彼らは、食べ続けることで逆に食べることを否定している。

.....

「CYCLE」

監督山本政志

作品紹介：人生の無常を感じつつ、生きることの悲哀が描写された実験的な作品。

肉に囚われない魂の飛翔を描いていて自在の感があります。魂の飛翔ということで、時間軸も無効化されている。俳優たちも、地味ながら熱意があって見てて新鮮だ。この作品、たった50分という短さである。それにも拘らず、鑑賞中はすごく長く感じました。が、それはつまらないということではなく、たくさん詰めこまれている、という感じなのだ。二時間の大作と同じくらいの情報量が詰めこまれている。それも自然に。

.....

「砂丘」

監督ミケランジェロ・アントニオーニ

作品紹介：表面的には、当時流行っていたロックの名曲が並べられたことが話題となった。風景に人物の内面を反映させた深層心理劇。

白熱した討論を繰り広げる反体制学生の集会。だが、彼等自身「敵」が誰なのか分かっていない。というか、「敵」なんかいない。さらに言えば、自分たちひとりひとり、自分自身が「敵」の一味なんだという事実を認めることが出来てない。アントニオーニは夢自体や夢の外観を持つ現実を好んで描く作家だが、今回の2人の主人公もお互い遠く離れた所で生活しているにも拘わらず、誰も知らない見捨てられたような場所で偶然に出会う。そんな展開に、夢に似た感触を感じる。名前はあるが、誰にも知られていない忘れられた土地「ザブリスキー・ポイント」。自己喪失の風景。お互い何の接点も無い2人が繰り広げる戯れは、自然と夢の外観を帯びていく。青年の一言「僕と似てるよこの砂漠」が印象的だ。

.....

「ザ・ショック」

監督マリオ・バーヴァ

脚本ランベルト・バーヴァ&ダルダーノ・サケッティ

作品紹介：新居に越してきた幸せそうな家族。しかし、奥さんは、息子に憎悪されているという妄想に苛まれ、自身が生んだ幻想に吞まれていく。

シュールで異常な雰囲気貫かれているが、根本的に身近な問題、家族問題を取り扱っていることが分かる。引越しが契機で徐々にダリア・ニコロディ扮する主婦を軸に家庭内断絶が表面化していく。精神的に追いつめられ、息子の普段の行動でさえ理解できなくなり、彼に対して不信感、憎悪を抱きはじめていく。彼女の気がふれる寸前までの心理的過程を、バーヴァは幻覚も交えてトータルな悪夢として描いた。この過程の描写がじつに堂に入っている。素直に鬼オマリオ・バーヴァの悪夢的イメージに酔えばいいだけなのだが、ラストで明かされる真相の全ても、実は彼女の悪夢の一部の気がしてならない。ランベルト・バーヴァやサケッティ（フルチ映画の脚本で知られる）の映画ではありがちなラストでもある。

.....

「サスペリア」

監督ダリオ・アルジェント

作品紹介：ジェシカ・ハーパー扮する女学生が、イタリアにある女学校の寮を訪れる。そこで、彼女は怪奇な事件に巻き込まれていく。

アルジェントは、それまで通りのサスペンスを語りながら、一方では、見えない「誰か」の心象風景の示唆を織り込むことを始めた。ジェシカ・ハーパー扮するヒロインが嵐の中、学校に到着すると、生徒が見えない誰かに何かを叫んでいるシーンを目撃する。しかし、ジェシカには何も聞こえない。人は「認めたくないことは聞こえない」ことがある。知っていても、認めたくなくて「分からない」ということがある。で、当然幾多ものナゾが彼女の眼前に立ち塞がることになる。知っていることと認めることで、解決の糸口も見えてくるかもしれないのだが。脚本に参加したダリア・ニコロディが、自分が通ってきた道を、少々の畏敬の念をもちつつ、振りかえっている気がして和んだ。

.....

「ザ・チャイルド」

監督ナルシソ・イパネス・セルラドール

作品紹介：子供たちが治める孤島で、大人が狩られるという猟奇映画の傑作。戦場における子供たちの惨状がわかりやすすぎるほどわかりやすい伏線となっている。猟奇的な内容とはうらはらにセルラドールの主張はマジメすぎるほどマジメだ。

不謹慎ながら、リゾート地で起きる目立たないが異常な事件の連打、夫婦の不安げな顔に胸躍らせてしまう。監督の、不吉な予兆を肌で感じさせるタッチは、伝説のカルト映画ならではだ。断罪の孤島で、獲物を待つ狩人たちの餌食となる人々は断末魔の際、狩人たちの目に、とり憑かれた魔性を見るのか？それとも虐げられた者の復讐を見るのか？思春期前の少年少女を多く出演させている点がこの作品をファンタジーとして成立させている。ヒッチコックの「鳥」のように、主人公の夫婦が就寝する以前と以後では状況が異なるという示唆もおもしろい。

.....

「殺人天使」

監督ニール・ジョーダン

作品介绍：サクソ吹きである主人公は、唾の少女と出会うが、テロの被害者となった彼女の死を目撃する。

しゃべれない少女の存在には、主人公ダニーが密かに抱く希望が重ねられている。北アイルランドという複雑な地域が舞台である。混乱が起きても、小さな希望のおかげで何とか生き延びていたダニーだが、突如として希望の喪失を経験する。文字通り、目の前で希望が打ち砕かれてしまうのだ。人々の希望を奪う者たちとは？彼らはなぜわざわざ他人の希望を踏みにじるのか？希望を失ったダニーは、行く先々で他の希望を失った人々の断罪者と化す。アントニオーニを引用したジョーダンの筆致には悲哀が漂う。

.....

「殺人に関する短いフィルム」

監督クシュシュトフ・キエシロフスキ

作品介绍：殺人を犯す青年と弁護士の人生が並行して描かれ、比較ができるように設定されている。

実際には、世界は黄色味がかっていないのでおかしな話だが、黄色味がかった殺伐とした風景はやけに現実感が漂う。その、黄色い街に呼ばれたような青年の行動もどこか危なっかしいが、フイに出会う何人かの少女とのふれあいは、まるで青年の思い出のようで悲哀が漂う。この作品には2つの殺人が描かれていた。最初の殺人は、手際が悪くそれだけに不快だったが2回目の殺人は手馴れていたため、それ以上に冷たく感じた。クシュシュトフ・キエシロフスキ、痛恨の皮肉である。

ところで、人が殺人に至るまでには少年期に心の殺人、魂の殺人が行われたはずだが、その点は冒頭では割愛されている。要所要所では小さな示唆はあるが、裁判所にいた加害者の親族の様子を見れば、ある程度理解出来るようになっている。殺人を犯した者は二度殺されるのだ。殺人者と弁護士。殺人を犯す者と、犯さない者の違いがうまく活かされていた。両者は、裁判では一番近い人物だが、実際はどれだけ遠く離れているのか。そういう両者の間に横たわる大いなる隔たりがメインに据えられていた。運命（さだめ）は人に祝福を与える場合もあるが、ある人にとっては運命（さだめ）とは敵に他ならない。その、運命を前にした、ちっぽけな人間の末路、無常がありありと描かれていた。

.....

「サバス」

監督マルコ・ベロッキオ

出演ベアトリス・ダル

作品紹介：精神科医の青年と魔女を自称する精神病患者の女性との、狂気と幻想を折り混ぜた非現実的な触れ合い。

見えるものも、見えないものも、全て許容するヴィジョン。決して日の昇らない世界では、炎が闇を照らし、女たちが踊り狂う。展開は脈絡が無く、飛躍しているが、説明しようという気はさらさら無い。マルコ・ベロッキオは今回、満たされない男の内面の構築を試みている。マッドレーナという狂った美女に、自分の夢を重ねてしまう男の心象。いつものように現実と幻想の境が曖昧な作風だが、ベロッキオの捜し求めているものはいつでもその「境」にあるのだから、当然の成り行きだろう。芸術家は、その知覚できないものを知るために表現に明け暮れるのだ。果たして、マッドレーナは精神病か？魔女なのか？単なるウソツキなのか？しかし、そんな問題は取るに足りない。本当の問題とは、彼女が実在しているか否かだ。だが、ベロッキオ自身はその問題には触れようとせず、夢のまま終わらせてしまう。

.....

「ザ・ピット」

監督リユー・レーマン

作品紹介：主人公の少年は、郊外に位置する林の奥に、人喰い鬼が住む穴を見つける。彼は、そこに嫌いな人々を案内し、落とし入れる。

何もかも飲み込む穴の中の怪物は、思春期真っ只中にある少年そのものだ。あの穴の暗闇は少年の内部に通じている。まさに剥き出しのイノセンス。少年の中で膨張した悪意は、外にあふれて世界を侵食する。穴の闇に蠢く、血と肉を求める怪物たち。世間に省みられることがない少年の心の中は怒り、憎悪、復讐心で一杯だ。思春期の少年のムラムラ感がすごくて、ベビーシッターに固執するサマは、なにやらかすか分からなくて怖い。監督は思春期の悦びではなく、思春期がもたらす影の部分を取り上げている。敵だけでなく、味方にまで敵意を向けてしまう少年の悲しさ。あの穴はどこにでもあり、いつでも少年少女たちの訪れを待っているのだ。

.....

「サマリア」

監督キム・キドク

作品紹介：父子家庭を営む中年刑事が、高校生の娘が売春をしているのを発見する。

骨格にはアントニオーニの「情事」がある。ということで、冒頭でさんざん、2人の少女が何者なのか、鏡やプリクラを用いて示唆が繰り返される。そのことに気づいた観客は、人間の内面へと誘われることになる。チョヨンはいったい誰なのか。ヨジンはいったい誰なのか。当の2人も劇中さんざん確かめ合っているが。あの公園でのかくれんぼは印象的である。あのかくれんぼは「少女」にとって、自分探しだった。なぜ少女は、外国行きを夢見るのか。なぜ父親はそこまで激昂してしまうのか。

ここで見落としがち、かつ重要な事実がある。それは、2人の親娘の夢、苦悩も、糸をたぐりよせれば母親の不在に行き着くということだ。ことさらに母親の不在を強調しないその作風は、小津の「晩春」、ベロッキオの「ポケットの中の握り拳」にも通じる。劇中、人となり、何があったかについて母親のことは決して語られない。その代わりに、父親の寡黙な態度が「妻のこと」について雄弁すぎるほど語っている。彼は、娘の行動を目の当たりにした瞬間、今まで以上に妻の不在を感じてしまった。

忘れていた喪失感、自分の無力感、それに呼応するように亡き妻、自分、娘に対して湧き上がる怒りと憎悪。孤独、悲しみ、罪の意識。その混沌としたものが俳優の演技、キドクの演出を介して画面全体に広がる。隠されて、現れたり消えたりする、見えない「事実」と、目に見えてかわいいうまく・ジミンの魅力が絡まりあい、映画は問答無用の輝きを放っている。ラストで父親が娘にかけた一言。それが直後のシーンに見事に反映され、詩情漂う。でこぼこ道は人生を表している。あまりにベタだが、演出がうまければ、こんな古い手も新鮮なものになる。父親の娘を想う気持ち。まなざしがあたたかい。

.....

「サンタ・サングレ」

監督アレハンドロ・ホドロフスキー

作品紹介：不倫しまくるサーカス団長と、新興宗教の教祖として活動する妻。その狭間で引き裂かれる少年の人生が描破されている。

隠しているものを暴かれるような、ハッとしてしまうイメージの数々。そして、物語の根幹を成す、現在を否定して過去に生きることの恐ろしさ。激情型両親の、愛と憎悪に巻き込まれて可能性を絶たれてしまう少年。可能性を絶たれた者の生活とは？彼はどうやって「ひとり」で生き

ていくのか？夢を見ていられるから生きていられる人間。ファンタジー無しでは生きていけない人間の末路とは？

ホドロフスキーの筆致は、ショックとタブーに満ちているが、主人公に対するまなざしは優しい。可能性を閉ざされた人の中に自分を見ることが出来る強さ、知性を感じる。主人公が犯す殺害シーンは痛々しい。なぜなら、それは愛情の裏返しなのだから。ラストはすごい寂しいけれど、ひとりだけでも理解者がいることが映画を後味の良いものになっている。あれがなかったら救いがない。ということで、万人向け。

.....

「散歩する惑星」

監督ロイ・アンダーソン

作品紹介：

魂を失った身体は、生きながら霊廟と化し、権力の意志を宿すためだけに生きる、肉で出来た媒体のたそがれ。媒体は、疲労しない。消耗するのみだ。文明社会では、人は自分の人生を放棄し、一個の部品として巨大なシステム上で継ぎ接ぎされる。だが、部品は古くなると省みられず、主張することも許されない。そういう重たい主張が、ユーモラスでフットワークの軽いこの映画の根幹に息づいている。富める者も貧しき者も、敵も味方も、みな同じ夢を見ている。だが、そうでないと文明は成立しない。アンダーソンは、その矛盾をことさらに攻撃するわけでもなく、ただただ、哀愁を帯びた眼差しで見つめる。

.....

「地獄に堕ちた野郎ども」

監督ルキノ・ヴィスコンティ

出演ダーク・ボガード、ヘルムート・バーガー

作品紹介：ナチス帝国に利用された製鉄大手の一族を襲う、内的な苦悩と名家の破滅。

人を思い通りに操るにはどうしたらいいのか？「地獄に堕ちた勇者ども」は、この問いに対する妥当な返答である。仕掛ける方にとって、非常にリスクが少ない最良の方法が紹介されている。結局、人は古来から人を操る際に、脅迫、金銭、色仕掛けといろいろあみ出しました。が、肉体にうったえるより、内面にうったえた方が都合が良いということに気づくのだ。心を利用する。

ナチスの高官曰く「どんな人間も私生活の奥まで丸見えだ。密告と裏切りが国民の道徳となった。これが第三帝国の偉業だ。ドイツ人はすべて我々の諜報員だ」。膨大な市民の記録を収めた部屋での発言である。

エッセンベック家の人々が堕ちていった背景、彼らの苦悩の源には、巨大製鉄所を思い通りに操作することで戦争に備えたいナチスの思惑があったすしかし、ひとりの男を除いて、エッセンベックの人々はその事実に気づかない。操られているという自覚が無いのだからそれは仕方が無いことだが。つまり、洗脳されている自覚がないということは洗脳がしっかり成立している証なのだ。まさに謀略の真髄を見る思いである。この戦慄の人間劇をモノにしたヴィスコンティの目的はいったい何か？もちろん、謀略を賛美しているわけではない。ルキノ・ヴィスコンティは、誰もがみな同じ夢を見ていることを元凶と捉えている。被支配者たちが、支配者と同じ夢を見ているのだ。その根本には、他人に対する憎悪、妬み、嫉妬がある。そして、人間を操る際には、それこそが必要なものだということが暴かれている。つまり「不幸」とは、人の操作を前提にした国家の悪意により「作られたモノ」もあるのだ。これを人類の悲劇と言わずして何というのか。ヴィスコンティは、取り立ててナチスの怖さを描きたかったわけではない。憎悪に駆り立てられ、ファンタジーに蝕まれるにまかせてしまう人間の怖さを描きたかったのだ。

.....

「地獄の警備員」

監督黒沢清

作品紹介：ヒロインの新入社員が曙商事に初出勤するが、それと時を並行して殺人鬼が警備員として曙商事に入社する。モダンホラーの金字塔「悪魔のいけにえ」に捧げられたオマージュ。

ヒロインの新入社員。もう、ふしぎの国のアリス状態です。彼女にとってのふしぎの国は、大企業「曙商事」である。全貌を確認することが出来ない「大企業」という空間。それは、日常的に存在していても決して全てを目撃できないという点で、実は非日常に富んでいる。そういう意味に於いて、これは真実のドラマである。黒沢清の映画に共通するが、親しみを覚える景色が一変して襲いかかる、あの怖さ。あと、不条理な笑い等、完璧です。一分のスキもない傑作。「悪魔のいけにえ」のパロディも楽しい。

.....

「シザーハンズ」

監督ティム・バートン

出演ジョニー・デップ、ウィノナ・ライダー、アラン・アーキン、ヴィンセント・プライス

作品介绍：デップ扮する主人公エドワードは、巨大なハサミを持つ姿で誕生した。ひとりで山の上の城に籠っていたエドワードは、化粧品のセールス・レディに発見され、せんての技術を買われて山のふもとにある住宅街で歓迎される。

本質的に無関心で、何かあれば容易に誤解してしまう周囲の平均的アメリカ人の冷たさに比して、ダイアン・ウィーストやアラン・アーキンの善良な一般人ぶりが暖かく、笑いを誘う。全体的にユーモラスでほのぼのした作風だが、心臓に悪い場面も多い。エドワードは自分の意に反して人を傷つけてしまうことがあり、そのことで苦悩する。しかし、彼の周囲の平均的アメリカ人は人を傷つけても苦悩しない。それどころか、積極的に傷つけることもある。巨大なハサミが手の代わりに異形の青年と、平均的なアメリカ人。どちらが危険なのか。考えさせられます。この作品はある意味、少年時代に周囲の人々に誤解され、理解されることがなかったバートンのアメリカ社会に対する復讐ともいえる。

.....

「静かなる一頁」

監督アレクサンドル・ソクーロフ

作品介绍：不鮮明な画面の上で、名前も顔もわからない影のような人々が当てもなく廃墟を彷徨う。

身体が滅ぶ風景。昔聞いた話し声や笑い声が遠くなり、崩れて塵になる。冷たく、薄暗い、古い建築物。今にも滅びそうな老人の肉体。亡霊の思い出。時間自体が朽ちていくのを見るが如き、壮絶な孤立感、焦燥感、無常感。一体、誰が死んだんだろう？

.....

「実験映画」

監督手塚真

作品介绍：

与えられた題材に興味もてず、対象との間に隔たりを感じ、作品との会話が成立しない、とい

う表現者の苦悩が刻印されている。四苦八苦して対象の本質に迫ろうとするが、レンズを通してのみではつかみきれず、直接触れようとする。しかし、逃げられてしまう。手塚真の表現者としての傷ついた内面が反映された世界なので、舞台のホテルがぼろぼろなのもうなづける。最数的に永瀬正敏演じるカメラマンは、撮りたいモノがなんだったのか理解する。あの撮影者と被写体のめまぐるしい入れ替わりはおもしろい。

.....

「死の王」

監督ユルグ・ブットゲライト

作品紹介：ゲルマニア発、自殺を主題に据えた不吉極まりないな映画。物悲しいテーマ曲が、惨たらしく生々しい映像に深みを与えている。

ユルグ・ブットゲライトは自殺を特殊なできごととしてではなく、日常の中に捉えようとしている。屍の記憶。蟲に貪りつくされる皮膚、内臓、肉、夢、希望、絶望、悲嘆、怒り。すべてが土に帰す前の、身体の持ち主の、死の直前のフラッシュバック。B級の要素を持ちながらリリカルであり、寡黙でありながら雄弁であり、繊細でありながら挑発的である。死とは、感情を超えたところにあることがわかる。とあるシーンで、女性が自殺について朗読するが、そばにいる少女には理解できていないようでつまらなそうにしている。その様子が憐憫の情を誘う。

最初の男の死はすべてがアバンギャルドであり、次の男は去勢に対する強迫観念があったのだろう。雨の中、濡れ鼠の男の告白は迫力があり、怒りの描写は斬新であった。そして、オールドミスらしい女性のエピソードは詩情が漂い、感銘を受けた。あの女性の行動や生活からは、彼女の語られない過去が見えてくる。が、それを補足するように彼女は夢を見る。あのカップルの存在は、女性の傷ついた内面を兼ねているようで詩的である。メインテーマも、オルゴール調で奏でられ、胸をうつ。最期の人物の死に様は迫力があるが、あれは役者魂か？

.....

「死の教室」

監督アンジェイ・ワイダ、タデウシュ・カントール

作品紹介：タデウシュ・カントールが監督する前衛劇の舞台を、巨匠アンジェイ・ワイダが撮影。

舞台上の演劇がやがて舞台から離れ外で展開されていく。観客を放ってめいめいの役者が廊下や別の部屋で演技を続ける。役者が舞台から消え、観客と舞台監督が残される。何人かの役者は気まぐれに戻ってきたり、出て行ったり、何人かはそのまま残ったり。舞台監督のタデウシュ・カントールは、役者のいない舞台を見せることで、舞台上に現実を構築するのだ。舞台演劇は、役者と観客がいなければ成立しないが、人生という舞台は、例え誰もいなくても続いていく。人々は、終生観客のいない劇場で舞台を演じている様なものだ。カントールと残された観客は、誰もいない舞台を眺め、俳優達は外で演技を続ける。舞台上から現実へと飛び出した彼らは、空き地で、街角で、空の下で演劇を展開させていく。だが、外の人々にとってはそれは演劇ではなく現実なのだ。

.....

「シャイニング」

原作スティーヴン・キング

監督スタンリー・キューブリック

出演ジャック・ニコルソン

作品紹介：職を失した男は、家族を養うため、冬季、閉ざされたホテルの管理人を請け負うことになり、家族ごとホテルに移住した。しかし、ホテルには日くがあった。

家族が崩壊する映画ではなく、家族が崩壊していたことに気付く映画である。これが一番怖い。キューブリックは崩壊している家族のお互いの隔たり、彼らが隠そうとしている見えない距離を可視化するため、巨大なホテルのセットを用意した。このホテルに住むことで、家族が離れ離れになっているということが、一目でわかる仕掛けになっている。真冬のホテルの寒々しさ。いやでもお互いが分断されていることがわかる。家族を断絶させる館ではなく、断絶した家族を呼び寄せる館である。その方が、よっぽど悪魔的だ。

.....

「沙羅双樹」

監督河瀬直美

作品紹介：双子の少年の片割れが神隠しにあい、消えてしまう。

幼年期との決別。これっぽちも説明しようなんて気が無いところが良い。「失踪」は、観客の目を

内側に向けさせる仕掛けのひとつだが、効果覲面。失踪した片割れが見つかった時、圭は鏡の中の自分を見つめる。あのシーンはさまざまな示唆を含んでいる。大人になりきれない、未熟な自分に対する歯がゆさ。それらの心の機微が空、雨、雷鳴に重ねられていく。解体中だったり修復中だったりする古い家屋も印象的である。

.....

「自由の幻想」

監督ルイス・ブニュエル

作品紹介：伝説の前衛映画「アンダルシアの犬」で知られるブニュエルの、フランス時代の後期傑作。

ひとつだけの答えを信じること。それは想像力を阻害し、それを目的としている人々を守る城壁となる。見ていないから存在しないのか？知らないから存在しないのか？誰も見ていないからその答えは不正解なのか？権威は、ウソを真実に変える力を持つ。つまり、信じていたひとつの答えが不正解だった場合、その答えを信じていた者は全員で共倒れすることになる。ブニュエルは詩人の職務として、その危険から人々を救おうとしている。

ひとつの答えだけを求める庶民の愚かさ。娘が目の前にいても「あなたの娘がいない」と警察にいわれればそれを信じる両親。だが、警察を信じなければ娘がいなくなることもない。目の前にいるのだから。たとえ、目の前に正解があってもそれを正解と認めることができない。そんな愚かな人々をあざける挑戦的な笑いが、ここにはある。人々が倒れるのは狙撃者がいるからだろうか？それとも、狙撃者がいないのであれば、銃声は声にならない人々の心の叫びだろうか？

.....

「十六歳の戦争」

監督松本俊夫

出演秋吉久美子

作品紹介：「ドグラマグラ」で知られる松本俊夫による初期傑作。

ある暑い夏の日、あらゆるしがらみから逃げてきた青年は、河原に上がった心中した男女の遺体に出くわす。彼は、そこで秋吉久美子扮する女子高生あずみと出会う。2人の出会いはまるで、心中して果てた男女の思い出のように不吉で悲しい。夏の太陽の下、初老の女性の思い出が幻想

に侵され、陽炎のようにはかない少女の存在と重なり合い、どんな不思議な現象も許容してしまう。10代の可憐な秋吉久美子が、この難解な詩篇に華を添えている。

.....

「自由を我らに」

監督ルネ・クレール

作品紹介：

自由の本質とは「自分だけが自由であることは不可能だ」ということだ。自由という甘い言葉は「自由勝手に何でも思い通りにやれる」というイメージを想起させる。だが、一方では、そういう厳しさも持ち合わせているのだ。クレールは「自由」を分かりやすく説明するため、恋愛の自由を基調に物語を展開している。自由とは、自分だけが自由であることはありえないということである。つまり、主人公だけでなく、他の人たちも人を好きになる自由があるわけで、主人公が見初めた女は別に好きな男がいたため、主人公は自ら退きます。彼は、真の自由を認識し、実践している。これこそが民主主義国家アメリカに欠けている部分である。「他人の自由を尊重すること」。根にはそういう厳しい批評精神が宿るが、表向きにはユーモラスで万人向けの作品ではある。

.....

「情事」

監督ミケランジェロ・アントニオーニ

脚本ミケランジェロ・アントニオーニ、トニーノ・ゲラ

出演モニカ・ヴィッティ

作品紹介：クラウディアの友人アンナが、クラウディアや恋人を残し、消息も残さずに跡形もなく消滅してしまう。「羅生門」に触発された「新しい映画」。

自然現象、日常の風景に心の動きを重ね合わせる話法が徹底している。この当時でさえ。それは別段真新しいものではなかったが、とにかく徹底している。死んだ心のかたまりのような荒れ果てた孤島。傷ついた魂のような割れた水差し。とにかく、ミケランジェロ・アントニオーニは、風景や事象に人物の内面を反映させる手腕に長けている。「心の造型」のパイオニアだ。この手法を完成させるには、洗練された観察眼が必要であり、それを元に、人並みはずれた想像力、集

中力が要求される。

アンナの失踪を、サンドロはじめ周囲の人々が不思議がる。だが、何が不思議って、いる人をいないと言うことほど奇妙なことは無い。アンナはいなくなっていない。みんなの目の前にいるのに、みんなはいなくなっただけだと大騒ぎし、アンナを探す。後半、誰もアンナを探さなくなる。なぜなら、いる人を探す必要は無いのだから。アンナ失踪後、モニカ・ヴィッティ扮するクラウディアが目にするアンナの友人たちの日常、例えば結婚生活がうまくいかずに若者と遊ぶ女友達の態度などが、アンナの決断に影響を与えているのは想像に難くない。つまり、クラウディアのアンナ搜索の旅はある種、アンナの記憶を再現している。アンナの失踪は、彼女の内面に巣食う懸念を知るきっかけに過ぎないのだ。

.....

「ジョニー・スウェード」

監督トム・ディチロ

出演ブラッド・ピット、ニック・ケイヴ

作品紹介：ロック歌手にあこがれるジョニーは、天から降ってきたスウェードの靴を手に入れ、ジョニー・スウェードを名乗る。

夢を見ることで人生の隙間を埋め合わせするジョニー。かっこつけていても、ゴージャスな女の子ダーレットの気分に簡単に振り回されてしまう。ミジメなジョニーの溢れるペーソス。人の良さが災いして歌手にはなれそうもないし、仕事は友達のディークの手伝いだけ。ニック・ケイヴ扮するフリークとジョニーの触れあいはおもしろい。ジョニーにとってフリークは将来の希望で、フリークにとってジョニーは過去なのだ。

ジョニーは、ダーレットにふられたあと、身の丈にあったイボンヌとつきあう。だが、夢見がちなのに、イボンヌに対する気持ちを否定したがる。その悲哀と痛々しさ。苗字を明かさないうジョニーは過去を否定して理想を演じたい。けど、理想を求めない大人のイボンヌに対してジョニーは無力感を感じる。ジョニーの視点で描かれているため、鑑賞側にも劇中のジョニー以外の人々が苦悩している様子は見えない。ジョニーは幼いのだ。夢見がちでまだ大人になりきれない大人に向けられた応援歌。

.....

「書を捨てよう、町へ出よう」

監督寺山修司

作品紹介：

カメラがあるからといって演じているとは限らない。カメラがないからといって演じていないとは限らない。ここには、その全てが記録されている。俳優だから演じるとは限らないし、俳優じゃないから演じないとは限らない。演じた演じないに拘らず、俳優や俳優でない人々が、カメラの前で生きた現実が記録されている。路上パフォーマンスを演じている俳優の前を素通りする一般人。彼らの方が俳優以上に演じているかもしれない。演じているから虚構なのか、演じていなければ虚構ではないのか。

編集しているから虚構なのか、編集していなければ虚構ではないのか。スクリーンに映っているから虚構なのか、スクリーンに映っていなければ虚構ではないのか。フレームの中は全てが操作されている。だが、フレームの外は操作されていないのか？フレームの中にしか答えはないのか、そして、フレームの外に答えはないのか？つまり、演出、脚本がないからといって佐藤栄作が演じていないとは限らないし、演出家や脚本家がフレームの中にいない、つまり、ぼくらが彼らを見ていないから佐藤栄作の背後に彼らは存在しないということではない。

.....

「知られぬ人」

監督 トッド・ブラウニング

出演 ロン・チェイニー、ジョーン・クロフォード

作品紹介：奇形の人々をキャスティングした伝説的な「フリークス」で知られるブラウニングの初期傑作。

「何がジェーンに起こったか？」でのオバサンのイメージしかなかったのが、若かりし日のジョーンにびっくり。時代を超えて魅力的である。監督は言わずと知れた伝説のトッド・ブラウニング。ということで、期待して観照に臨んだが、やはり良い。ホラーではないが、怖い。人間の業を描いているわけだが、この頃のハリウッド映画にしたら、だいぶ重くて暗い作風である。ただのメロドラマではなく「コアな人間ドラマを描くんだ」という気概を感じる。ロン・チェイニーが腕を切り落としてからラストへと突き進む一連の流れは、非常に心臓に悪い。大昔のサイレントを観ている、ということをおぼろげに思い出した。

.....

「死霊のはらわた」

監督サム・ライミ

出演ブルース・キャンベル、テッド・ライミ

作品紹介：キャンベル扮する主人公は彼女と共に山奥の廃屋を訪れる。そこで、彼は奇妙なテープレコーダーを発見した。

細かい点に工夫を施しているため、斬新なことをやっているように見えるが 案外、基本に忠実で古典的。熱意とアイデアがつまみで、最初の15分間は息つくひまもない。ブルース・キャンベルが自分の手と戦うシーンでは、サム・ライミの初期の実験短編「ATTACK OF THE HELPING HAND」のアイデアが流用されている。あそこはもうキャンベルすごい。この人は何でも出来るな、というか熱意だけであそこまでやったのか？キャンベルの孤軍奮闘は緊張感にあふれていたが、他の4人が加わってからも勢いが中だるみすることなく、前半以上に盛り上がってしまう。

全体的にマーヴェルやらのアメコミ色、カートゥーン色が濃厚だが、霊が出現するシーンは非常にアバンギャルド。いろんな要素が絡んで、多彩な手腕に翻弄される。女性に絡みつくとツタも人間ならでの想像力の賜物で、機械ではあの味は出せない。想像力に欠ける点が機械の弱点なのです。キャンベルが、マッドマックスばりにひとりで化け物に立ち向かう姿、「LET'S GO」はキマリすぎるほどキマっているし、誰でもキャンベルが好きになるでしょう。もう、頭のためのジェットコースターです。

.....

「新学期操行ゼロ」

監督ジャン・ヴィゴ

作品紹介：期待されながら、若くして急逝したヴィゴが残した3作品の内のひとつ。

ユゲ先生の落書きが動き出すシーンをとってみても、創作手段に制限がない。自由な雰囲気にあふれている。だが、自由の描写は同時に権力批判の主張となる。というわけで、どうしても権威ににらまれることになる。ジャン・ヴィゴは、教育を人間性を否定するものとして批判しているが、怒りではなく、ユーモアを基調にしている。生徒たちが「屋根から本を投げて教師たちを爆撃」というかわいらしい反抗も、当時としては危険だった。とにかく、ヴィゴの人生を見れば分かるが、権力側はこの作品により、映画の持つ力を再認識した。つまり、芸術家による民衆の心の解放を危惧したのだ。

.....

「ストレンジャー・ザン・パラダイス」

監督ジム・ジャームッシュ

作品紹介：ハンガリーからニューヨークに移住していた青年のもとに、故郷からいとこであるエヴァが訪れる。

ニューヨークに住む異国の青年の望郷の念が悲しい。そこにハンガリーからいとこのエヴァがやってくる。いつも黒に身を包んだ、影のようなエヴァ。2人の関係には、光と影のような関係性を窺うことが出来る。肉親とは縁を切ったとか、故郷や過去を否定する青年ウイリーの言葉・態度は、単なる強がりにはしか見えず、悲哀が漂う。彼は、過去を忘れて理想を演じていたいのだ。それに対して、いとこのエヴァはウイリーの内なる声を代弁するためにアメリカに来たようだ。お互いがお互いの内面に隠されたモノを反映させる媒体の役割を兼ねている。最初はスロースタートだったが、後半からエンジンがかかりはじめ、コメディがかってくる。このショボイ笑いの感覚はジャームッシュならではの感じた。心が豊かになる笑いのセンスです。

.....

「砂時計」

監督ヴォイチェフ・イエジー・ハス

作品紹介：青味がかかった寒々しい画面に登場する奇妙な人々。如何にも北国の前衛劇という趣きである。

あの汽車の中の乗客たちは、輝くことをやめたかつての希望、熱意、思い出のようだ。主人公の男は、汽車で体内を旅する。彼の目的地はどこだろうか？青に染まった、何年も省みられないまま放置された世界。その世界の中心にそそり立つ打ちひしがれた巨大な臓器のような建築物。その脈打つのをやめた肉の内部にうごめく奇妙な人々。どうやらそこは病院らしいが機能していない。主人公は勝手に院内を探索する。話しかけるヒトの数だけ、彼は苦悩を抱えているのか。それは皮膚の下に眠る、凍てついた記憶の再発見と対話。この忘れられた世界は、長いこと自己を省みることのなかった人物の内面のように寒々しい。

いろんな部屋があるが、どこも亡霊のような人たちに占拠されている。おっさんで溢れかえった部屋の二階には魂を失ったような肉だけが生きている狂女がいて主人公に襲い掛かる。彼女はユーモラスで、怖くもあるがエロチックで、少々の郷愁も感じさせる。それとは別に、おっさんば

かりの部屋は異様な喧騒とは裏腹に無人感に貫かれている。ヴォイチェフ・イエジー・ハスの妖気漂うビジュアルが鮮烈。

.....

「スパイ」

監督アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー

作品紹介：しがない地方の精神科医にアメリカの諜報員が接触し、ALEXなる人物を病院内に匿う仕事を依頼する。そして100万フランを前金にもらい、残りの400万は終了後に渡すと言われるのだが、翌朝起きたら看護婦も給仕の娘もいなくて、代わりにうさんくさい中年女と2人のギャングみたいな男がいた。その日から精神科医の日常は変わってしまう。

自分の周囲にひとくせもふたくせもある人々が張り付くのだ。病院には3人の看護婦と給仕を模したスパイ、いきつけのバーにはなじみのバーテンダーの代わりにバーテンダーを模したスパイ、店内にはオカリナ旅団を模したスパイの団体も一日中バーにいる。そして、ひとりのオカリナ吹きが精神科医の動きに合わせてオカリナを吹く。スパイは、自分の過去と日常を放棄し、他人の日常を隠れ蓑にする。まるで、可視化された精神病患者の悪夢のごとし。諜報活動の基本は、ご主人様の命令に従うことである。つまり、人間性は排除されなければならない。その命を実行・完了させるために、標的の身边で利用できるものは何でも利用する。標的、他人をモノとしてしか見ないスパイ。仲間をモノとしてしか見ないスパイ。そして、スパイをモノとしてしか見ないご主人様。

スパイは学問の集大成でもある。演技、電気工学、情報戦略、戦術、社会学、経済学、心理学、歴史、化学、科学、医学、薬学、語学etc。人類の英知の結晶のはずなのだが、それなのに諜報活動は人を不幸にしかしない。何たる皮肉か。彼らは学問を駆使し、欺瞞、ウソ、あざけり、騙し、裏切りを人々に強要する。それがスパイの日常だ。スパイが去る時、利用された人々、家族は関係を破壊され、内面に戦場の跡のような刻印を残される。ヴェラ・クルーゾー扮する精神病患者の女性の病の原因がスパイの作り出した悪夢なのだとしたら打つ手はない。人類が存在する限りその熱は醒めない。女性患者を見るアンリ・ジョルジュ・クルーゾーの目は、何を見ているのか？けっきょく、誰でもスパイになる正常な世の中よりも、スパイになれない狂った人の方がまともだという皮肉。ある種、狂っている人間だけが文明の毒牙を免れたホンモノの人間なのだとはいたげだ。

.....

「スピリッツ・オブ・ジ・エア」

監督アレックス・プロイヤス

作品紹介：流刑地で暮らす2人の兄妹のもとを訪れるナゾの訪問者。

悲しげな音楽と共に始まるオープニングが印象的である。3人の異質な人物が繰り広げる悲しげな笑い。3人とも甲乙つけたがい、やはりベティに軍配が上がる。趣向を凝らした紛争が痛ましくもキュート。妹が精神的に不安定、車椅子の身の兄が空を飛ぶ夢を抱いている。陰鬱な「クロウ」「ダークシティ」でもそうだったが、プロヤス自身が投影されているだろう。オーストラリアのまっ黄色な大地とまっ青な空の原色が鮮やかである。

.....

「スフィンクスの謎」

監督ローラ・マルヴィ

作品紹介：ストーリーテリングよりも日常を異なる目線で見ることが重視した実験映画。

マルヴィは物語、演出、演技を極力廃し、一方向にのみ動くカメラにしか特長を与えていない。これが死者のような冷たいまなざし、かつ挑戦的なまなざしを形成している。ミニマルな要素だけで暴力的な視線を構成する辺りはキューブリックのセンスに通ずる。しかし、キューブリックの目にはユーモアが湛えられているが、マルヴィの目は感情を完全に否定している。「ラ・ジュテ」でも顕著だったが、この作品も死者の思い出のようである。離婚をし、低賃金労働で幼子を養いながら母子家庭を営む若い母親が主人公だ。

.....

「スリ」

監督ロベール・ブレッソン

作品紹介：劇映画ではあるが、ストーリーテリングは無視して異なる視点から日常を眺めている。

地味な作風とは異なり、ブレッソンは非常に攻撃的な詩人である。劇中のセリフ「泥棒が優秀な

ら許される」。これは国家を皮肉った言葉だ。ブレッソンはスリの日常を描写することで、スリを賛美するのではない。国家と、国家を認めている民衆の批判をささやかに行うのだ。ブレッソンが素人を多用するのは、彼らには名前がないからである。俳優は、顔と身体さえあればいいのだ。顔と身体はあるが、名前が無い人物。それは、ぼくら自身たりうる。つまり、観客は映画を見てスリを批判する。だが、それは同時に観客自身の否定でもあるのだ。

.....

「There's Always Vanilla」

監督ジョージ・A・ロメロ

作品紹介：あの「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」の後に撮られたロメロの長編第2作とは思えないだろう。しごくまともな作品だが、ロメロにしたら奇妙な作品ということになる。

主人公の青年は、世間の人々のようにまともに生きる努力はしないが、自分自身を守るための努力は惜しまない。しかし、それは人として尊い行為だが、大抵、世間には理解されないし受け入れられることもない。生活力のない青年の前に悲観して荒れる恋人。しかし、青年に悲壮感はない。ここで描かれているドラマは、ゾンビになるまいと必死でスーパーマーケットでサバイバルを演じた人々の日常版の如し。

.....

「生の証明」

監督ヴェルナー・ヘルツォーク

作品紹介：故郷を離れ、異郷の地に駐留するドイツ兵たち。個人の力量とは無縁な、しかし人生で足止めを喰らってしまう人々のたそがれ。

異邦のかなたへと赴くということは、背景と日常の放棄でしかない。であるから、当然、幽霊が土地に根付いた暮らしをおくることは不可能だ。主人公、シュトロツェクが地元の人々と交流したとしても、それはすれ違いでしかない。手を触れたとしても、お互いの間に横たわる隔たりを改めて痛感するだけだ。かれらは地縛霊のように動けない。不案内な現地人に怒ったり、ヒマをもてあますだけの毎日が続く。シュトロツェクらは、奇妙な青年や少女にも出会うが、幻覚を見た気がして不安になる。しかし、あの風景は圧巻だ。異邦人の彼にしてみれば、まるで無用の長物なワケで、大喜びするのも無理はない。

役割に執り憑かれ、自分の主張を殺すあまり異郷の地で暴発してしまう不満。シュトロツェクは、地元の人でもドイツ人も分けへだてなく不満を持って生きている、全ての人々の幻想と化す。彼らが隠している日常に対する不満を暴き、夢を実現するのだ。人々は、シュトロツェクの行動を心の奥底で望んでいたわけで、あの破滅的なシーンに不快感や悲愴感はない。ヴェルナー・ヘルツォークの優しいまなざしは誰も責めない。あきらめのココロが大事な時もあるのだ。

.....

「ゼイリブ」

監督ジョン・カーペンター

作品紹介：妙なサングラスを手に入れた労働者が、サングラスを通して世界の正体を知る。世界は、その姿を変えることがないまま、いつのまにか異星から来たエイリアンに掌握されていたのだ。

視点を変えて世の中を見ること。カーペンターは特殊なサングラスを登場させてコトを容易にしている。敵味方の区別が容易につかない場合、味方の誤解を招くことがある。敵はそれを利用する。「遊星から来た物体X」にも見られたテーマだが、見えない敵が見えた時の、爽快感がなんとも言えない。敵が見えない理由のひとつに、現代社会ではひとつの答えしか認められていないことがある。それは、答えがひとつの方が大衆を操作しやすいからだ。だが、国民全員が信じているたったひとつの答えが間違っていた場合どうなるか。それは、国民が全員共倒れすることを意味する。それが、ナチスや大日本帝国の末路だった。無知・無関心が、敵を守る城壁となる。

.....

「セリーヌとジュリーは舟でゆく」

監督ジャック・リヴェット

作品紹介：青写真は用意されていたと思うが、全編その場のひらめき、インプロヴィゼーションで描ききられた。

少女にとって鏡の世界は安全である。なぜなら、そこには彼女が見たいモノしか映らないのだから。だが、とっくに成人したセリーヌとジュリーにとって鏡を覗くことはいたたまれない。なぜなら、そこには追憶しか残されていないのだ。鏡に閉じ込められた影たちの世界。ボロボロの

人形が死んだ子供みたいで不気味だが、これは大きな示唆である。セリーヌとジュリーは、少女にとっては夢と希望であり、少女は2人にとって過去、思い出なのだ。

少女は妄想の世界の虜であり、セリーヌとジュリーは過去に囚われた囚人なのだ。赤い手の跡は初潮の印か？幼年期はもう戻らない。セリーヌとジュリーの身体にもその赤い手の跡は残っていた（セリーヌは赤い手に対してよい思い出がないようだが）。身体の変化に対して白いワンピースを着た少女は全くの無力だが、セリーヌとジュリーという鏡の向こうの頼もしい影たちが彼女に加勢する。しかし、問題は解決しない。孤立無援の魂に向けられたリヴェットのまなざしは優しい。

.....

「ゼロシティ」

監督カレン・シャフナザーロフ

作品紹介：ヴァラーキン氏は、出張先で奇妙な人々の洗礼に合い、迷宮に迷い込んでしまう。ソ連時代に製作されたロシア製不条理喜劇の快作。

見知らぬ街に置き去りにされたヴァラーキン氏は、奇妙な人々に無理難題をふっかけられ、あげくに、街から出られなくなってしまう。デタラメなロシアの歴史を演じるマネキンが並んでいる博物館の館内は悪夢的であるが、過去がデタラメなら、今いる自分の存在とはいったい何だろう？主人公のヴァラーキン氏は、自分の体内で迷子になる。自らの血と肉に惑わされるのだ。

淡々とした筆致にシュールなユーモアを湛えたシャフナザーロフの作風は新鮮である。西側の影響を受けていない異国情緒が出色だが、ナゾのジャズバンドが演奏するジャズも一種異様。さまざまな仮面を被った自分との対話から、どれだけヴァラーキン氏が生活に疲れているかが窺える。

.....

「戦慄の絆」

監督デビッド・クローネンバーグ

作品紹介：退廃的な、双子の産婦人科医の人生に織り込まれた、映画の根幹を成す「誰か」の内的苦闘。

クローネンバーグの極めてパーソナルな内的世界が双子の人生に重ね合わせられてる。アント

ニオーニとは異なり、万人向けというより内省的で、自分の為で作ってる。閉じた、自分の中で完結した世界の印象が濃厚である。クローネンバーグの化身と言える兄弟。女の名を冠せられたネクラなビバリー。きっかけさえあれば容易に沈んでしまう。

モテル兄とひとりの女優をわけあうビバリー。それをきっかけにギクシャクし始める双子の関係に、じわじわと人を蝕む、何らかの罪の意識、断罪衝動がダブる。退廃的な、双子の産婦人科医の人生に織り込まれた、映画の根幹を成す「誰か」の内的苦闘。他でもないクローネンバーグ自身の声だ。クローネンバーグは、常に性欲を呪いとして捉えてる。性の歓びではなく、破滅しか描かない。あのラスト。強烈に意味不明。

.....

「戦争は終わった」

監督アラン・レネ

作品紹介：スペインーフランス。あちこち飛び回るうちに他人の幻想と化すモンタン扮する主人公は地下運動のメンバー。

自分の正体を隠すために、各地でいろんな名前を使い分け、いろんな人にいろんな名で呼ばれる。言葉があるから存在していただける。それ以外の方法では実在を認識できない。人々が言語を解するから存在していただける男。そんな幽霊のような、自分を形成する日常・背景を放棄して、他人の日常を隠れ蓑にして生きるという、半ば 諜報員のような生活続ける意志。そのルーツを考えることで、男の過去・人生が見えてくる。男は夢を見ている。だから生きていただけるのだ。基本的にウソをついて生きている男。自分の存在までがウソなのではないかと不安になる。男の存在を支えているのは、目くらましのために男の妻役を演じている女性の愛だが、じつは、彼女自身も男の正体には関心がなく、彼女が見たい理想の男性像を男に重ねているだけだ。その非情。女は夢を見ている。だから生きていただけるのだ。人類は夢を見ている。だから生きていただける。そういう、レネの批判と同情の念が核を形成している。

.....

「双頭の鷲」

監督ジャン・コクトー

作品紹介：

山頂、木霊で遊ぶ女王一行。だが、彼女は「他人の名が返ってきそうで怖い」とポツリ。鏡に他人が映ってしまうとき、その人は真実を認めることが出来ていないのだが、彼女が置かれている状況もまさしくそれだ。彼女は何かを隠している。そして、尚も隠し続けようとしている。だが、それは一生隠しておくことは出来ないものだ。いつかは面と向かって向き合う日が来る。彼女にとっては、逃亡者の出現がまさにそれである。ジャン・コクトーが冒頭で断わりを入れているが、当時の王室は実際には権力を握っておらず、大企業や大資本家に操られるだけの人形だった。彼女も劇中「王室は見世物だ」とこぼしている。劇中、本当に力を持つのは大富豪の手先、警察だということがわかる。女王の傷ついた内面で誕生した女王の化身と言ってもいい男が、警察に追われてしまうのも道理だ。

.....

「ZONE」

監督伊藤高志

作品紹介：人物は登場しない前衛的な短編作品。

止まっている砂時計がおもしろい。伊藤高志は過去を振り返っているのだ。ぐるぐる回り続けるおもちゃの電車も迷走する思考のようだ。伊藤は、脳を成立させている要素を発見する。それは細胞やたんぱく質ではなかった。人が経験した全ての瞬間、瞬間。どうでもいいことまで媒体化すると膨大な情報量になるが、これは脳の機能に対する畏怖の念とでもいおうか。そして頭部のない人体。ヒトは過去に支配されていることを縄で縛り付けられた人体が教えてくれるが、やがて人体は自分を成立させているモノに対して反逆を試みる。

.....

「対角線交響曲」

監督ヴィキング・エッゲリング

内容：前衛の先駆的作品。

マン・レイと同時期に映像で音楽を奏でる実験をしたヴィキング・エッゲリング。ダダ的な図形が消えたり出てきたりする実験アニメ。まだ稚拙だが、新しすぎる発想が当時としては危険だったのかもしれない。エゲリングは、この作品が完成した直後に急死する。

.....

「タイム・ワープ・ゾーン」

監督ノーマン・J・ウォーレン

内容：転覆を逃れた6人の青年男女が無人島に上陸し、時の狭間に放置された古ホテルで、奇怪な現象に襲われる。

不可解なイメージの連続。起きたまま悪夢が見たいならこれに尽きます。ノーマン・J・ウォーレンの悪夢を描く際に発揮される手腕は匠の域に達していると断言したい。このイギリス出身の才気あふれる監督はデビュー時にはベルイマンを想起させる作品を手がけていたが評判を呼ぶこともなく、B級ホラーに身を投じ、食べていくために苦労を重ねたのだが、甲斐もなく、その末にこのタイムワープゾーンを最期に映画制作から手を引く。

この作品ですが、6人の若者が無人島に辿り着くことから始まります。しかし、島には昔営業していたと思われる古いホテルがあった。若者たちは助けを求めて呼びかけるが誰も応えない。6人はあきらめてそれぞれくつろぎ始めるが...。若者たちを追いつめる不安、心細さ、孤立感が秀逸。しかし怖いだけでなく、詩情すら感じさせる。あの意味不明なラスト、あのラストは絶賛したい。とにかく冴えてます。

.....

「誰もいない国」

脚本ハロルド・ピンター

内容：サー・ジョン・ギールグッド、サー・マイケル・レッドグレイヴら名優が織り成す、緊迫感溢れる室内劇の秀作。

外から見ても部屋の中の様子はわからない。「心」と一緒だ。ということで、心ある芸術家は心のメタファーとして部屋を使用することが多い。この作品でも、部屋に4人の人物が出入りし、言いあいをする。最初の2人の老人が会話をする時に片方の人物が暗い背景をバックにたたずみ、もうひとは明るい方に配置される。こういう方法で2人の関係性の示唆を施すことで *Speak of Mind*、心の声の視覚化が容易になる。コレは頭の良い人、詩人にのみ可能な方法。邦題では国と訳されているが、この場合、*Land*は部屋と捉えることもできる。詩人が用意した部屋にたくさんの人物が登場しても、その部屋には誰もいないも同然なのだ。

.....

「地下水道」

監督アンジェイ・ワイダ

内容：戦闘ではなく、戦闘に従事する兵士たちの人間模様に焦点を当てている。

下水路に迷い込んだ兵士たち。だが、先へ先へ進むうち、どうやら彼らは心の闇に迷い込んでしまう。普段封印している領域に踏み込む人々。戻ってこれないヒト、結構いますね。戦争映画に商品価値や陳腐な問題意識を求めていないところに好感が持てます。ポーランドでは当時、戦争は身近であったかもしれないが、人間は例えどんな状況下であろうと通常の間と変わらない。戦争なんかしていなくても、個人個人は常に争っているのだ。戦争にアクション活劇の要素を求めず、その状況を利用して人間の内面に光を当てるワイダの知性に敬意を込められずにいられない。

.....

「冷たい熱帯魚」

監督園子温

内容：一級の娯楽作品として成立している一方、人間の深層を深く抉っている。

規格通りに生きる男と規格通りに生きることが出来ない男。この2つの悲劇が作品の軸を成して

いる。国家によって、人生のために戦うことを禁止され、本能を忘れた人々。園は、自分を含めた彼らを笑う。ニセモノで満足するしか術がない人々の悲哀。園は、その象徴としてプラネタリウムを持ち出している。民主主義社会では暴力は悪である。しかし、「敵を間違えていない」のであれば暴力も大いに結構なわけだ。この作品の人物たちは敵を知らないので自滅していった。敵を知れば自滅することもなかった。民主主義社会では「敵は存在しない」と教育されているため、敵を知ろうとすることすらない。実際に敵がいないのであれば何も起きないが、敵を知らないだけであれば、みなさんは劇中の人々と同じ運命を辿るのだろう。

.....

「ドグラ・マグラ」

原作夢野久作

監督松本俊夫

内容：古臭いエロス、鋭いナンセンスと核に宿る禁忌。虚構と現実が入り乱れている。

思春期の訪れは、時に少年を脅し、悪夢、或いは断罪者を幻視させることもある。「ドグラ・マグラ」は不気味な郷愁、幼年時代に知っていたが成人して忘れたある種の畏怖の念に貫かれてる。禁忌っぽいところもいい。そういう無意識下に渦巻く見えない世界を可視化するには、作家に確かな観察眼と表現力が求められるけど、その点で夢野久作や松本俊夫は信用できる。と、あと必要なのが詩人に身体を提供してくれる役者。いろいろな役者とか出てるけど、特に桂枝雀、最高。落語家ゆえかどーか知らないけど声、しゃべりが聴いてて心地良い。見掛けが何となく気持ち悪い(ホメてる)ところもいい。劇中のほとんどのイメージは虚構なんだろうけど、ただひとつ、少年がこのドグラ・マグラという夢を見る契機になった現実的な場面がひとつあると思う。それは多分、少年がトイレにたって戻ってきた時に見た...

.....

「トゥルーマンショー」

監督ピーター・ウィアー

脚本アンドリュー・ニコル

内容：いち個人の人生をエンターテインメント化するメディアの傲慢と偉大なるエクスプロイテーションの戦い。

デビュー時から一貫して悪意と皮肉の塊のウィアー、彼の映画の登場人物はいつでも彼の悪意や嘲笑を受ける為の標的だと言う印象があるが、そういう意味で「トゥルーマンショー」は正に彼の集大成と言える。トゥルーマンはスクリーン上でさらし者にされている、彼は生贄。嘲笑の標的にされている彼を見て僕達は笑う。だが彼の抱えてる問題に僕達自身の現実を見出す事で、僕達はスクリーン上でトゥルーマンと共にさらし者になっている自分自身を笑ってることに気付く。コメディという触れ込みだが時にそのユーモアを超えた、あまりに冷めた悪意にそんな居心地の悪い思いをしてしまいますね。

.....

「抵抗」

監督ロベール・ブレッソン

内容：投獄された青年が脱獄する様子を丹念に描くことで、主人公の背後に隠された、語られない物語を語る試み。

男が何をやったかについては全く触れられない。つまり、男が何をやったかについて考える映画。男は必死で脱獄を試みる。淡々とした画面にあふれる雄弁な逃亡の意志。獄中の男のセリフ。「希望を捨てるな、自由になりたい」。つまり、このひとことで、男がなぜ逮捕されたかがわかる。男はシャバでも逃亡を試みていた。そう、罪状は逃亡。自由を求めたこと。おもしろいことに、ある意味、獄中でシャバでの男の生活が再現されているのだ。男は獄中で逃亡を夢見、必死に考え、行動する。彼はシャバでも全く同じことをしていた。それは、ナチス統治下のフランスが舞台の為、男がナチスの統治に対して抵抗していたことはすぐにわかるが、懸命なブレッソンは、ことさらにナチスを批判しない。じつはブレッソンは、当時の自由なはずのフランスを同時に批判的に描写しているのだ。その皮肉。

.....

「できごと」

監督ジョセフ・ロージー

脚本ハロルド・ピンター

作品紹介：中年の不倫劇に、若さに対する羨望、老いに対する恐怖が織り込まれている。

青年は事故で死んだわけじゃない。ピンターもいろいろ指示を出したと思うが、ロージーは「

召使」同様、見事に期待に込めている。考えてみれば、主演ダーク・ボガード、脚本ピンター、監督ロージーという布陣は「召使」の時と同じ。中年大学教授、美人留学生、大学生青年の3者の関係が軸に据えられている。3者とも互いに憧れを抱いているが、同時に脅威も感じている。その描写がおもしろいし、知的。というか、映画の要。教授は老いから青年の若さに脅威を感じ、青年は経験・知識・経済的な不足から教授に脅威を感じている。美人女学生も「何か」に脅威を感じている。想像力豊かなピンターは美人が自分の美に脅威を感じていることを見抜く。ピンターは、どんな人間にも弱点があるということを指摘し、自分の見たいものしか見ない、安易な夢を見る人々を批判する。ドラマは淡々と展開するが、その静寂は「キャラ全員が自分の真意を隠している」という演出に起因する。一方で、ピンターはこのドロドロで複雑な大人のドラマに、無邪気な少女のシークエンスを織り込み、人間に希望を見出し、深みを与えている。

.....

「テオレマ」

監督ピエル・パオロ・パゾリーニ

作品紹介：謎の青年が、家族の内に隠されたモノを暴いていく。

金があっても買えないものがある。コレは実は金持ちにしかわからないし、裕福であればあるほど痛感するのだろう。パゾリーニは、鏡を見たときに別人が映るという映画言語を用いているが、アントニオーニやブニュエルに比べて絵画的ショットに頼っていない。そこらへんは文学畑出身者らしい。心の機微を事象や風景に重ねようとは思っていない。だからといって画面の厚みが他の作家に比べて劣るわけではないが。あと、優れた芸術家はたいていは宗教を憎悪するが、パゾリーニはキリスト教が貧しい人々を救うエピソードを描いている。ただ、見方を変えれば、裕福で教養のある者は芸術、不倫、カウンセリングなど逃げる術をいくつか知っているが、無教養な貧乏人にとって、現実から逃げる術といえば宗教しか考えられないのだ、という同情が込められているのかもしれない。どっちにしても「豚小屋」の習作のような作品。

.....

「鉄男」

監督塚本晋也

作品紹介：沸き返るバブルの裏側で製作された、忘れられた郷愁と都市の暗黒面のハイブリッド

。

モノクロの画面にマッチングが良いメタルビートはノイバウテンやSPKぽくて良いし、鉄男と「やつ」が誰もいない公道を疾走するシーンはカッコよすぎる。いつか見た忘れられた悪夢みたいだ。「他人」は一切画面に映らないせいか、無人の街並みは巨大な鉱物のような印象を湛えている。そして機械化した「鉄男」と「やつ」は、苦悩しているだけにじつは普通のヒト以上に人間くさい。代わり映えしない機械的な毎日を生きて、まるで身も心も機械化してしまったように思えても苦悩する分だけまだマシなのさ、みたいな。

.....

「天使のゲーム」

監督ワレリアン・ボロフツィク

作品紹介：死臭漂う、前衛的な短編アニメ。

真っ赤な世界は肉のように生々しく、血の臭いさえする。ゴトンゴトンいってるだけの見えない列車は人体の内部を走っているのだ。家畜の悪夢経由、屠殺場一時停車、原始の祭典行き。憎悪、悪意という臓器が脈打つ姿は不気味だ。悪魔は人の中に棲みつく。では、悪魔の棲みかとはどことなくところか？「こんなところさ」とボロフツィクは言っている。数多く作られた彼の短編アニメの中でも直に不気味な作品である。

.....

「道化師」

監督フェデリコ・フェリーニ

作品紹介：フェリーニが道化師たちにインタビューを試みる。

ピエロは日常を放棄して観客の夢を反映させる媒体となるが、過去や日常が無い状態は幽霊や幻覚と同じだ。観客は白塗りの下に隠れた日常を目にすることは無い。だからフェリーニ少年は彼らを怖いと感じたのだろう。時が経ち、フェリーニにはあの化粧の下に隠された日常を探すことになった。永年の懸念だった彼らの正体を知る機会。しかし、自分を隠して他人を演じるというのは実は現代人の本質そのものであるワケです。そういう現代人が抱える非情が道化師の運命に重ね合わされていて悲哀に満ちていた。フェリーニのピエロの運命の追及は、同時に人間の末路を探る旅でもあるのだ。

老いたピエロのインタビューは興味深い。ピエロは魂を失った肉体のように悲しいが、老いたピエロは肉体を失った魂のように悲しい。娯楽にあふれた現代では道化師は消え行く定めにある。フェリーニの夢は名実ともに夢となってしまったワケだ。しかし、フェリーニが見たピエロは思いつきの中で幽霊として生き続けた。遺作「ボイス・オブ・ムーン」に至るまでそういう見方が最後まで活かされていた。

.....

「頭頭」

脚本松本人志

作品紹介：まっちゃんは長いノリつつこみのつもりだったらしいが、筆者は深刻な人間ドラマと捉えた。画面に充満する不気味な空気感に詩人の才覚を見た。

まっちゃんのモノの見方が優しい。セリフは少なく静かだけど表現力・観察眼は確かだし、それだけに無言の語りが雄弁である。「何かを理解することは己を知ること」であるが、まっちゃんも幼少期の頃に引かかかったままのものをひっぱりだして再検証している感じである。ということで、まっちゃんのまなざしは少々の懐かしさを帯びている。少年の日に見た、年をとることに対する哀れみや蔑視。そこで行き着いたのが、でも自分にもいつかその時は来るということ。これはその無常に畏怖の念を感じつつ、役目を終えた人に対するレクイエム、これから挑む人の決意表明である。

.....

「ドッグスター・マン」

監督スタン・ブラッケイジ

作品紹介：撮影するだけでなく、フィルム上にコラージュ、ペイントを施すことで、文明批判を繰り広げる。

偶然性を究め、人間の規律から脱してそこに自然のリズムを見出し、身近なものを使って未知を表現する。血だらけの内臓。それは、体内を覗いてそこに宇宙を見る試みだ。ブラッケイジ夫婦の交わりが交錯するが、あのフレアは神々の性交する姿だ。あかんぼの時が人間にとって一番幸せだというのは良く分かる。自然そのものだから。あの時期は人間が唯一、全身で自然のリズムと共に生きている時期なのだから。社会性、知識、文明がその自然のリズムを妨げることがない

時間。一方、彼はカメラという文明の利器を使って創作をしているが、フィルムの特長を無視して直接フィルムに傷をつけたりペイントしている。それは文明に依存する自分に対する引け目であり、文明に対する反逆なのだ。

マン・レイ、フィッシング、ハンス・リヒター、レン・ライなどはリズムを追究し、映像で音楽を奏でる実験のためにある程度イメージを操作するが、ブラッケイジはリズムもクソもなく、たれ流し状態。つまり、それこそが自然のリズムの再現なのだ。「自然は操作できない、出来ると思っていたらそれは単なるおごりだ」とでも言いたげだ。完全にイメージを操作していいモノを作るのも難しいが、ブラッケイジのように操作することを放棄して完全な自然体になること、動物のように無垢に、無心になることは困難だろう。文明社会で育った人間が自然のリズムを得るのは難しいことだ。でも、心臓は自然のリズムを刻んでいる。そのリズムを阻害する、獲得してきた知識とどれだけ疎遠になれるか。そういう挑戦的な態度がフィルムにみなぎっている。

.....

「トムトム、笛吹きの子」

監督ケン・ジェイコブス

作品紹介：既存の映画作品を用いているが、作品にではなく、フィルムそのものに改変を加えることで、見えてくるものと見えなくなるものを知る研究。

本質を探るために始めたはずの既存の映画作品「トムトム笛吹きの子」の解体と分析。これは、さまざまな角度から視点を変えてモノを視ることでどれだけその本質に迫ることが出来るかという苦闘だ。ジェイコブスは、最初に通常の見せ方でフィルムを映写、次にフィルムを拡大したり、止めたり、捻じ曲げたりしていろいろな方法で作品を変形させる。しかし、実は視点を変えて本質に迫ろうという試みを行うことで作品は全くの別物になってしまうのだ、ということにぼくらは気付く。

ぼくらが日頃見て認識しているもの。すべてが見たとおり、見たままなのか？という問いがここで提示される。この試みは正に実験映画の王道といえます。ブレッソンやデュラスの映画は通常の映画の形体を踏襲していますが、彼らの映画はジェイコブスの試みと全く同じものを有しています。映画を通して学んだモノの見方は日常に活用できるわけで、彼らの作品に触れるということは単なる鑑賞とは異なり、経験なのです。

.....

「囚われの美女」

監督アラン＝ロブ・グリエ

作品紹介：死臭とナンセンスが入り混じる、不思議の国のアリスの換骨奪胎バージョン。

饒舌な混乱。アートだがナンセンスなギャグもたまに炸裂する。悪夢的だが非常に洗練されている。「いつから何を待っているのかわからない」とボヤク主人公の男。初めから混乱している彼の周りをうろつく影のような人物たちの対応や言動も彼の助けになるどころかさらに彼を混乱させるだけ。なぞの女の捉え方が良い。彼女は彼の抑圧された声にならない心の叫び？悪性のファンタジー？彼が想い焦がれる「女神」はどうやら「死神」でしかない。厳しいなあ。

.....

「ナタリー・グランジェ」

監督マルグリット・デュラス

作品紹介：

自分で答えを隠しながら、誰が答えを隠しているのかを知るための研究。陰謀装置として製作された50年代のアメリカ映画「悪魔の種子」。デュラスは、「悪魔の種子」の製作者の意図をよそに、自分が感じた内面の震えを再確認するために、身体のアちこちに散った記憶の断片を拾い集めて自分なりの「悪魔の種子」としてこの作品を再構成している。つまり、この作品はデュラスの分身といえることができる。デュラスは、アントニオーニの話法を踏襲し、陰と陽、ラジオの報道、鏡、池などの映画言語を用いている。それにより、母娘の不和。第三者である父親の3者の見えない心の機微、3者を分かつ隔たりを可視化している。

.....

「2001年：宇宙の旅」

監督スタンリー・キューブリック

作品紹介：難解ながら、多くの人々に愛されている前衛SF映画の金字塔。わからないからいい、と評する人がいるが、ナンセンスだ。

出だしからいきなり寓話を語ろうというキューブリックの意図が見えます。アフリカの砂漠に存在しない猿をサルと共存させている点から見ても間違いありません。キューブリックは「猿は夢を食べる」という伝説を知っていたのだろうか？砂漠を舞台に設定したのもある種のメタファー的効果を狙っていると考えたい。あの、映画史上に類を見ないゆるい冒頭は、猿が「サルの夢」を食べていたから平和が保たれていたということを表している。「サルの夢」、それは「文明」だ。文明はいつの世でも周囲の人間を道具化することしか考えない支配者層のツールであり、科学文明は人間の道具化を根底に秘めて発達してきたといえる。敵を骨で殴り殺すサル。倒れる猿。サルの夢が実現する時が来た。

2001年の世界では科学文明は究極の発展を遂げ、人間の道具化に代わり、道具の人間化が可能になっている。道具であるHALは自分のことを意志を持った人間であると考えている。だが、どこからどう見てもHALは単なる道具でしかない。姿かたちこそ違えど、この点でHALはぼくたちに良く似ています。一方、ボウマン船長は何日遅れかの家族からの誕生祝いの歌を贈

られ、それをつまらなさそうに眺めている。文明は遠く離れた人たちを迅速に近づけるために発達したはずだが、実際には、彼は家族を身近に感じる事が出来ず、かえって大きな隔たりを感じ、戸惑っている。

文明に求められる完全幻想は人々に不幸をもたらすという一面をもつ。遠くにいる者同士を近づけることはできないし、両者の間にある大きな隔たりを改めて痛感させるだけなのだ。これはあまたの芸術家が好む主題ですが、キューブリックしかり。モノリスは周囲のゴツゴツした自然の風景とは対照的に完全な直線で構成されており、自然界には存在しない人間の手によるモノ、文明を象徴している。人類はある意味、人類史上最初に武器を使って仲間を殺した「ボスザルの夢の中」で生きているようなものだ。

.....

「西陣心中」

監督高林陽一

作品紹介：ジャパニーズ・アバンギャルドの一角を担う高林陽一の傑作。

性的に奔放だが人間には無関心な女。ただ自分の美貌と女であることを武器にして世間に復讐している。無表情な目の奥に横たわる悲愴感と呼ぶには生易しい感情を超えた冷たさ。いったい誰がそこまで感情のない人間になれるものか？女が何も無い田舎に帰るとはおもしろい。何も無い。劇中、女は「鬼」と呼ばれる。美しいです。高林のある種の女に対する考察が真剣で正確なのでまるで、とある患者の記録とも言えるくらいだが、実際はそんなものを超えてる。人間の全てを捉えるには学問じゃ限界があるけど、芸術ならOK。高見の見物じゃなく、同じ地平に立って人間を観察してるわけだし。てことでハッピーエンドになるはずもないのだ。

.....

「人間は鳥ではない」

監督ドゥシャン・マカヴェイエフ

作品紹介：ユーゴスラビア時代に作り上げたマカヴェイエフの初期傑作のひとつ。

人は死んでも夢を見るのか。人は死ぬと自分の顔を忘れるのか。新しい部屋を探しているというよりは、自分の部屋に戻ってきたみたいなの、何人も死人が出た部屋に住むことを決める男。心ある詩人はみな決まった型を用いる。その型を確認できれば、ホンモノかニセモノか鑑定の基準と

なるが、この作品はどうも検閲されて切り刻まれた印象がある。本当はもっと長かったのだろう。

基本的に、2人の労働者のシーケンスが交互に展開されているが、その根幹が中途半端に放置されていて、そのため、ラストも曖昧になっている。実際はちゃんとしたラストが用意されていたに違いない。アントニオーニの影響下にあるシーケンスや小道具もあって期待させるだけに残念だ。ただ画面の強度は高い。名誉を得ても老いからは開放されないという初老の男の悲哀が描写されている。老化は不治の病ですから。笑当然、できることといえば鏡を割ることくらいなのだ。

.....

「呪いの迷宮」

監督ジャン＝フランコ・ジャンニ

作品紹介：キリコ、ダリなどの30年代シュルレアリズムと、ホラーを融合した新しい風味のイタリアン・ホラー。

文明の影響にさらされた人の内面とは？という考察に奇怪なテイストが加味されたゴシックな雰囲気、怪奇不条理劇。主人公は社命でダラスからブダペストに赴くが、知らない街が醸す無人間の描写が出色で心細さを喚起します。あの街はまるで同郷のシュルレアリスト、ジョルジョ・デ・キリコが描く街のようです。

あの奇怪なクモ女はやたら怖いですが、その怖いクモ女と正反対の謎の美女は好対照だ。だが、根本的に美女の存在は怪奇なクモ女と同じくらい怖い。なぜなら美女の微笑みや誘惑は何か魂胆がありそうにもかかわらず、その罠にはまりたいという気にさせるのだ。つまり、あの謎の美女は、クモの巣を張り巡らせて獲物を狙う怪奇なクモ女と本質的に同じなのだ。主人公にモーションかける謎の美女は、彼と愛し合っている時でさえ味方に見えないところが怖い。

.....

「呪われた絆」

監督ロバート・アレン・シュニツァー

作品紹介：オカルトに分類されるが、深みのある悲劇が加味されている。

オカルト、超能力の設定が用意されているが、核にあるのは狂った女性の悲劇である。自分の娘

を愛することが出来ない女の怒りと悲しみ。監督シュニツァーの人間を見る眼は洗練されており、それだけにいくつかのシーンは心臓に悪い。しかし、礼的名現象を描く手腕は完全にオリジナルであり、低予算で誰にも知られない映画ではあるが、センスのよさと優しい語り口に魅了されてしまった。

狂った女を全力で演じ切った女優の演技は堂に入っており、後の展開を説得力のあるものにしていくし、女がこの世から消えてもまるでそこにいるかのような存在感を放つ。幼女の母が演奏する、狂女の無念を代弁するような悲しげなメロディは、狂女に対する同乗と罪悪の念と重なって一層悲しいが、さらに、無垢な幼い娘が何かに導かれるような演出にはある種の恵まれない人々に向けられた優しさ、高尚なまなざしを感じ、涙を禁じえない。

.....

「PARTICLES IN SPACE」

監督レン・ライ

作品紹介：ポップ且つ深遠な実験アニメ。

初期のカラフルで陽気な作品群から一転してミニマル。最低限の要素でどれだけ多彩な、変化に富んだ展開を生むことが出来るかというレン・ライの挑戦。画面は黒白2色しか使用せず、BGMもアフリカの民俗音楽が使われている。扇子が渋い。闇をバックに白の点、線を組み合わせ、図形を乱舞させる。抽象図形のダンス。ダダの精神に貫かれており、宇宙の創生でも見ているようだ。洗練されている。

.....

「バートン・フィンク」

監督ジョエル・コーエン

作品紹介：ハリウッドに呼ばれたインディーズ劇作家が直面する苦悩の数々。

夏は蚊の季節です。あいつらは勝手に忍び込んで断りも無しに血を吸う。そして満腹になっても感謝もしない。権力に似ている。バートンも蚊に苦しむ。彼が蚊に悩むその姿は「おまえの頭の中のものはわが社の所有物だ」と社長に言われて苦悩する姿とリンクしている。

.....

「蠅の王」

監督ハリー・フック

作品紹介：無人島に放棄された少年たちの生活が、次第に暴力に蝕まれていくサマを描いたショック映画。

文明社会から解き放たれた少年たちが押さえつけられていた衝動を無人島で爆発させる。正体分からないモノに対する少年たちの反応。これは考えさせられる。彼らは存在しない怪物に対す

る恐怖に執りつかれ、自分たち自身が恐怖と化してしまう。人は無知ゆえにいない怪物を実現させてしまうことがある。最後の15分間はただただショッキングで弱い人はあまりの惨状に眼を覆うはずです。そして、ラストにはアッと驚くオチが用意されている。もともとリメイクのようだが、監督フックの演出センスは確かである。

.....

「バクステール/ぼくをかわいがってください。さもないと何かが起こります。」

監督ジェローム・ボワヴァン

作品紹介：多感な思春期を生きる暴発寸前の少年が危うい、フランス産ショック映画。家族で見ないでください。

監督のボワヴァン、かなり病んでるとみた。子役の扱い方も痛快この上ない。日本じゃできない相談だ。起訴されます。フランスは小さなことにこだわらない冗談のわかる大人の国。動物愛護なんかなんのその。ヤワなファンタジーなんか微塵も感じられない。ふんだり蹴ったりの犬がかわいそうでした。コメディかと思ったらかなり心臓に悪い。動物を主人公にした愛すべき家族向け映画だと思って鑑賞すれば親は混乱し、子供は大泣きすること間違いなし。希代の問題作である。

.....

「ハピネス」

監督トッド・ソロンズ

作品紹介：アメリカの良心。

企業やコピー作家が人生の規格を決定しますが、一方ではそれに自分を当てはめようと必死な人たちがいる。そして、もう一方では何があろうと自分自身であらうとしているが理解されない人たちがいる。この2つの悲劇が映画の軸になっている。ちょっと冴えない人たちの人生賛歌。夢と現実の狭間であくせくしている人々の日常。心地よい語り口、確かな人間観察眼。ソロンズは優秀なストーリーテラーであり、詩人でもある。ちょっとシュールなギャグ、その合間に見せるマヌケだったり悲しかったりする人間ドラマ、と最初から最後まで飽きさせない。

.....

「パラドックス・ワールド」

監督アーサー・アラン・シーデルマン

主演マルコム・マクドウエル

作品介绍：これは絶対に観ていただきたい。見逃せば人生の損失となるでしょう。

謎が謎を呼ぶサスペンス、緊張感が張り詰めています。雰囲気的にはハロルド・ピンターの不条理喜劇を思わせる部分もあり、一方ではブラドベリのような不思議なSFのような味を併せ持つ作品である。特筆すべきは、出演者がたったの2人であるという点だ。知られていない女優マドリン・スミス・オズボーンと「あの」マルコム・マクドウエルの迫真の演技に、思わずこの異常な世界観に引きずり込まれてしまいます。それにしても、彼は期待を裏切りません。どこへ向かうのか分からない展開といい、もっと知られて然るべき映画だ。あのオチには唖然だが、このありえないオチも2人の演技力があってこそその賜物である。カルトサスペンスの知られざる傑作。

.....

「パリ、18区、夜。」

監督クレール・ドニ

作品介绍：人種のすれ違い。民族のすれ違い。人間のすれ違い。男女のすれ違い。被害者と加害者のすれ違い。陰と陽のすれ違い。

パリが舞台だが二人の主人公(白人女性、黒人男性)は外国人。店で老人が「最近特に外人が増えたな」と言うとおりに、交通機関の進歩で僕らは行きたい時に行きたいトコへ簡単に行ける。が、同時にそれは僕らの身边が知らない人達で溢れるということでもある。現代人、特に都会人にすれば当然の事だが見方を変えれば、毎日同じ人と隣り合わせる事があっても彼等とは会話も無く交流も生まれないという事実はとても奇妙なことに思える。頻繁に接近するにも拘わらず二人の主人公も決して会話など交わさない。ラストで女が塩を取ってくれと言って男に渡してもらう位だ。主人公同士、最後までなんの交流もない妙な映画。フィクションだが作家の目を通した現実と言える。不思議な余韻を残す傑作。

.....

「ハロウィン」

監督ジョン・カーペンター

作品紹介：ホラーの傑作として知られるが、一方で反戦を意図している。反戦映画、かくあるべし。

匿名の殺人鬼、そして何度殺しても死なない殺人鬼。つまりブギーマンは戦場の兵士と同じなのだ。反戦映画を含め、外国が戦場の舞台となっている戦争映画を観ていると、どうしても娯楽感覚で見てしまいガチです。それは、戦争を遠い異国の出来事ととらえてしまうからでしょうか。しかし、カーペンターはその点を改善しようと戦争をアメリカの日常に持ち込んだ「要塞警察」をつくり、「ハロウィン」でその試みを深化させた。ぼくは上記の二作と「フォッグ」を見るたび、これらの映画から放たれる不快感を感じるたび、これは戦争の不快感そのものだ、ということを感じずにはられません。ブギーマンに意味も無く殺された被害者の恐怖は、そのままベトナムやイラクでアメリカに殺された被害者の恐怖と受け取ればいいのではないか。

.....

「晩春」

監督小津安二郎

作品紹介：世界の才人に啓示を与えた小津の初期傑作。

原節子演じる紀子の母親、そして笠智衆演じる男の妻。いつ亡くなったのか、どんな人物だったかという説明が一切ない。これが映画に深みを与えています。母親は紀子の幼少期に亡くなったのだろうか。そう仮定すると紀子は母親の替わりを文句ひとつ言わずにこなしたに違いない。ほんとは子供らしくしていたいという願望も押さえつけてきただろう。しかし、それは人として成長しないことを意味する。人を好きになれない、それに輪をかけるように周囲の無理解に会う。母親の死や家事の大変さをおくびにも出さずにきたから周囲は何も心配していないのだ。そういう風に見ると乗りこの悲しみ、怒りがすごく伝わります。周吉が「結婚することが幸せなんじゃなくて2人で創りあげるものなんだよ」とせつせつと説くところがおもしろい。紀子は「そんなことわかってる。だから結婚したくないんだ」と内心つつこんでいたことでしょう。幼少期のように父親のもとで奴隷みたいに機械みたいに家事がしたい。感情や心を忘れたい。人間の付き合いとは無縁でいたい。ラストで周吉がリンゴを剥く有名なシーン。あれは娘のことを思っているのではない。ここに語られない妻の存在感が絡み、作品に深みが増しています。

.....

「ピクニック a t ハンギングロック」

監督ピーター・ウイアー

作品紹介：ハンギングロックで4人の女性が忽然と消滅する。思春期がこの4人にもたらしたものは等しく悲劇だった。

旺盛な実験精神に感嘆を禁じえない。身体の変化に内面が呼応する時見える風景。その風景をもっと良く見たいと思い、深部へ深部へと進む人々。生い立ちや個々の資質にも左右されるが、それらをひっくりめた当事者ともうその時期を当の昔に通り過ぎた者の内面に向けられたまなざし。とりあえず、メガネかけた不器量な子、美少女、少年、初老の女がサンプルとして選ばれている。サンプルに選ばれた人物は奇遇なことにみな「M」で始まる名で統一されている。そして4人には影法師が存在する。ミランダはセーラ（同室）、マリオンはアーマ（頻繁に手をつなぐ）、マイケルはアルバート（いつも一緒）、マクロウ先生はイーディス（イーディスは最後に先生を見かけている）。特にセーラの描写は興味深い。冒頭、ミランダとセーラの関係性、演出を注視してもらいたい。

アントニオーニの情事のように3人の少女が映画の途中で失踪するが、本編に影響はない。3人の影法師が3人の懸念、苦悩を代弁するのだから。その様相はまさにSPEAK OF MINDである。人物観察が優れていると映画のキャラも分析可能だ。ミランダはその「美」のおかげで、じつは友情や恋さえまならないことを嘆き、マリオンは自身の器量の悪さを憎み、美しいミランダを妬んでいる。マイケルは目の前にある「美」に手を出すことが出来ずに苦悩しているし、マクロウ先生は目の前で美しく輝き、飛び立とうとする可能性で一杯の少女達に恐れをなしている。マクロウ先生は、彼女達に何が起きているか分からないが、彼女は老いても尚、心は少女のままなのだ。彼らがハンギングロックで見たものは、嫉妬や自分に対するネガティブな感情ばかり。

.....

「ひとで」

監督マン・レイ

作品紹介：アブストラクトではなく、劇映画の体裁が採用されている。

マン・レイは、アブストラクトの元祖「エマク・バキア」「理性への回帰」とは異なるアプロー

チを模索している。この作品ではじめてドラマの形式を取り入れているのだ。塚に封じられたひとでが、とあるカップルを見つめる。「彼らは夢の中でしか会えないのか?」「ぼくらは永久に砂漠をさまよひ、永遠に暗闇に閉じ込められたままなのか?」と嘆く。ガラス越しの不明瞭な世界の中で、奔放に生きる女性が印象的だが、ひとでに視点を移すと、女性の方が塚に閉じ込められているように見えて興味深い。

.....

「ひと夜の夫 (ONE NIGHT HUSBAND)」

監督ピンパカ・トウィラ

作品紹介：アントニオーニ、デュラスなどの文法を踏襲したタイ産アート・フィルム。南国の風景にもマッチング良し。

タイ映画「忘れな草」のヒロイン、プッカヴェート・シリヤゴーン、通称ウムさんの准主演作。監督ピンパカ・トウィラは女性で、主演はタイの有名女性歌手ニコル。女性による女性のための映画といえます。大雨で雷鳴も聞こえる嵐の夜。ニコル演じる女性と夫が演じる戯れはさまざまな示唆に富んでいる。結婚記念日の夜にも拘らず、妻を残して夫は失踪してしまうのだ。嵐、部屋の構造、電話が用いられ、2人の間に鎮座する見えない隔たりがスマートに表現されている。ウムさん演じるブッサバが庭弄りをしているとき、水の溜まった瓶に手を入れてかき回すと、水面に映ったブッサバは波紋にかき消され、すぐそばにニコルがいることに気付く。まるで波紋がニコルを読んだようだ。ニコル演じる女が夫の足取りを探る過程で浮上してくるのはじつは今にも壊れそうなブッサバ夫妻の絆だ。ラスト、銃口が向けられた先に注目したい。ひとりの女の傷ついた内面がひとりの男の失踪と、妻による捜索にブ厚く重ねられていた。

.....

「ヒトラー 或いはドイツ映画」

監督ハンス・ユルゲン・ジーバーベルク

作品紹介：「ルートヴィヒ」「カール・マイ」などの長尺作品で知られるジーバーベルク監督の6時間に及ぶ大作。

すべてのシーンはスタジオ内にセットを組んで撮影されているが美術が素晴らしい。前衛オブジェのような置物、巨大な書き割り、スモーク、隠微な照明、人物の書き割りや人形等。小道具や

コスチュームが厳選されていてイメージとして完成され、練られた構図が書き割りの羅列をスペクタクル化し、セットはインスタント美術館の様相を呈している。ヒトラーの告白はおもしろい、ジーバーベルク自身の言葉だと思うけど、この作品の根には、自分を知ることがヒトラーの本質を知ることになるという証明と実験があるのだ。

正しい歴史を認識することで現在の自分を知ること。これは禁忌に対する挑戦でもある。ヒトラーの時代から時を隔ててもいまだにドイツ人の中に彼の影響が残っていることに対する驚き。文学のような人形劇も楽しい。ナチスの亡霊を呼びださんばかりの凄みがある。ジーバーベルクの前では俳優もマネキンも人形も人型の書き割りも同列に扱われ、一種のオブジェとして画面上でとっかえひっかえされている。ジーバーベルクのセットは霊廟のようだ。混在する要素がコラージュを生んだダダイズムを想起させる。

.....

「火の馬」

監督セルゲイ・パラジャーノフ

作品紹介：アルメニアの古典。

幼なじみの彼女の死。しかし、他人にすれば枯葉でも散ったように興味がない。風が吹いたり、雨が降っても意識することがないのと同じ。別にそれは悪いことでもなんでもないが、それゆえの残酷。けれども、男は悲運にも反発せず、ひとり黙って蝕まれるままに任せている。生活する努力は放棄しているし、一見負け犬のようだが、命よりも大切なモノがあることを知っていてそれを守ろうと必死になっている。男は理解されなくても否定されても言い訳はしない。「みんなもいつか自分と同じ眼に会うことがあるかもしれない。その時に俺のことを思い出してくれたいい」ということだろう。パラジャーノフの語り口は地味だが、悲劇の傑作。

.....

「日陽はしづかに発酵し」

監督アレクサンドル・ソクーロフ

作品紹介：他人の夢を生きる青年。異国での日常に、青年の寡黙な心情がブ厚く重ねられている。

中央アジアの異郷の地、そしてそこで暮らす人々の生活、顔、まなざし。これが冒頭、数分間に

渡り、記録されている。むくつけき熱気が辺りを黄色く染める土地。研究のためにトルクメニスタンに滞在しているロシア人の青年はまるで土地の人々の夢の中で生きているようにはかなげだ。それだけ、両者の間には埋めがたい隔たりが横たわっているのだ。その隔たりに熱気が加わることで認識や感覚がとろけていく様子はスリリングだ。

ところで、おのずと島流しを志願する人は何かから逃げようとしていることが多い。しかし、いくら逃げても追いつかれて悪夢は継続するのだ。それは青年の近所に住む数少ないロシア人のおっさんの末路を見ても分かる。アレクサンドロ・ソクーロフのイメージは非常に練られており、みな意味が隠されている。若者と同じ故郷出身の乱暴者の登場、そして乱暴者が制圧されてしまう場面は興味深いし、幼児の登場もおもしろい。青年は、玄関で倒れている幼児を抱き上げて話しかけ、介抱する。人が過去を想い、感傷に浸る姿は悲しい。

.....

「ビヨンド」

監督ルチオ・フルチ

脚本ダルダーノ・サケッティ

作品紹介：不気味な日くつきのホテルを相続した女性が遭遇する不吉な事件と人物たち。

詩情あふれる名作。不条理な展開とか暗いイメージとか、シュルレアリズム絵画の古典のような風格さえ感じる。冒頭の、画家をリンチするシーンが念入りに描かれているためか地獄の存在とかが重く、リアリティを帯びて不気味です。不吉な空気が画面を満たして刺激的。意味不明なエピソードが最高。意味不明だからいい。フルチ自身、自分の仕事ぶりに溜飲下げたんじゃないでしょうか。いつになく、やりきった感がありますから。でもフルチのおっさん、やっぱりゾンビは忘れない。緊張感みなぎるところへゾンビが出てきたら返って和んじやいました。

.....

「昼顔」

監督ルイス・ブニュエル

作品紹介：一級の娯楽作品でありながら人間を深く抉っている。ここにもブニュエル永年のテーマ、人が見たくないものの可視化がある。

人を愛せない人々の職業としてブニュエルは娼婦稼業を肯定している。彼は、彼らの背景を見て

いるのだ。一方で、権威・常識が娼婦を否定するが、それは同時に、彼らの背景、人生、傷ついた過去なども否定していることにつながる。ブニュエルがそんな偽善を見逃すはずが無い。更に、医学も宗教も彼らを救うことは出来ないという批判が加えられている。ラスト、銃声がしてセヴリンが目覚める。ここで、ブニュエルはアントニオーニ仕込みのウソをついている。銃声はなかったのだ。ブニュエルのウソを信じると最後のオチで「えっ??」ということになる。クレマンティ扮するチンピラは、ドヌーヴ扮するセヴリンにとっては希望であり、セヴリンの夫にとっては脅威なのだ。

.....

「ファウスト」

監督ヤン・シュヴァンクマイエル

作品紹介：楽屋で演じられる演劇は、演劇ではないのか。

人生が演じられることがない廃墟で人形に生命を与えるシュバンクマイエル。予め虚構であることを隠さない点が浄瑠璃に通じる。人物も人形も書き割りも小道具も、みな同等に扱われている。シュバンクマイエルの人物や人形は、舞台だけでなく、楽屋や客席、公道でも演じる。彼は現実の構築を試みているのだ。公道で俳優に演出を加え、人形を動かすシュバンクマイエル。彼にとっては全てが虚構だが、公道の道行く人々にとっては、それはまぎれもない現実なのだ。彼らは悪魔を目撃しているのだ。そして、舞台の上で鳴らしたトタンの雷が森の中で轟く。これこそ、シュルレアリズムの醍醐味である。無愛想な人形、単調な間と展開、すべてが魔術的である。

.....

「ファンタズム」

監督ドン・コスカレリ

作品紹介：思春期の少年が見た、不気味でカッコいい悪夢。

思春期にこだわるコスカレリ。やはりおもしろいものの宝庫なのでしょう。デビュー作「ケニーと仲間たち」も思春期の少年たちの日常がテーマで、この時はストーリー性重視の構えで攻めていたのだが「ファンタズム」は正反対で思いっきりシュールです。悪夢のお伽噺。邪悪の念に満ちた町の静寂といい、怪人トールマンといい気持ち悪さは天下一品。

「ケニー」でも「ファンタズム」でも、自分が思春期の真っ只中に感じた何かをコスカレリは再

現しようと試みている。彼が最終的にシュルレアリスムの手法に落ち着いたのは「ケニー」の時にストーリーテリングに限界を感じたからだろう。意気も絶え絶えになっているシュルレアリスムは今ではB旧映画の中で生き残っている。

.....

「フェリーニのローマ」

監督フェデリコ・フェリーニ

作品紹介：真のローマの姿を捜し求めていた撮影隊は、拳句に自分自身の内面に迷い込んでしまう。

スタジオでは演出あり、ロケでは演出なしだが、フェリーニが思うローマと、実際のローマを交互に見ることでフェリーニが知っているローマ（思い出・記憶）と実際のローマとはどこが異なるか、その違いを知ろうという試みがされている。一方では、思い出は好きな記憶みたいなものだし、演出なしのロケも実際は見たいものを撮っているに過ぎない。つまり、このままの方法ではローマの全てを知ることは無い、という結論を得る。それを機に、ボードビルや売春宿など、演出されたエピソードに虚構と現実の境目の模索が盛り込まれる。ボードビルでのエピソードは爆笑です。つまらない芸人を見て無頼な客が激怒するが、一方で客席では舞台上に勝る、知られざる爆笑が起きていることを描写する。ここには、芸術・娯楽の熱意の欠如というフェリーニの批判があるし、娯楽の大衆回帰、しがたい大衆の人生に対するフェリーニの同情と賛美がある。フレスコ画発見のエピソードもおもしろい。じつは、最初からフレスコ画はなかったのではないかとすれば、彼らは何を見たのか？？彼らは、ローマの地下にトンネルを掘りながら自分の心の奥に迷い込んでいたのか？最終的に、ロケハンは見たいローマではなく、見たくないローマを探す。それは、必然的に誰も知らないローマを撮影するということになるが、ここで初めて真のローマを撮ることが可能になる。演出と思われるバイク族の暴走。これがフェリーニが捜し求めていた当時のローマの姿なのかもしれない。つまり、キリスト教、アメリカ資本主義によって抑圧されているローマ市民の本音と解放が重ね合わせられているのだ。

.....

「豚小屋」

監督ピエル・パオロ・パゾリーニ

作品紹介：硬骨漢、ピエル・パオロ・パゾリーニの世界に対する挑戦状。

飢えた魂は、大脳の表面のような荒野で戦いを挑む。脂ぎった皮膚の下で残忍な衝動が顔を得、乾いた精神の癒しを血と肉に求める。主人公の富豪の息子、ジュリアンは強硬症になる。彼は自分の内なる世界に乗っ取られたワケだ。自分の内で発生し、膨張して外の世界に溢れ出た悪夢に飲み込まれるのだ。彼は富豪の息子であり、金は湯水のように仕える身分なのに欲しいモノは買えない。世界の操作が可能な立場に一番近いところにながら彼は無力感に苛まれる。彼の無力の源は何だ？ 夢の中で盗賊が人間の肉を食べていたが、ジュリアンはそれに影響される。そして大富豪の息子である彼は同胞に食われることを願う。ブタが金持ちを喰らうのだ。コレこそカニバリズムだ。

.....

「ブラックムーン」

監督ルイ・マル

作品紹介：セリフを廃し、難解な私的イメージを並べたアヴァンギャルド映画。

月がない世界。その世界がどこにあるのか誰にでも分かれようというものだ。ルイマルはアントニオニーのように自然現象や事象に人物の内面を反映させることはせず、無意識的なイメージの羅列を試みている。この作品が持つタッチは夢の感触に近いわけだ。ふしぎの国のアリスのキャラのように意味不明のことをしゃべる赤いベベを着たおばあさんが印象的。女性の乳房にしゃぶりつくおばあさんの授乳シーンは奇怪だ。小さな虫のも良く出てくる。小さな虫たちに、異常な世界に置き去りにされた少女が投影されている。人は心で出来ている。彼女が、自分の内面にすり替えられた世界をさすらい様子は彼女という世界を這う虫たちに似ているのだ。

.....

「ブラッドハウス」

監督ピーター・レイダー

作品紹介：思春期の少年が見た、不気味でカッコいい悪夢。

この映画が全く知られていないのは残念だ。リンチやケン・ラッセル、ポランスキーを凌ぐほどのカッコよさに満ちているのに。監督のレイダーは主人公の少年が今正に足を踏み入れようとしている。その変化の著しい多感な時期に於ける彼等の悪夢を描いている。少年を取り巻く悪夢的

イメージ、多少飛躍気味の展開、そして全編を貫く邪悪な雰囲気。レイダーは大した詩人だ。無名のままなのが解せない。父親の死が、思春期真っ只中の少年の抱える羨望や怖れとリンクして彼の心中に大きな罪悪感を生み、その罪悪感は彼に女の姿の断罪人を幻視させた。その後は当然女の断罪が始まる訳だが、これがえらくカッコイイ。あまりに異常で、非現実的で。これぞ悪夢。

.....

「BRIGS」

監督ジョナス・メカス

作品紹介：軍の規律を乱した兵士を収容・訓練して鍛えなおす兵隊監房の日常をプロの俳優たちを使って再現しようという試み。

日本の米軍キャンプの監房内にて役者たちを宿泊させて懲罰訓練を連日行わせている。芝居とはいえ、あまりに厳しい訓練のために脱落者も出、教官役の俳優、兵士役の俳優たちもいつしか自分が役者なのかそれとも囚人なのか区別が付かなくなり始める。現実に対する認識が不可能になっていく様子がつぶさに記録されている。教官たちのあまりの迫力にドキュメンタリーにしか見え、演技とマジの領域を超えて迫力満点。現実とは？虚構とは？その境とは？これがこの作品のコンセプトだろう。

.....

「BLUE」

監督デレク・ジャーマン

作品紹介：全編ブルーバックによる異色の作品。バックでは詩が朗読されている。

間違いなく世界で二番目にヘンな映画だろう。決してソフトやハードの不具合ではない。通常の映画として成立していないが、それはジャーマンが通常の形式を必要としなかった、映画というメディアでは語りきれない何かを表現したかったからなのだ。この時点での、デレク・ジャーマンの創作欲求はあらゆる既存のメディアを超えていたということだろう。見なくてもいい、という奇妙な映画だが、詩は詠われているし音楽も後で鳴っている。この「BLUE」の創作意図、欲求はどこから来たのだろうか？それは死だ。

彼はAIDSを患っていた。ジャーマンは死を目前にしていたのだ。劇中、DHPGという薬の

強い副作用が語られるが、目が見えなくなるなどの副作用を特に懸念していた。つまり「BLUE」は、自分や、仲間の目がDHPGの副作用で見えなくなったとしても見れる映画なのだ。DHPGを処方されている仲間に向けた痛切な想いが伝わる。仲間に対するレクイエムだ。「慈善は、施す者には見栄であり、施される者には災厄だ。CHARITY IS BIG BUSINESS。ぼくらはあきらめのまま受け入れ、慈善家はぼくらを2度食べ物にする」...と、彼はホンモノの芸術家らしく、キリスト教を批判することを忘れなかった。

.....

「ブルーベルベット」

監督デビッド・リンチ

作品紹介：ポーの「アッシャー家の惨劇」に啓示を受けたリンチが挑戦したシュルレアリズムの極み。

吸入器を使うホッパー。倒れて入院している老人に似ている。つまり、冗談でも適当でもなく、吸入器は意図された小道具だ。老人は脳梗塞で倒れたわけじゃない。老人は、聞く耳を持たなかった。過去を省みることが無かった。そして、その機会が訪れた。体内のように全く光が差さない世界にうごめく影のような人物たち。彼らは誰なのか？80年代後半に生きるアメリカの老人の青年期の懐メロ「ブルーベルベット」が聞こえてきた... 暗闇での一連の出来事は、丸で老人の体内でのさまざまな記憶の再現だ。ジェフリー、フランク、倒れた老人。時間軸の喪失が老人の過去の記憶、現在の記憶、平穏な日常の影に隠された異常な欲望を混在させた。罪悪感が引き金となり、朽ちていこうとする老人の体内で、凍てついたまま皮膚の下に眠っていた反乱の衝動がパラドックスを生んだ。青年期の自分が現在の自分（老人）の隠された欲望を目撃する。このシュルレアリズムならではのスリル。

ジェフリーは、将来の自分がこんな異常な願望を持つことが信じられない。フランクは、自分がこんな異常な願望を隠している自分が許せない。老人は妻や家族を愛しているながら、一方では異常性欲に心を馳せる。これが倒れた原因だ。アメリカの一般家庭のカリカチュア。だが、リンチが普通な見方でアメリカを見ることは無い。ジェフリーを見たフランクの一言「俺に似ている」。このセリフは、リンチから観客への大サービスだ。

.....

「フルメタルジャケット」

監督スタンリー・キューブリック

作品介绍：アメリカ人の敵はどこにいるのか、誰なのか。全てをはっきりさせた問題作。

「ベトナムに俺たちの敵はいたのか？」。キューブリックは、このひと言を言いたいがためにこの映画を製作したのだろう。あの最後の数十分のシーンを撮るためだけに。そして、真の敵はどこにいるのか？その答えは早々に冒頭に描かれていた。

.....

「プレイタイム」

監督ジャック・タチ

作品介绍：都会に出てきたユロ氏は、文明の産物が、じつは人々を隔てていることに気付く。

器官無き身体を構成する人々には、顔と名前が無い。つまり、過去と日常が放棄されている。代わりに、彼らには客、ツーリスト、通行人、運転手、接待係などの役割が与えられている。大勢の人々が通りや建物の中にひしめきあっている。だが、そこには役割と職務があるだけで、誰ひとりお互いの名前を尋ねることもない。その異様なさまを淡々と眺めているユロ氏。そう。唯一、顔と名前を持つユロ氏が、第三者として器官無き身体の体内をさすらう。その姿は、生物の生態を観察する学者のようである。

また、大きな窓が多用されていることに気付く。非常にスタイリッシュ、かつお洒落であるが、それは一面的な認識に過ぎない。タチは、文明社会に於ける窓の用途について考察する。窓とは、内部から外部を見るための装置なのか？或いは、外部から内部を見るための装置なのか？どちらにしても、目撃者が見ている風景が彼らの舞台となるのだ。

.....

「BREATHDEATH」

監督スタン・ヴァン・ダー・ビーク

作品介绍：テリー・ギリアムに啓示を与えたコラージュ・アニメの先駆。

既存の映像、自作の映像・画像を反転処理したりセレブのポートレートに落書きしたり新聞記事の人物を切り抜いてフィルムに貼ったりつなげたりして自分が日々の生活で感じた何かをヴァンダービークは再現しようと試みている。当時のアメリカ作家の特徴であり、意識下に働きかけ

る力としてアトムエイジの影響がヴァンダービークの作品にも顕著に見られる。それ以上に、ヴァンダービークの作品に於いて特筆すべきポイントはユーモアだろう。いたずらっ子のスクラップ帳を見ている楽しさがある。それは、彼がボブ・ゴッドフリー、ワレリアン・ボロフツィからのアニメ作家と共に、かの、テリー・ギリアムのアニメ作品に影響を与えていることでも分かる。

.....

「PRESENTS」

監督マイケル・スノウ

作品紹介：日常に異なる視点を強制的に導入した実験映画。

カメラを固定し、逆にセットを動かすことで日常を解体する試み。このマイケル・スノウの実験はまさにコロンブスの卵。半円状の円を描きながら稼動する舞台の上に日常的なセットを組み、プレイメイトのような女性の生活空間を再現。そこに男性が訪れる。彼らが部屋を移動するたびに舞台が動き、その揺れのせいで俳優はよろめき、本屋置物が倒れる。俳優の演技ではなく、セットと仕掛けを用いて人々の不安定な生活を表現したいのだろうか。

男女は何かを探しはじめが、彼らが見物するたびに舞台は動く。しかし、2人はお互い別々の部屋で探し物をするため、お互いの様子をカメラで抜く時、カメラを動かせば簡単だが、カメラは固定されているのでそのたびに舞台が動き、2人はいつまでもよろめき、家具は揺れ、レコード針は飛び続ける。その繰り返しがしばらく続いたあと、探し物が見つかり、厚いガラスを装着したカメラがセットに侵入してくる。

まざなしは家具にぶつかり、俳優にぶつかり、壁を破壊、テレビセットを破壊する。そして、壁が倒れ、世界のイメージの断片が次々に現れては消えるシークエンスが始まる。部屋にいたままでは見ることが出来ない壁の背後のドラマの断片。その数々。飛ぶ鳥、屠殺、遺跡、手術のイメージは何度も登場し、一貫したテーマを見出すことが出来る。外から見ただけでは部屋の中の出来事は分からないが、それは心と同じなわけでアート系作家はよく部屋を心のメタファーとして使う。それが「ここでは逆説的に使用されている。肉と同じ本質を持つ壁が崩壊することで、心が、魂が自由になるのだ。

.....

「ペアレンツ」

監督ボブ・バラバン

作品紹介：アメリカ人の敵はどこにいるのか。灯台下暗しの視点で巨悪を暴く小品。

監督バラバンはカニバリズムをテーマにしているわけではない。彼は平和を愛する正義の味方アメリカ人の正体を悪意と嘲笑をもって暴いている。アメリカ人が語り草にし、投じ日本も含めて世界中が手本とした黄金の50年代アメリカとその安易な賛美に対する批判だ。ベトナム戦争時代、愛と平和を訴えていたアメリカ人もそのじつ、納税を介してみな虐殺に投資していた。主人公の少年マイケルはそんな両親に人肉を貪る怪物の姿を見ていたに違いない。

自由だ何だと浮かれるアメリカ国民に実は決定権も選択肢もないんだということをバラバンは暴いてみせる。才気あふれるイメージもさることながら、役者たちの力がなければこれほど完成度の高い作品をものにするにはできなかつただろう。

.....

「Heaven & Earth Magic」

監督ハリー・スミス

作品紹介：テリー・ギリカムに影響を与えたコラージュ・アニメの傑作。

この作品はアニメの本質が躍動している。日本のアニメとは対極にあり、実写では実現不可能の世界なのだ。動かないモノを動かすこと。存在しない生物を作り出すこと。死者を蘇らすこと。スミスはそこに喜びを感じています。そこにはグロテスクとエロスが混在している。語られないドラマがアル。メタモルフォゼが基調のアバンギャルドなアニメが展開されている。くわえてユーモラス。豊かな想像力と自由なイメージに魅了されます。一滴の雫がモノを生み出したり、切抜きの人物がトンカチでモノを壊すといろんなモノ、ガラクタで出来たような生物などが誕生する。創造とは破壊することだという思想が見える。

.....

「ペーパーハウス/霊少女」

監督バーナード・ローズ

作品紹介：ブリティッシュ・ホラー「キャンディマン」で知られるローズの初期傑作。

これから思春期を迎える少女の内的変化を描いたシュルレアリアルな小品。少女の無意識下の世界に

充満するグロテスクな静寂に魅了される。小道具や美術も悪夢的な要素を活かすことに貢献している。ラストがまた意表ついてて鮮やか。これぞシュルレアリズムの醍醐味というもの。主演の少女シャーロットバークも貢献大。うまい。イギリスには一流の役者しかいないけど子役もさすがなのです。監督バーナードローズもなかなかの詩人です。子供たちに贈る人生賛歌。アニキから小さいヤツラへのエールみたいな、ラストは優しいまなざしに満ちている。

.....

「ベビイドール」

監督エリア・カザン

脚本テネシー・ウィリアムス

作品紹介：「エデンの東」を撮ったカザンと「ジャイアンツ」でジェイムズ・ディーンと共演したキャロル・ベイカー、ディーンつながりの賜物か。

アーチャー・リーという亡霊に執りつかれ、幼児期というクサリに縛りつけられたベビイドールは自由に振舞えない。死んだ父親の影響から逃れられない女性の葛藤が屋敷に反映されており、そこらじゅう穴だらけで、屋根は修復中。家具も全て持ち去られて家の中は空っぽになってしまう。これだけで彼女と屋敷は一体だということがわかる。

アーチャーリーはシシリア人シウヴァの会社を放火するがその火はベビードールの体内に燃え盛る炎であり、シウヴァの出現は自由を夢見るベビイドールの内面に呼応したフィードバックである。挑戦的なシウヴァはベビイドールを閉じ込めておきたいアーチャーリーにとっては脅威だが、解放を願うベビイドールにとっては希望なのだ。まさに欧州っぽい内容だが、欧州の香りが濃厚なのはたぶん、テネシー・ウィリアムスの趣向によるところが大きい。

.....

「ベルニー」

監督アルベール・デュポンテル

作品紹介：破壊的なペースと禁忌を笑いに変える手腕で映画マニアを翻弄した。

モンティ・パイソンも吹っ飛ぶ極悪コメディ。はぐれものの大逆襲。たしかに暴力的だが、それでいて外道としてしか生きられない男の悲哀もにじませる詩情あふれる作品である。彼の苦闘するサマを見るにつけ、爆笑もするがその反面悲しくもある（ベルニーの父親...）。フランス版D

V Dには特典としてメイキングが収録されており、劇中理不尽に暴れまくるデュポンテル氏は現場では以外にもジェントルマンでありました。

.....

「helpless」

監督青山真二

作品紹介：

浅野忠信演じる白石親子以外はみな、彼の内部で生まれた血肉をわけた存在だといえる。彼は暑い夏の日にツーリングしていたら、彼に巢食う懸念と熱のせいでいつのまにか自分の内面に迷い込んでしまうのだ。白石が団地の部屋にいるショットがあるが、鉄柵のせいで檻に閉じ込められているように見える。これは、アントニオーニが「さすらいの2人」で使用していましたが、効果靨面。この地味なワンショットが、彼の置かれている状況を全て説明している。親子の断絶が彼を傷つけた。

彼の内には強い怒り、憎悪が蠢いているが、一方では優しさ、希望を忘れていない。白石の破壊衝動の激しさは安男を彷彿とさせ、憎しみの影で消えそうな優しさはユリのように儚げだ。彼の中で忘れられた希望は弱弱しく、たよりないし、すぐに逃げてしまう。サテンの一件はまるで、白石の過去、家族関係が再現されているようです。青山真治は先達の手法を適確に学んでいるおかげでうまい。荒削りだが、のちの「ユリイカ」の前身と呼べる出来。ラストの何でもなしショットも見逃してしまいそうなほど地味だがあれのおかげでピシッと引き締まっている。

.....

「ベルリン・アレキサンダー広場」

監督ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー

作品紹介：ファスビンダーの夢だった原作小説のドラマ化。

ファスビンダーは主人公ビーバーコフに自分を見ているが、人でなしのように振舞って批判されても、それでも「オレはみなと同じ夢を見ていただけさ」と言いたいのだ。不遇なビーバーコフだが、女には不自由せず、服役している間も家賃を払ってくれていたエヴァや親友のメックなど、友人に恵まれている。しかし、そこにサディスティックなラインホルトが登場するといやがおうにも不吉な前兆があたまをもたげ痛々しいことこの上ない。

ファスビンダーはこの泥臭いドラマの中にハンナシグラを登場させてファンタジーの票祖を盛り込む。シグラ扮するエヴァは本名ソニアだが同じ本名を持つミーツェの登場が興味深い。ビーバーコフにとって彼女は夢であり、希望であり、思い出なのだ。2人の戯れは、エヴァとの思い出の再現の要素があって非常にノスタルジック。しかし、夢はいつか醒める。ミーツェはビーバーコフの夢、希望のように儂い。

.....

「ペン&テラーの死ぬのはボくらだ!？」

監督アーサー・ペン

作品紹介：アメリカン・ニューシネマの先駆だったペンと、ペン&テラーの組み合わせは危険だ。

手品のタネを明かす芸風のコメディアン、ペン&テラーが脚本を担当。監督はアメリカン・ニューシネマの巨匠「俺たちに明日はない」のアーサー・ペン。人を喰ったギャグが冴える、見る人を選ぶ傑作コメディであります。ナンセンスな笑いが身の上なので嫌いな人は受け付けませんが、寡黙なテラーのいたずらにキレ続けるペンのキャラは万人ウケしてもいい。モノがたちの基本には、自分達のタネ明かしの芸風を発展させて、だが手品だけでなく、世の中、人生、さまざまな不運、そして人間とは？死とは？というタネ明かしにも挑戦している。2人の命がけのいたずらを通して、最終的には何が虚構か？何が現実か？という哲学的な問いに到達してしまうのだ。

.....

「ベンヤメンタ学院」

監督ブラザー・クエイ

作品紹介：人々が織り成す日常に秘められた異常が、前面に出ている。

モノクロの端正な映像に息づくシュールな笑い。繊細な画面にみなぎるクエイ・ブラザーズの強い悪意。ことさらに笑いを追及しなくとも、人間の本质に迫れば笑いは必然的に発生するという好例。挑戦的でいて悲哀を帯びた笑い。太陽のない世界は体内のどこかに秘められた世界のようなのだが、主人公ヤコブは立派な召使になるために異常な学院生が待つベンヤメンタ学院の門を叩く。意味がなくても文句のひとつも言わずにもくもくと授業をこなす不気味な学院生たちに現代人の日常を見てしまう。クエイ・ブラザーズはものすごく丁寧に人をバカにしています。学院生た

ちの異様な体操シーンなんか特に。

.....

「僕の戦争」

監督リチャード・レスター

作品紹介：「ビートルズがやってきたヤアヤアヤア」「ヘルプ!」「ナック」を監督したレスターが、レノンとクロフォードをくっつけた。

一見してもすぐには伝わってこないディープなナンセンスコメディ。はじめは邦題にも打ってあるようにジョンレノンが目当てだったが、あまりに他の共演者が強烈なのですぐに彼らに目が移っていった。ロイ・キニア、マイケル・ホーダーン、リー・モンタギュー、ジャック・マッゴラン、ジャック・ヘドリー、ロナルド・レイシー他。

とにかく、イギリスには良い役者が多いことをこの映画で学んだ次第。特に多数いるレスター映画の常連の中dメオマヌケをやらせたらピカーのマイケル・クロフォード。彼は「ナック」でも主演を演じたが、ここでも鋭いマヌケを演じて光っています。ジョン・レノンはといえば、ドイツで牛乳を盗んで「エヘヘエ」なんてはしゃぐ。このシーンを見るためだけでも是非レンタルしてください。

.....

「マジック・クリスチャン」

監督ジョセフ・マッ格拉斯

脚本テリー・サザーン

作品紹介：難解な異常コメディ。音楽はバッドフィンガーが手がけている。

これは名優ピーター・セラーズの傑作であり、コメディ専門監督ジョセフ・マッ格拉斯の傑作であり、伝説の脚本家テリー・サザーンの傑作であり、英国ナンセンスの至宝である。列車車内のギャグの数々はルイスキャロル以来の英国ナンセンスの王道を行っています。強烈に無意味です。

アジア人が大きくなっていくギャグ、ホットドッグを買う時にセラーズが訛るギャグもワケが分からない。しかしセラーズほどの達人が演じると生きるんですね。これが。ナンセンスギャグも良く練られていると詩情が漂うのです。モンティ・パイソン結成以前のジョン・クリーズ、グレアム・チャップマンがセラーズと顔合わせしていますが英国ナンセンスのマニアとしてはたまらない。

.....

「魔女の宅急便」

監督宮崎駿

作品紹介：宮崎アニメの最高峰。

不運の中に希望を見る目、アクシデントを出会いに変える宮崎駿のモノの見方に感服。みんないい人達ばかりでほんと理想の世界なんだけど理想の創造は時に危険なこともある。でも、賢明な宮崎はこの一見ハームレスな世界に試練、苦境を盛り込むのを忘れない。友達はいつまでも友達じゃないし、優しい人もいつも優しいわけじゃない。でも、辛い時もいつも辛いわけじゃない。そういう多面的なモノの見方がキキを助けたたり試練を与える風の描写に活かされていて詩的だ。

幼い時、風を感じる時はいつも幸せな時だけだったが、風は苦難を与えることもあるということを知っている。まるでヨーロッパ映画を見ているような気になるシーンは多いが、その小気味の良さと深味は単なるアニメとは呼べない。例えば、キキが老婆の家で使われていない旧式のオーブンを使うシーンはいろいろな示唆に富む。忘れられたオーブンに火を入れるキキ、のシーンに

はおばあさんの胸の内に灯る希望が重ね合わせられている。

劇中、画家志望のウルスラが登場するけど、魔法を使えなくなって空を飛べないキキの気分は宮崎もスタッフも経験したことがあるのだ。キキが落ち込むあの一連のシークエンスは容赦がなくて痛々しくて心を抉りとられるようだが、絵描きにとっては画が描けない時はキキと同じように空を飛べない気分なのだ。そんな時に慰めになる人ってのは同じ境遇を味わったヒトなんですよ。ということでウルスラの登場は頼もしい。

トンボとのシーンも名場面が多い。最初は嫌ってたけど次第に心を開いていくキキの様子は少々の懐かしさを帯びている。手作りで人力飛行機を作るトンボは空を飛ぶ夢を見ているが、キキは最初から空を飛べる。トンボにとってキキは憧れの存在だが、キキにとっては日常的なことで飛ぶことに何も感じない。キキは空を飛ぶコトに対してありがたみを感じない。ここに、持っているものに感謝もせず無いものねだりする現代人に対する批判を見てしまう。大きな飛行船の存在も示唆に富んでいるけど、あれは街の人々の夢そのものなのだ。その飛行船がトラブルに陥った時にキキは自分の力を自覚する。何度見ても心洗われるようです。

.....

「魔島」

監督 J・S・カルドン

作品紹介：地味で目立たないアメリカン・ホラー。監督のアントニオーニ趣味が前面に出ている。

アントニオーニの秘密を知った J・S・カルドンは「情事」を換骨奪胎し、ホラー映画として仕立てた。ということで、自然現象やセリフ、風景、できごとにヒロインの内面がつぶさに反映されていて深味がある。冒頭の悪夢センスは抜群です。精神的に不安定な妹を思いやる兄がお互いの妻、ダンナを伴って無人島にバカンスに出かける。「この時期の嵐はタチが悪い。だから女の名前を付ける」ホラー、スプラッタの要素を取り込みつつ、アントニオーニの骨子を継承している。が、それだけに地味な仕上がりのわけだが、逆に作家としてのプライドを感じる。雷鳴が轟き、雨風が壁を叩きつける嵐の夜の家屋の内部は真っ暗で、アントニオーニ流に見れば、体内にみなぎる怒り、不安、嘆きだ。影の使い方が印象的。廃墟の劇場もかっこいい。ボロボロの舞台は、そのまんま破綻した人生を表現している。

.....

「幻の湖」

監督橋本忍

作品紹介：「羅生門」など、黒澤明と共に黒澤映画の脚本を手がけた橋本忍の第二弾監督作品。

つげ義春の「沼」もそうですが、水は鏡です。だが、惜しいことに橋本自身が劇中、ネタバレさせている。あの部分は正直要らない。会社側の意向でしょうか。あの「羅生門」で脚本家デビューした橋本忍をぼくはそれだけで敬愛しているのだが、この監督作品ではもっと会社側と戦って欲しかった。だいたい、一流の橋本が何の意味もなく道楽で作品を作ったりしないわけです。湖周辺で起きる事件の数々。必死に、ひたむきに、けなげに夢を追いながら果たせずに埋もれていく大人志向なのに夢見がちな女性の内面、悲しさ、美しさの描写されている。

.....

「ママと娼婦」

監督ジャン・ユスターシュ

作品紹介：

パリという文明社会の牙城でアンチテーゼを演じること。しかして、憎悪の対象である文明に依存して生きることしかできないという悲哀。

.....

「マリア・マリブランの死」

監督ヴェルナー・シュレーター

作品紹介：亡霊の、亡霊による亡霊のための映画。

現実を見ることの出来ない目は血を流す。内面に向けられた過去への郷愁。オペラが流れる中、過去に統帥する厚化粧の人々。彼らは同性愛者のように見えるが、鏡を見ているだけかもしれない。鏡には何が映るのか？室内に集う亡霊たちと対照的に野外に放たれた亡霊たち。亡霊は思い出を再現する生きもの。彼らは悲しみの歌を歌う。亡霊の悲しみ。それは、肉の監獄に閉じ込められていた日々の回顧か。それとも、肉の檻から解放された後も尚、悲しいのか。愛に夢破れた女性たちの亡霊がマリア・マリブランのために歌う。これは性の滅ぶ姿か？

.....

「マルチプル・マニアックス」

監督ジョン・ウォーターズ

作品紹介：ヘンタイの、ヘンタイによるヘンタイのための映画。

バカな人たちのバカげた話。バカげた事件にバカな展開。バカだらけなのだが、ディバインの存在感が全てを許容している。ディバインがいなかったらぐだぐだのバカ映画だったはずである。ディバインの存在感はすごい。こんなバカげたお話でも何か意味が、意図があるのではないかとと思わせるのだ。

.....

「マルホランド・ドライブ」

監督デビッド・リンチ

作品紹介：夢を果たすことがなく、若くして散った女優の卵のための墓標。

人が破滅する時、その砕け散ったものを宝石でも愛できるようにいとおしむ人のことを詩人と呼ぶ。リンチも三文記事にしかないような女の運命を取り上げている。志半ばでついでた映画に出てこない女の存在を強く感じる。ハリウッドの華やかさに憧れてやってくる女性はごまんといえるんだろうけどそういう女性たちに向けたレクイエムの趣き。深夜の舞台で歌う女性歌手の歌が悲しい。人は誰でも何かを隠しているが、それが無意識的抑圧の場合、当人さえ何を隠しているのか分からない。しかし、絶えず何かに脅かされているのはわかるはず。しかし、それに顔をつきあわせる日はいずれやってくる。リンチはその恐怖と悲しみを青い箱と青い鍵の出会いで表現している。

.....

「磨子」

監督押井守

作品紹介：押井の独特の趣味、独特の話法をフィーチャーした人を食った映画。

相変わらず人を喰った雰囲気、悲哀に裏打ちされたヤケクソ気味の笑いが良い。それがわからない人にとっては耐えられない世界かもしれません。これはある意味、あらゆる立場、世代の人々が内面に奥深く秘めているものをブチまけた、現代日本のパロディということが出来ます。普通なら膨大な情報量になるかと思うけどそれを端的にまとめる手腕が素晴らしい。詩人だけに可能な方法。

.....

「ミート・ザ・フィーブルズ/怒りのヒポポタマス」

監督ピーター・ジャクソン

作品紹介：きぐるみ、人形による芸能界の裏側を暴いた怪作。

初期の神をも恐れぬ作風でおなじみのジャクソンによる涙涙のギャグ映画。全編キグルミや人形だからもうやることムチャクチャ。芸能界の裏の汚れた世界を風刺と言うか暴露と言うか、えじきになる俳優志望の動物たちの末路が凄まじい。ヤク中のトカゲが禁断症状に苦しむ様子はいくらえきれずに涙が出ました。笑い涙だが。主人公のカバはもうメチャクチャ。カバをさかさまにしたらバカになることを知ってかしらるか。続編作ってくれ。

.....

「水の中のナイフ」

監督ロマン・ポランスキー

作品紹介：「情事」「黒い罌」など、「羅生門」に触発された「新しい映画」のひとつ。

夫婦はお互いに窮屈を感じている。そのために湖へバカンスに訪れるのだが、通じ合うことがないという事実を隠そうとする夫に対し、妻、クリスティーナはそれを隠そうという気がない。これが、すべてのスリルとサスペンスの序章となっている。冒頭で、座席を代わる夫妻に注目。妻は自分の思い通りにしたいが、夫はそれを見て危機感を感じ、運転を替わるように強くうながす。思いどおりにさせたらどこへ行くかわかったもんじゃないぜ、という夫の懸念が痛々しい。夫は妻を自分の思いどおりに操作したいが、そこへ夫の思惑を邪魔をするかのように青年が登場する。名も無い青年は、クリスティーナに宿る無秩序が血と肉を得たように反抗的だ。離れかけている夫妻の思惑を、景色やできごとに重ねあわせるロマン・ポランスキーの柔と剛の妙で迫る

演出に酔ってください。水は人を映す鏡だが、クリスティーナは見極めたかったのだろう。夫妻は、挑戦的な青年を見て、そこに自分の内に隠されたモノを暴かれた気になってしまうのだ。夫は、年を取ることで、衰え、若さへの郷愁を見、一方、クリスティーナは素直に若さに対する憧れと羨望を見るのだ。ナイフは夫にとっては脅威であり、クリスティーナにとっては希望なのだ。

.....

「ミツバチのささやき」

監督ビクトル・エリセ

作品紹介：「情事」で採用された話法が踏襲されているが、それに気付かないほど自然。

少女は、身体的な成長と共に幼年期を忘れていく。しかし、精神的な面に於いては、この幼年期はなかなか去ることが無い。この作品は、エリセの「成長とは何か」「思春期の訪れは人々の内面に何をもたらすのか」という、精神的な面にスポットを当てた研究であり、集大成といえる。イザベルは「フランケンシュタイン」の映画を見た。それは、彼女の家庭の深部に隠された「真実の目撃」でもあったし、幼年期の死というイザベルにとっての「真実の目撃」でもあった。それまで、幼年期は常にイザベルに寄り添っていたが、やがて両者の間に距離が生じることになる。その、少々の懐かしさを帯びた心細さに、観客は心を奪われるのだろう。魂を失った頭のような廃墟に転がり込む逃亡兵のシーンは興味深い。息も絶え絶えの逃亡兵には、少女の、家族に対する不信感が厚く重ねられている。つまり、少女は逃亡兵をどうしても助けたかった。当時、アナ役のアナ・トレントが非常に人気があったが、人々は幼年期を忘れられないのだろう。幼年期が勝った瞬間、イザベルは消えてしまった。

.....

「皆殺しの天使」

監督ルイス・ブニュエル

作品紹介：「情事」「黒い罌」「水の中のナイフ」など、「羅生門」に触発された「新しい映画」のひとつ。

大きな屋敷で晩餐会が催されるが、召使たちは何かの予兆を察知し、主人に隠れてこそこそと館から逃げ出してしまう。20人の客人は館に入るが、彼らはまるで自分の意志でやってきたわけ

ではなく、館に飲み込まれているように見える。冒頭のアレは失敗ではない。ブニュエルはきちんと意図しているのだ。アレは2ヶ所あるがまさにキーポイントなので、くれぐれも見逃さないように。アレは、夢が皮膚、血管、肉体を得る瞬間なのだ！

警官やヤジウマは館の中で何が起きているのかを知ることが出来ないが、当然だ。誰も、心の中で起きていることを知ることは出来ない... 人は様々な秘められた顔を持つが、精神的に混乱している時は尚更だ。大勢の人々はたったひとりの人物の内面を象徴しているし、乱痴気騒ぎはたったひとりの人物の苦悩、怒りに侵食されていく内面を象徴するのだ。来賓たちは後悔、罪悪感、悲しみ、怒り、嘆きを司る感情という器官なのだ。劇中、統率をつかさどる器官は活動を停止、熱情をつかさどる器官は息絶えようとしている。

見えない反乱、見えない革命。血肉に宿る無秩序が見せる悪い夢。彼らが口にする言葉に耳を傾けてみよう。彼らの行動に着目してみよう。これはルイス・ブニュエルという詩人の、いかにもシュルレアリストらしい内面の構築という実験なのだ。何と奇妙な作品だろう。人の心って何て奇妙なんだろう。

.....

「未来世紀ブラジル」

監督テリー・ギリアム

作品紹介：モンティ・パイソンで育まれたギリアムの皮肉な世界観が炸裂した快作。

ジョナサン・プライス演じる主人公サムは情報省で働くエリート。人はみな日常、過去を放棄して労働者と言う役割を演じているが、情報相職員の魂を捨てた、姿、輪郭、容貌だけの屍のような様子はおかしさと悲哀を帯びている。イアン・ホルム演じるサムの上司も肩書きだけで仕事は部下のサムにまかせっきり。依存しているだけで機能していない。そんな、人間性を必要としない無機的なシステムに反逆する人物が英雄ではなく、生活に密着した修理屋と言うのがおもしろい。この戦う修理屋タトルをデ・ニーロがユーモラスに演じている。機械の不具合を修正するにも戦わなくてはならないと、言う不条理な世界。個人の感受性が反映された思考、主張、行動が否定され、政府が用意した役割、手続きが優先される異常な世界が堪能できる。

.....

「ミンボーの女」

監督伊丹十三

作品紹介：ペンは剣よりも強し、ではなく、フィルムは剣よりも強し。

伊丹の仕事ぶりはハラハラするほど正直。それだけ身を削っているわけです。これだけ心から信用できる作品を作るには同時に敵もたくさん作ったはずだ。伊丹が残した仕事を見るにつけ、戦う勇気が沸いてくる。

.....

「メサイア・オブ・デッド」

監督ウィリアム・ヒュイック、グロリア・カツツ

作品紹介：あなたを待つ、あなたの体のどこかに眠っているあなたの知らない世界。

奇妙な街の明けない夜。まるで醒めない夢のようだ。現代人の身体のどこかに息づく悪夢。身体の中の世界の果て、ポイント・デューン。アルビノの大男は悪夢の水先案内人に最適だ。演技では出せないホンモノの異形の存在感が圧倒的。身体全体でヒロインが待ち受ける不吉の予兆を表現している。スーパーのような生活と密着した空間が非日常に侵されると悪夢が際立ちます。ゾンビに似た人々が大勢出てくるが、消費者と納税者の本当の姿ですね。彼らは、人間性を守る戦いを放棄した者たち。魂を失った、消費者として日常を営む権利しか持たない肉で出来た媒体だ。アレはエセ宗教団体に属する信者なのだ。

.....

「めまい」

監督アルフレッド・ヒッチコック

作品紹介：普通に生きている人はここまで考えが及ばない（つまり、脚本家はプロの諜報機関関係者かもしれない）。

3回死んだ女、或いは美しい幽霊のための物語。カメラがないから演じていないとは限らない。だが、カメラがないのに演じている場合、その演じられた真実は、真実との区別が困難になる。つまり、例え真実が演じられていたとしても、目撃者にとってそれは真実以外の何ものでもない。類まれなストーリーテラー、ヒッチコックは、いくつもの真実を幾重にも交錯させ、複雑怪奇な物語を端的にロマンチックにまとめ上げている。時代を超えて知性に訴えかける名作。

.....

「燃えあがる生物」

監督ジャック・スミス

作品紹介：アングラ、かつ実験的なインディーズ・フィルム。

神々の乱痴気騒ぎ。実験するポルノ。大都会の悪夢。文明の悪夢。バカの生態記録。変態のホームビデオ。バカなインテリVS頭のいいキチガイ。ジャンキーとオカマの聖典。精神病院ノグループセラピー。世界中の場課題集合。売れない劇団の発狂。天然記念物捕獲。あるいは、モテないオカマが女とヤれるか実験。そんな感じの、伝説のアンダーグラウンド・フィルムです。出演者はみなオーバードーズ、またはオカマの痴情のもつれにより殺害されています（多分）。

.....

「モーション・ペインティングNo. 1」

監督オスカル・フィッシンゲル

作品紹介：アブストラクト・アニメの傑作。

絵画の過程が良く分かる作品です。もちろん、映像作品としての終わりは用意されているのだが、絵画としては終わらない。終わらない絵画。フィッシンゲルが自分の作品と対話している様子がピンピン伝わってくる。はっきり言ってこの人の集中力、並々ならぬ想像力には恐れ入る。

.....

「モダン・タイムス」

監督チャーリー・チャップリン

作品紹介：史上初の文明批判を取り入れた、チャップリンが批評精神を爆発させた戦前コメディの傑作。

工場のデザインがダダっばい。ライン作業のギャグも近い部分はあるけど先取りしている感じ。あのチャップリンが受け持つ仕事自体何のためにやっているかわからないけれど日常を放棄して

機械に奉仕している姿が呪われているよう。有名な自動食事機のギャグも、便利なようで逆に人間の自由を奪っているという皮肉がズバリ描写されている。チャップリン、鋭い。人間と機械。どっちが機械だ？そんな皮肉がみなぎってる。自分の日常と人生を機械に捧げているような、それしか選択肢のない現代人の悲哀がビシバシ。ギャグが目白押しなのでそんな深刻に見えないけれど文明社会に対する疑念がしっかり仕込まれている。しかしチャップリンは間違いなくギャグ王ですね。犯罪者の護送車の中でも 笑いをとる。すごいとしか言いようが無い。

.....

「モンティ・パイソンの人生狂騒曲」

監督テリー・ジョーンズ

作品紹介：精子のミュージカルは、現場が気まずくなかったか心配だ。

モンティ・パイソンの、日常に非日常を持ち込む作風は映画界随一か。それもコメディという土壌がなせるワザかと思うが。何度見てもつくづく、この高度な笑いも根っこではこどものいたずら心で成立しているのを痛感する。毒も強いがあくまで純粹ゆえの毒であり、ブニュエル、マカヴェイエフ、アルトマンのような悪意は感じないのだ。この作品では、医学界、キリスト教、教育界、慈善事業といった偽善をコケにし、戦争、軍隊、金持ち、上流社会、インテリをおちよくる。パイソンの連中は、権威に挑むというよりは身近にあるモノだから取り上げていると思う。ズルー戦争のくだりはルイス・キャロル以来のナンセンスの伝統が息づいている。監督はテリー・ジョーンズが担当しているが彼の単独監督作では「Hなえっちな変態SMクラブ」もなかなかの傑作だ。

.....

や行

「夜行列車」

監督 イエジー・カワレロウィッチ

作品紹介：詩人は、人が隠そうとするものを暴かずには置かない。

列車には背景も何もわからない、まったく関連のない人々がつめこまれる。車内はまさに誰も見ない劇場状態。さまざまな男女がいさかいやすれ違いを演じるが、完全に幸福な人々は乗っていない。彼らの行き先はどこなのだろう？ 人目を忍びたい気持ちが容貌や行動からにじみ出ているひとくせある男性と何かから逃げているとおぼしきつかみどころのないひとくせどころかふたくせもみくせもある若い女性、マルタが相部屋になる。2人のつかず離れずの探り合いが軽いサスペンスタッチでお互いの服装から光と影としての関係性をうかがうことも出来、興味深い。男女のドラマが展開される車内に妻を殺した犯人が隠れているというイエジー・カワレロウィッチの用意した設定は非常におもしろい。最終的に犯人は列車から逃亡、乗客の男たちが大捕り物を演じ、警察に協力するのだが犯人を囲む男たちの複雑そうな顔。彼らは何を見、何を感じているのか... そういうことを感じ、しみじみさせられた。

誰でも一度はそういう瞬間に立ち会ったことがある という証なのだ。それは車内でもさんざん演じられていたが、つまり、牧師も、医者も、老いも若きも、すべての男たちは犯人に自分たちを見たのだ。この、世の無常を表現するカワレロウィッチの手腕は見事であり、彼を屈指の人間観察家と讃えたい。冤罪で捕まりかけた医者は女性に「あなたは英雄よ」と声をかけられるが浮かない表情だ。一方、この事件の影では、若い少女にアピールする若い水兵のシーンがところどころに挿入される。うまい。両者の対比が、更に人間の無常と悲哀を倍化させている。ある意味、若い2人のやり取りは乗客全員の思い出のように懐かしく、希望のように儚いのだ。

.....

「やさしい女」

監督 ロベール・ブレッソン

作品紹介：語られないドラマを語る試み。

一分のスキもない導入部に震える。ブレッソン、齢70を前にして冴えに冴えています。ドアの音、靴音などこの人にかかると雑音さえ詩に聞こえるから不思議だ。ザンダ扮する女性の遺体が横たわるベッドを前に、夫が出逢いからコトの顛末までを、横に座る老婆に語って聞かせる。

その回想がこの映画の全てである。彼は彼女のことを事細かに語るのだが、すべて彼が知っている彼女に限られている、彼が知らない彼女は決して語られない。

.....

「山の焚き火」

監督フレッド・M・ムーラー

作品紹介：アルプス地獄絵図。

先祖代々の暮らししかできないという事実は、この家族にとってはある種の呪いなのか？しかし、姉は町で暮らしていけるのに自らこの流刑地に留まっている。弟は聾啞者ですぐキレるし、年老いた両親や生活に不便な山を背に自分の好きなように生きればいいのか。人生を思い通りに楽しめばいいのか。結局、ちっぽけな人間は大きな流れには逆らえないし、人生を選べないのだ。どれだけ人間が小さいかは、アルプスと比較すればわかる。その大いなる呪いに身を任せる姉弟。人生を思い通りにできるという考え、それは驕りでしかないが、その世界中の人間の罪を一手にひき受ける2人のいたいけな姿。それがこの映画を厳粛の極みにまで高めている。神のまなざしを感じます。

.....

「闇のバイブル」

監督ヤロミル・イレシュ

作品紹介：日本で生まれたゴスロリの先駆。トイエンが切り拓き、チェコで花開いたシュルレアリズムの息吹き香る名作。

思春期真っ只中のヴァレリーは貪りあう大人が吸血鬼に見える。ヴァレリーはまだ血を吸われたくない。イレシュの筆致は巧みで、悦びと断罪という相反する要素を持つ思春期の少女の変化に富んだ内面を自然現象、日常の風景に重ねて描ききっている。彼女の未分化な性衝動に呼応し、めまぐるしく変化する風景。内的変化を象徴する言語を日常の中に探し、代弁させる伝統的なメタファー映画。ゴシックな中世の街並みが子供に言い寄る不気味な牧師も、血を吸う魔の存在も全て許容してしまう。

.....

「憂国」

監督三島由紀夫

作品紹介：生まれながらのカルト・フィルム。

切腹の場面は未亡人が発禁にしたいくなるのもわかるほどリアル。切腹を見せたいがためにこの映画を作ったとさえ思える。だが、一方で三島が息絶える瞬間は悲壮感に溢れて切ない。畑違いとはいえ、さすがに一流だけあって見せ方とか展開に無駄がない。愛の交歓シーンは艶かしく、切腹シーンは凄惨。この表現力、完成度高い。カルトかくあるべしみたいな風格には誰も勝てない。

.....

「要塞警察」

監督ジョン・カーペンター

作品紹介：反戦映画の極み。

戦争を街中で再現する試み。そうすることで、ジョン・カーペンターは戦争の本質を世に問う。戦争では意味も無く殺しあいが行われ、幼児でさえ殺される。戦地では、アイスを食べている子供がそのまま殺されることもあるだろう。その、子供を殺された親が相手に復讐を試みることなど不可能だ。戦争とはそういうものだから。劇中、娘の父親が警察に駆け込んで震えている姿はまさに戦争に巻き込まれた民間人そのもの。この映画では、被害者たちは意味も無く襲われるが、戦争の本質が冷酷なほど正しく描写されているといえる。戦地では、誰もが敵を命知らずで死を恐れない者のように見てしまう。だが事実は違うし、敵は誰でもそう見えるものだ。戦地では、内に秘められた恐怖心が人の判断を惑わすのだ。戦争時、一番怖いポイントは敵が自分の意志で動いていないことだろう。まるで、ゾンビみたいに。彼らの存在とは、戦争をしたい張本人たちの意志を宿す媒体でしかない。チョロの連中が限りなく匿名なのはまさしく戦地で出会う敵の描写そのままである。不気味な集団による無差別の猟奇的な殺人は、まさに戦争が内包する恐怖そのものであり、戦地での出会い頭の戦闘で感じる恐怖そのままである。そして、戦地では当然、犯罪者も警察官も仲間なのだ。アンチウオーフェアのあるべき型だろう。

.....

「欲望」

監督ミケランジェロ・アントニオーニ

作品紹介：老齡に差し掛かったアントニオーニが自ら自身の内面を振り返る。老いを認めたくない悲しみ。

記憶はカメラの機能を持つ。しかし、記憶は写真とは異なり、都合の良いように変化していくことがある。「情事」以来、アントニオーニはウソをついているが、ここでもいくつかウソをついている。そのたくさんある内のウソをひとつかふたつでも理解できないと、映画の真意が全く理解できないだろう。キーのひとつとして、冒頭のナンバープレートと住所があげられます。ナンバープレートには「734C」とあり、住所は「39」です。ナンバープレートは「73 for Christ Sake」と読み、住所は39年前ということだと考えられます。つまり、謎の「写真の男」と「主人公」の年齢の示唆と受け取ることが出来る仕掛けです。

基本的に「写真はウソをつくことがあるし、真実を写すことはない」というアントニオーニの批判が基調になっている。なぜなら、写真を撮るのは人間だからだ。人間は撮りたいものしか撮らないからだ。密会を撮られてあせる女性のエピソードが興味深い。彼女は地位や外聞を気にしているわけじゃない。彼女は、初老の紳士に対して隠していることがある。それを知られるのではないかと心配しているのだ。彼女は何を隠しているのだろうか？じつは、主人公は彼女が何を隠しているのか知っている。だが、主人公はその事実を認めたくない。認めることが怖いのだ。これは、老齡にさしかかった当時のアントニオーニの心情も加味されていると考えられる。ラストで道化集団がパントマイムでテニスを演じるが、これが非常に示唆に富んでいる。見えないボールが見えたとき、このとき、主人公に何が起きたか？「見えないものを見ること」。これが最後のキーです。

.....

「汚れた血」

監督レオス・カラックス

作品紹介：「羅生門」「情事」を否定して、自分だけの映画を作ること、という「新しい映画」への挑戦。

ドニ・ラヴァンと少女は服装から光と影の関係性を見ることが出来るが、レオス・カラックスはそういう無言の語りに興味が無いらしく、アート系一般のルールや先達が培ってきた手法を無視し、自分のセンス、テンポ、リズムのみで成立するモノ、皮膚の下で自分を成立させている要素、

過去、肉、魂、呼吸、絶望、怒り、憎しみ、記憶、夢、希望など自分に関するモノ、それだけで成立するものを創ろうとしている。というワケで「汚れた血」は映画史から逸脱している。多分に内省的で、カラックス自身が画面のすみずみにまで反映されている。劇中にもたまげているような表情のカラックスが登場するが。悲哀が漂っていておもしろい。愛の無いセックスで感染する病気STBOは致死率51%。心の致死率だろう。カラックスも患っているのか？映画を成立させているテクニック、映画の歴史を度外視しているので、冒頭や中盤あたりまでは今まで見たことのない映画って感じでえらくカッコよかったが、息が続かず、ラストはダメダメでした。

.....

「羅生門」

監督黒澤明

作品紹介：ロブ＝グリエなど、西側の知性を驚かせた。「情事」「黒い罌」に先駆けた新しいタイプの映画。

人々が裁かれますが、それぞれの証言は食い違い、一致することがないがそれは当然です。なぜなら、何も起きていないのです。彼らはみな、自分の心の奥に秘められた願望を見たのです。強姦、不貞、浮気、殺人、泥棒、という禁忌に触れ、その罪の念に苦しんでいるだけなのです。農民、坊主、多情丸は、馬にのる貴族の女と男を見、2人は多情丸を見た。それだけなのだ。志村喬が藪の中を進む時の光と影のコントラストがアブストラクト絵画のようで美しい。光と影が織り成す、藪の中に反映された人々の幻想。風がそよいで枝葉が揺れるたびにキラキラと変わるコントラストのように、夢は現れては消える。自身の追及。何かを理解するにはまず自分のことを理解できていないと何もわからない。ということで、藪の中の事件の真相を知ろうとする行為はすなわち己を知るところとなるのだ。「羅生門」が脚本家デビューというだけで、ぼくは橋本忍を敬愛しているのだが、黒澤と橋本という日本の知性が世界に与えた影響は計りしれない。

「ラ・ジュテ」

監督クリス・マルケル

作品紹介：紙芝居形式の風変わりな映画。亡霊の思い出。

まったく一筋縄ではいかない難解な作品だ。それ以上に「ラ・ジュテ」は紙芝居の形式で見せる世にもまれな映画だが。巷ではテリー・ギリアムの「12モンキーズ」の原型だと言われるが、デビッド・リンチが「マルホランド・ドライブ」でこの作品の骨組みをいただいている事の方が実は重要だろう。つまり、コレは風変わりなSFなどではなく、死人（しびと）の思い出のように不吉で悲しい作品なのだ。まあ、実際には松本俊夫の「16歳の戦争」同様、同じ系統の骨子をいただく作品は多いのだが。詩人は死霊や亡霊を主人公にすえることがあるが、これは能の精神に通じている。いつの時代の詩人も、黙って死んでいく人々の代弁者を務めるものだ。紙芝居形式なのは、ある意味、クリス・マルケルが「これが死者のヴィジョンだ」という自論を

元になっているのかもしれない。確かに映像で見せるよりは画像で見せた方が世界が死んでいるように見える。誰かが死んでも周囲はその人だけが死んだようにしか認識しない。しかし、死んだ本人にとってみれば世界が死んだように感じるだろう。まあ、経験したわけではないので単なる推測だが。あのジェット機の轟音が死者を目覚めさせたのだ！

.....

「ラストムービー」

監督デニス・ホッパー

作品紹介：兄貴ジェームズ・ディーンの遺志を継いだホッパーの「新しいタイプの映画」への挑戦。

いつものいかがわしい雰囲気になレネの啓示を受けたホッパーの新境地。撮影クルーがいなくなった西部劇のセットをうろつく地元住民の図がシュール。アンチハリウッド的で混乱するホッパーがナンセンス戦士という感じで良い。共同脚本は「理由なき反抗」のスチュアート・スターン。

.....

「猟奇殺人の夜」

監督ジャン・ローラン

作品紹介：精神疾患を患うことは犯罪であり、政府に対する反逆行為である。

心に傷を負うことは、現代では罪である。その罪に苦しむ人々が題材となっている。人々が「平和で自由な国家」で心に傷を負うということは、国家がウソをついているということの証明である。悲嘆を覚え、苦悩することは犯罪なのだ。国家に逮捕されないために人々はウソをつく必要がある。だが、生まれてから死ぬまでウソをつき続けるということは、自分の存在さえがウソなのではないかと不安になることである。それが、ヒロインたちの記憶喪失の原因だ。普段はエロと殺人を作風とするローランは、ここでは本格的なアート系に挑戦している。無人のオフィス街を吹き抜ける一陣の風が印象的だが、資本主義・経済的繁栄の象徴である巨大なビル群も、詩人ローランの目を通すと、人々を隔てる象徴でしかないようだ。

.....

「レイプ」

監督ジョン・レノン&オノ・ヨーコ

作品紹介：女性をカメラで執拗に追いかけて続ける。

墓地の散策で始まったり、女優が英語をしゃべれないハンガリー人という設定からしてドキュメンタリーの模倣が意図されている。簡単な打ち合わせがあったものと思われ、女優も演じているのが分かる。が、たとえ承知していても執拗にカメラを向けられることによって演技という認識が不快感に変わっていく。虚構と現実の耐えざる侵食。それこそジョンがこの試みを実践することで意図していたものだろう。冒頭の墓地では、女優はイラついて攻撃的になったり、逆に下手に出て仲良くしようと試みたり、あからさまに逃げたりする。だが、「ほっといてほしい」という彼女の希望は全て拒否される。

カメラマンはハンガリー語でしゃべる彼女の言っていることが分からないのだ。じつは、これはジョン自身の経験でもある。ハンガリー人の女優には、ジョン自身が反映されているのだ。「マスコミに何を言っても通じない。あいつらは言葉が分からないのか。俺はいつも異郷に放り出された気分さ」というジョンの声が聞こえてきそう。マスコミに追いかけてられ、あること無いこと言われて苦悩しているジョンの日常の再現なのだ。

.....

「ロストハイウェイ」

監督デビッド・リンチ

作品紹介：決して日が当たらない世界とは体内か。

猛スピードで闇の中を進む車。彼の行き先はどこなのか？ まあ、その行き先。「夢」を見るのが好きな人なら分かるというものです。つまり。「いい夢」を見るためにはくらい、くら〜い心の奥深くにヌプヌプと頭まで沈まなければならないのですよ。ぼくは悪夢が好きなのでリンチ大好き。あの人はいつも「いい夢」見させてくれる。それにしても悪夢的なイメージというものはそう簡単には出てこないものです。まず、自分に真っ正直にならないといけない。自分に正直になるには大きなリスクを負うことにもなるが。だからリンチは恐ろしくタフな男だな、とつくづく思います。つまり、詩人は戦士でもあるのですよ。

リンチの場合、弱い自分をさらけ出す勇氣、決意、悲愴感、そういうマジなものを引っぱり出して、一方ではギャグやエロを絡めて冗談みたいな雰囲気、ケムにまこうと言ういたずら心もかいま見せる。それはいつものこと。「ロストハイウェイ」では「マルホランド・ドライブ」のよ

うに、芸能界に足をつっこみかけの女、アリスが出てくるけど、彼女はある種、スターにはなれずにポルノに出てマフィアまがいの人間と付き合い利用される憐れな女。アリスの心情は映画では描かれていなかったけど一瞬だけそういう内的な動きを垣間見せた瞬間があった。アリスが、あの天使と死神を同時に演じていた瞬間。

アリスの敵。それは彼女自身の運命だ。彼女はピーターを敵の代役として選び、自分の運命に復讐を試みる。これぞファミ・ファタル。怖いですねえ。怖いけどいいですねえ。パトリシア・アークエットが魅力的なだけに。筋的にはフィルム・ノワールな雰囲気をかもしもいますが、どうもリンチ的にはジョークとして引きあいに出しただけのように見える。基本は、ある男の自分に対する問いかけ、自問自答、混乱、妄想。その全てが入り乱れている。女も同じ人間なのにちょっと好みだと夢を見始める男のサガ。ということで、理想の女に自分のファンタジーが重なった瞬間。その恐ろしさと悲劇が饒舌に語られていました。

.....

「ロリータ」

原作ウラジミール・ナボコフ

監督スタンリー・キューブリック

作品紹介：

「2001年宇宙の旅」以降に見られるキューブリック映画の独特の間（ま）は、風呂場のシーンで形成されたに違いない。ロリータは、ハンバートにとっては希望であり、シャーロットにとっては脅威である。同様に、キルティはロリータにとって希望であるが、ハンバートにとっては脅威である。登場人物はみな、希望の対象に自分の夢を重ね合わせる。つまり、見たいものだけ見て、見たくないモノは見ない。人物全員が、等身大の自分を忘れて夢を見ている。

「ロリータ」は少女愛の物語として悪名高いが、それは表面に過ぎない。キューブリックはナボコフの真意を汲み、批判と嘲笑といくばくかの同情を込めて夢見がちな現代人の悲哀を描いている。ロリータはとんでもない悪女に見えるが、観客は、実際にはハンバートの目線でロリータを見るため、つまり、ハンバートと同じく自分の夢をロリータに重ねてしまうため、そういう印象を得てしまう。だが、懸命な観客なら、つまり自分を夢見がちと自覚している人々は、ロリータがハンバートやキルティ、そしてシャーロットと何ら変わらないことに気付く。頻りに映りこむ、亡くなったヘイズ氏の写真がおもしろい。丸で、無責任に夢を見る怖さは死人だけが知っているとも言いたげだ。人間観察の集大成。

.....

「ロンググッドバイ」

監督ロバート・アルトマン

作品紹介：ハードボイルド探偵ものだが、作品の裏にはアルトマンのハリウッドに対する恨み節が炸裂している。

主人公の私立探偵マーロウが猫をだまそうとするが猫はだまされない。見た目は同じでも中身が違う示唆が興味深い。そして、事件が始まってから猫が消える流れが詩的。アルトマンはたぶん、アントニオーニの「情事」を念頭に置き、換骨代替版をモノにしようと企画していたが映画会社側にそれを拒否されたと考えられる。この当時からアルトマンとハリウッドの確執は頭をもたげ始めていたのだろう。マーロウと友人のレックスの服装が白と黒で光と影を示唆しているし、レックスの死は「情事」のアンナの失踪と同じ意味を持つ。

アンナの友人のクラウディアがアンナを搜索する行程がはからずもアンナの記憶の再現を果たしていたように、マーロウによる死んだレックスの搜索はレックスの記憶の再現として準備されていたはずなのだ。だが、完全なアート系を目指していたアルトマンに会社がケチをつけ、アルトマンはしょうがなくハードボイルドな探偵モノとして仕上げたが、最後の最後に「ハリウッド万歳」の歌を最後の抵抗として挿入した。ラストもあれはあれでおもしろいが、アルトマン自身はぜんぜん違う結末、アントニオーニの「情事」に似た結末を用意していたのではないか。

.....

「ロビンソンの庭」

監督山本政志

作品紹介：

山本政志は、賑わう外人、外国の文化を用いてヒロインの世間との隔絶、孤立感を際立たせている。友達との距離の描写もうまい。靴のヒモを結んでいる間に友人は消え去るのだ。それから廃ビルに迷い込み、そこに住み着く成り行き。それは上京と都会生活にまみれるだけまみれて今まで省みることの無かった自分の内面にはじめて目を向けたヒロインの姿か。廃ビルの屋上での大騒ぎもヒロインの悪夢のよう。ビル内ではヘンな人がうろつくし。このうろつくヒトの説明は一切ないが、あの建物がどういう意味を秘めているかを知ることであの人物の正体もわかろうというもん。

究めつけが恋人の青年が夜中にキンカンを求めて真っ暗なビル内をさすらうシーン。暗闇を怖がり、ビル内で迷ってしまい、いろんな部屋の扉を開ける青年。彼はヒロインである恋人のこと

がまだよくわかっていない。恋人同士なのに知らないことがたくさんあるのだ。建物散策はそういう示唆を含んでいておもしろかった。「ストレンジャー・ザン・パラダイス」の撮影を行い、「ジョニー・スウェード」で監督デビューしたトム・ディチロが撮影を担当。

.....

「ロザリー・残酷な美少女」

監督ジャック・スターレット

作品紹介：荒野に住む野獣のような少女が独立独歩のアメリカ人青年を人里離れた納屋に幽閉する。

「サランドラ」に出てきたような原始的な少女が穴を掘る音。それしか聞えない冒頭はまるで「悪魔のいけにえ」。この作品、たぶん両者の元ネタだと思われます。作品の内容も両者に負けず劣らず刺激的で、名作中の名作と呼びたい。荒野に住む少女ロザリーは、まともなアメリカ市民である男性ヴァージルをハイウェイから遠く離れた荒野の奥にある家までおびき寄せ、片足をオノで折って家に閉じ込めます。街で生活している時には常に蔑んでいるような人々に自由を奪われ、囚われるヴァージル。ロザリーがヴァージルを閉じ込めるのは自由になりたい願望の裏返しだ。

ある意味、ロザリーは自分が自由になれないということを実感している。それは夢でしかないことを実感している。だからヒトの自由を奪うのだ。その悲哀。ロザリーの人物描写は詳細で、彼女は小さい頃から人に優しくされたことが無いのがわかる。「一緒にいたいから」と言って男の足を折るロザリーは他人に優しく出来ないのだ。

男はロザリーに囚われているが、ロザリーは過去に囚われているのだ。「オレは自由の国、アメリカの国民だ。オレは自由だ」と信じている男は罰を受けたのか？人生は思い通りに出来るという考えはおごりでしかないのか？ロザリーはフライという札付きとバイクに乗りヴァージルを置いて出かけるがヴァージルはそのスキを突いてオンボロ小屋からついに脱走する。しかし、沿道にロザリーが立ち尽くしているのを見て、ヴァージルはわざわざ引き返す。男はロザリーに話しかける。彼女がつぶやいた一言「家に帰りたい」。胸に響きました。さすがジャック・スターレット。異常な状況下に折りこまれたユーモアとリリシズム。作家魂を見ました。

.....

「和解せず」

監督ジャン＝マリー・ストローブ&ダニエル・ユイレ

作品紹介：素人役者陣による映画ながら強度の高いスリルが画面に刻印されている。

出演者はプロの俳優ではない。しかし、ホンモノの人間である。ユイレとストローブにとってはそれで充分なのだろう。素人の俳優には顔と身体はあるが、名前は無い。つまり、誰でもない彼らはぼくら自身でもあるのだ。商業映画が求める製作姿勢を完全に放棄しているため、ユイレとストローブの画面は、現実が持つテクスチャーに肉迫している。ストーリーテリングや過去の再現に留まらない、現実を記録するだけのドキュメンタリーでもない。映画制作でしか生まれない瞬間を捉えることが2人の目的だろう。

.....

「惑星ソラリス」

監督アンドレイ・タルコフスキー

作品紹介：ロシア映画の名作。タルコフスキー映画の最高峰。

宇宙船は流刑地のようなだし、登場人物もみな科学者でお互い博士と呼びあうが、誰ひとり学者らしくないのが特徴。みな、ナゾに悩まされながら、学者らしく理論を掲げてナゾに立ち向かうわけでもなく、ただ一般の精神疾患の患者のように苦悩している。主人公のクリスは、ある女性に再会する。亡霊は死を思い出す。これほど思い出したくない思い出もないだろう。クリスと彼女のセックスシーンは禁忌の極みであり、丸でネクロフィリアのように不気味だ。

幻想が「自分は人間だ！」と主張する時、逆に人間は「自分は幻想ではないのか？」と苦悩する。そういうソラリスの怖さもすべて宇宙の未知ではなく、人生や生活に起因している。その点が考えさせられる。つまり、未知は遠い異世界で人類を待っているのではなく、人々の身近に潜んでいる。真の未知とは、知りたくない、或いは、認めたくないがゆえの未知なのだ。つまり、未知（苦悩）は尽きることがない。その、どこに行っても普遍の人類の悲哀をタルコフスキーは巧みに描写してみせた。

.....

「わが兄弟の悪魔の呪文」

監督ケネス・アンガー

作品紹介：アンダーグラウンドの雰囲気濃厚なカルト短編。

人が隠したがる願望を暴く禁忌な映像、その空気。カルトファンはコレがたまらない。この作品には魔術ごっこに興じる熱が入ったケネス・アンガーの姿を見ることが出来るが、まるでアンガーは自分の魂をフィルムに焼き付けて永遠に生きようという願望があるようだ。そういう個人的な願望が反映されていると思う。アンガーの心の中を覗き見したような感覚がある。しかし、一方で50年代SFに出てくるマッドサイエンティストの実験を見るようで微笑ましい。妖艶とか華麗という芸術とは無縁の子供の秘密基地を見せられた仲間意識を見る想いだ。音楽はたしかミック・ジャガーが担当していると思うが、単調な電子音の繰り返しがなかなか良い。

.....

「忘れられた人々」

監督ルイス・ブニュエル

作品紹介：「生意気な子供に見せて泣かしたい」かつてこんなことを言った人がいました。笑

重く横たわる、魂を失った身体のような廃墟。その廃墟から分裂した浮浪児たちは血や肉から解放された反乱・混乱・無秩序である。かつて人間の一部分を構成していたが、機能することを忘れていた臓器だ。ブニュエルの外科手術は、文明という肉の深部に沈められた反乱という形のない臓器を抉り出す。友人を殺したり友人の母親と寝る人でなしのハイポだが、彼もじつは、ぼくらと同じ夢を見ていただけだということを、ぼくらは知るので。

.....

「私の愛した魔女」

監督ボブ・ホスキンス

作品紹介：「ロジャー・ラビット」「マリオ・ブラザーズ」で主演を演じたボブ・ホスキンス監督作第一弾。

「ロジャー・ラビット」のボブ・ホスキンス初監督作。ホスキンスといえば、ハリウッド御用達のメジャーなおじさんみたいなイメージがある。だが、この作品はそういうイメージに反して暗く、重い、反戦映画の傑作である。直接戦場を描く反戦映画というのは評価しないのだが、その点、ホスキンスのこのやり方があります。中でも脱走兵の少年が幼い少女と出会うくだりはかなりコワイ。その優しさに満ちた情景が一転して牙を剥く辺りはセンスあり。あと、あのラスト。最初に見たときは涙を禁じえなかった。ホスキンスは一流の役者というだけでなく、本物の詩人だと思いました。詩情を捉えている。

.....

「わらの犬」

監督サム・ペキンパー

作品紹介：「バイオレンスは不快であるべきだ」という観点からすれば真実の映画である。

一部のハリウッド映画とかゲームとか暴力を楽しいと思わせるものが巷に溢れているが、これは暴力の持つ気持ち悪さ、怖さ、そういう暴力の本質を無慈悲なくらいリアルに捉えている。イギリスのド田舎の、知性も知能もクソもないという、やりたいことはやるがやりたくないことはしねえ、みたいな荒くれが支配する閉鎖的な土地。そこで、理性が勝るところを証明しようという、単なる驕りにしがみついているインテリ男をホフマンは見事に演じている。この、ペキンパーの内面にダメージを与えるような暴力演出は「悪魔のいけにえ」と同じく、映画史上有数のショック度を秘めている。ハリウッド系は半分寝てても分かるが、これは例外。ガッツが必要だ。最後の言葉は非常に詩的である。

.....